
精霊からの世界の見え方

あべにゅー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊からの世界の見え方

【Nコード】

N6180U

【作者名】

あべにゅー

【あらすじ】

いつもどおりに俺はジャージで床に就いた。夢の中で聞こえた不思議な声。

大切な何かを求めるような切実な願いの言葉。

それに惹かれ、目を覚ました時立っていたのは見知らぬ暗闇だった。

『こりゃ、夢か』『いいや、違う』

そして目の前に立つのは一人の少女だった。

異世界に召喚され、「人間」ではなく召喚された「精霊」として生

きることとなった少年の物語。

第1話 「名前を教えて（前）」（前書き）

完全に思いつきではじめてしまいました。誤字・脱字があればご指摘ください。黙って直したりしますので！また設定等穴があるかもしれないですが、スルーもしくはこちらもご指摘を（書きかえられるかはわかりませんが…）

通勤、通学などの暇つぶし程度に気楽に読んでいただけると幸いです。

第1話 「名前を教えて（前）」

手元の携帯ゲーム機の液晶には一対の飛竜が俺の分身たる狩人を狙っていた。あと一回やられればクエスト失敗となる。ここは慎重に…

「ちょ、ハメ」

…慎重になるまでもなく我が分身は葬られていた。画面にはクエスト失敗の文字が踊っている。

「いやいや、あんな息の合った攻撃避けられるか」

まさか二方向から同時に火球が飛んでくるとは、流石夫婦だ…リア充爆発しろ。

いくら竜とはいえ、カップルとは俺のような独り身には憎い。

「つと、もうこんな時間か」

ベッドの脇に置いた目覚まし時計がさしている時間は午前2時。明日も学校があるしもう寝るか。

俺は悔しさを噛み締めつつも部屋の明かりを消し、眠りの海へ落ちていった。

夢を見ている。明晰夢というやつか、意識はうつすらとだがある。

《汝は我が分霊》
わけみたま

どこからか響いてくる言葉は俺が初めて聞く言語だ。

《汝は我が剣》

だというのに内容はしつかりと頭に入ってくる。

《汝は我が盾》

凜として、まだ若さも感じられる女性の声。

《我は汝の分霊》
わけみたま

歌うように言葉を詠む様に自然と聴き入ってしまう。

《我は汝の担い手》

彼女の居る所へ、と精神は彼女の元へ惹かれ始める。
カラダ

《我は汝の灯》

それはまるで羽虫が火の中へと身を投げるかのように。

《我は何時如何なる場所でも汝と共に在る》

行っではいけない、と理性が叫んでいるがそんなことはどうでもいい。

《我は汝を受け入れる》

俺が生まれたのはきっと彼女に出会う為なんだから。

《汝は我を愛して欲しい》

俺は彼女を愛する為に生きてきたんだから。

《誓う》

だから

《精霊よ来たれ！》

俺は日常を踏み外す。

微睡の中から抜け出すと薄く紫色に光る魔法陣の中央に寝間着のジヤージのまま俺は立っていた。
辺りは暗く俺の前に立つ人影以外には見ることが出来ない。しかし多くの人間の気配は感じ取れる。

『…こりや夢か？』

さっきまで俺は自室のベッドでゲームをしていたはずだ。つまりこれは夢ってことだな、うん。

「いいや、違う」

『ひいんッ!？』

とととつ突然声を出すなよつ。

「……それは貴方の世界の挨拶なのか？」

薄闇の中から一人の少女が俺へと声をかけてきた。

「む、それよりもだ。貴方は私の召喚に応えてくれたのだな」

しょうかん……召喚？

だんだんと目が暗闇に慣れてきて目の前に立つその少女の容姿がわかってくる。

魔法陣が放つ光を反射して艶やかに輝く腰まで届く黒い髪。

少し太めの眉に強い意志を宿した黒い瞳。

今は嬉しいことでもあったのだろうか、その瞳はほころんでいる。

そして綺麗な鼻と瑞々しい唇。間違いなく美少女である。

歳は高校生ぐらいだろう。ただ服装はローブ。

「名前を教えて頂けないだろうか」

凜とした声は先程のもの。だが、状況が解らない以上迂闊なことは出来ない。

ここは疑ってかかるべきだ。

『……』

迂闊に何か言って大変なことになりたくないしな。

「教えて、くれないのか？」

『ども、時田^{ときた}彼方^{かなた}です』

ポロツと本名言っちゃったー！
美少女の質問を無下に出来るかつ。

「トキタカナタ？」

『時田が姓で彼方が名だよ』

「じゃあトキタ様」

様って…

「貴方の属性を教えてもらえないだろうか？」

黒い瞳は先程と違い不安に揺れている。
だがしかし召喚といい、属性といい先女が何を行っているかわからない。
だんだんと混乱してきたぞ。

『ごめん、何を言ってるのか俺には全然わかんない』

「え？」

「とりあえず召喚は済んだんだ。次の奴もいるんだから今日はさっさと自室に戻れ」

啞然とする少女と俺の後ろから男の声がした。

「ですが先生ッ——」

「落ち着け。召喚直後に精霊のほうに記憶やら意識に障害が起きるのはそこまで珍しいものじゃない。とりあえずリンクをじっくりと確認しな」

「…わかりました。トキタ様こちらへ」

『はあ』

先生と呼ばれた男に説得され少女は渋々と歩きだした。

俺だけ置いていかれているようで気に入らないが今は彼女に着いていくべきなのだろう。

ちらりと先生のほうを見たが部屋の暗さで表情を読み取ることは出来なかった。

彼女の後を追いつ、暗い部屋を出ると石造りの廊下になっていた。某眼鏡少年魔法使いの学校のような。

外はまだ太陽が中天にあり、昼ごろかな。

廊下にはローブ姿の少年少女が20人ほど並んでいて、部屋から出てきた俺を驚いたように見ている。

「人型ってかなり高位の存在なんじゃ」

「あいつ召喚まで規格外ってどんだけ化け物だよ……」

「化け物なんて聞こえたらどうするの……」

「こ、こっち見てるよっ」

『えーと、こんにちは？』

とつさに愛想笑いを浮かべ彼らに挨拶をした。

「「「……」」」

シカトされた（´ω、）

「トキタ様こちらへ」

例の黒髪美少女が俺に声をかけてきた。立ち尽くしていた俺に痺れをきらしたのだろう。

ローブ集団を背に俺は彼女についていくことにしよう。

彼女の後についていくと、これまた古めかしい部屋に案内された。

ベッドや机、ソファなど必要最低限といった風ではあるが人が暮らしている生活感があつた。おそらく彼女の自室なのだろう。

部屋につくと俺がソファに彼女がベッドに腰掛けた。

そうして彼女は今まで我慢していたかのようにいきなり質問を重ねてきた。

「貴方は精霊ではないと？」

『うん、ただの人間だよ』

「で、ではなぜ精霊召喚に？いや人間ならば何処から来たというのだ？ラック共和国か？それともリンドウか？」

『落ち着いてよ。ラック共和国とかリンドウなんて知らないよ俺』

「ならば記憶を失っているのか？」

『うつん、記憶はしっかりとあるけど……』

「此処とは違う世界ということか？」

『そうなるのかな』

「では偶然私の召喚に……」

ひどく落胆した様子で少女は呟いた。

それはまるで親族を失ったかのような表情で罪悪感を覚えた。

俺はこの世界に召喚されたなどと聞いても信じられない。

訳のわからない状況に泣きたい気分だ。

でも彼女のそんな表情を見ていたくなかった。

『君の名前を聞いてもいいかな？』

「え」

『俺ばかり名乗ってるのも不公平だろ』

重い雰囲気はどうにかしたくて笑いながら尋ねる。上手く笑えたかは不安だが。

「ふふ、それもそうだな」

ほんの少しだが笑ってくれた。

「私の名前は」

！

突如近くで鳴り響いた轟音で少しだけ明るくなり始めていた空気は
吹き飛んだ。

第2話 「名前を教えて（後）」

部屋を飛び出て、二人で轟音の聞こえた方へと走り出す。
音源に近づくにつれ建物の揺れが酷くなっていく。

状況はわからないが一人で走っていく彼女を見捨てられずに流れにまかせるまま走る。

体力に自信があるわけではないのに不思議と息切れはしなかった。

たった今歩いてきた道を逆行し走っていくと向こう側から先程のローブ集団が走ってきた。

「何があつたッ！」

集団の先頭に立つ少年に黒髪美少女（仮）が尋ねるも怯えて首を振るばかりで要領を得ない。他の者達も我先にと逃げていった。

『君も逃げたほうがいいんじゃない？』

「親友が居ないんだ！」

叫ぶように言うと彼女はまた走り出した。

地響きにも似た叫び声の元へとたどり着くのに長い時間はかからなかった。

眼前に広がっているのは破壊された建物とその中心に佇む少女。
黒髪美少女（仮）と同様のローブを着ているが纏う雰囲気が大きく違う。

そして少女首には黒いどす黒いナニカが巻き付いている。

「ティー！何が…」

『あの黒いネックレスでオシャレ？』

「こんな時になんだ！そんなものティーはつけていない——」

「馬鹿野郎！何しに戻ってきた！？」

瓦礫の中から複数の人影が起き上がってくる。叫んだのはさっきと
雰囲気が大きく違うが先生と呼ばれた男だ。

「先生、何があったのですか？」

「召喚失敗だ！憑かれちゃってる！」

叫びあう二人を尻目に首の黒い輪が蠢きはじめた。
輪からでた黒塊が幾重にも別れ尖った欠片に別れ始める。

「憑かれてるって、何にですか！？彼女ほど《夜》に感応が高い者
は他にいない！」

欠片は細長く、槍の穂先のような形をとる。

ざっとみたところ20を優に超える。それらの先はただ無差別に様
々な方向をむいている。

「だからだつての！でてきたのは精霊どころじゃなくて《夜》の蛇
だつた」

「なっ！」

先生はそれだけ言つとまたティーと呼ばれた少女と向き合った。

「ガキは引っ込んでな。面倒だが生徒を助けるのは先生の仕事だ」

欠片の周りに青い風が集まり、黒かった欠片を満たしていく。

「ちっ、流石は複合属性《夜》。氷も自由自在か」

先生が呟くのと同時に氷の槍は辺り一面に降り注いだ。

爆撃とでも形容できるソレラ。

偶然にも突っ立てた俺には当たらなかったが、当たったらとても痛いと思う。昇天クラスで。

「つつっ…」

砂煙で視界は悪いが目の前に黒髪美少女（仮）がたっていた。まるで誰かを庇うように。

『お、おいっ！大丈夫っ？』

「よかった、無事か？」

脇腹辺りから血が流れているというのに俺を心配してくれている。

『その怪我…！』

「これぐらい」

大したことないとも言つつもりだったのだろうが、体は正直に崩

れ落ちた。

咄嗟に掴み体を抱き抱える。いわゆるお姫様抱っこの形で。

『いったんここから離れよう。ティーさんは先生に任せて』

「だ、めだ……。早く、しないと彼女の、精神が死んでしまうつ」

『我儘言うな。君1人じゃ何もできない』

「だ、がつ——」

風が吹き、またティーの姿が露わになる。黒いナニカは先ほどよりもまた太くなっている。

そしてまた、黒い欠片が首の黒い塊から生まれる。

今度は先程のように無軌道に、ではなく黒い大きな腕となり俺達の方へと向かってきた。

『うわっ、何これ？』

彼女を抱えたまま横に跳んで避ける。

幸い黒い腕は鈍重な動きで避けるのは難しくはなかった。

「いきなりどうしたんだ？」

『どうしたって、アレが見えないのか？』

質問されて、余計にわけが分からなくなる。

「アレと、はなんだ？」

『あんなでつかい腕が見えないのか？』

「腕…」

『わっまた来た』

またも彼女を抱えたまま避ける。

「…なに、も見えない」

『増えたっ』

またティーの首元をもとに黒い腕が生えてきた。
何アレ！？新手のスタンド使いか？

「トキタ様」

『カナタって呼んでくれるとうれしいかな、なんて！』

増えた分、今までの倍の頻度で黒い腕は俺たちに迫ってくる。

「その黒い、腕はどこから、生えている？」

「があっ」

不幸にも俺が避けた腕に当たってしまった人がいたらしく背後から
苦悶の声があがった。

「これは、物理攻撃ではない…のか？ならば精神攻撃？ともかくその黒い腕はどこから？」

『ティーちゃんの首元の黒いわつかから生えてるじゃん』

「黒い……まさか、見えているのか？」

『ん？うわっ、なにが？』

時折ぶつぶつと呟きつつ彼女の表情が段々と明るくなっていく。

『もしかして解決策でも考え付いた？』

「おそらく、それは暴走した《夜》の精霊だろう。そいつを倒せば」
さらに腕がもう1本増えた。

もう避けられん！！

考えないようにしてたけどさっきから腕に巻き込まれたひとの悲鳴が聞こえまくってるし。

『あれをぶっ壊せばいいんだよね？』

「ああ、私が拡散させるから——」

『よっしゃ、任せろ！』

「時間をかせいで、ってキャー——」

返事を気にするまでもなく俺は前に進む！

ティーちゃんを助けるためにっ！

正直もう避けるのも逃げるのも無理っぽいからなんて理由じゃないですよ？

暴れまわる黒い腕は緩慢な動きでつけ狙ってくる。

しかしそのスピードと太さは最初の1本目と比べると一回り以上に成長している。

大人がゆったりと歩くようなスピードから小走りに直径1メートルほどから1.3メートルほどに。

このままでは、じり貧だ。

1本目、素直に横を走り抜ける。

2本目、下半身を掻つ攪うように左から振り抜いてきたものをジャンプして避ける。

そして空中で身動きが取れなくなった俺たちを真正面から突くように3本目が向かってくる。

自分でも驚くほど跳べてしまい滞空時間がなくなり、着地するに時間は足りない。

ならばどうするか。

はっ、もうどうにだってなっちまえ！

俺はその黒い腕自体を掴み――

『うあああああ！』

「空中を走って？」

その上を駆け抜ける！

あっという間にティーの元へとたどり着く。

「ティー！聞こえるか！？」

俺の腕の中から彼女がティーに呼び掛けるも反応がない。

『この黒いのが元凶なんだよね？』

「ああ、いますぐ精霊が帯びたマナを拡散させる術式を……」

『どっこいしょー!』

黒塊の中に俺は手をつ込んだ。

その際、彼女は俺に抱きつくようなカタチで転倒を免れた。

真正面から美少女（ストライク）が抱きついてくるなど人生初だーとか胸のふくらみが押し付けられて…？、などと不純なことは考えてませんよ（優越感）。

肘辺りまで手をつ込んだ瞬間、墨汁が紙にしみていくように俺の腕に絡みついてきた。

黒塊はヘドロのようにドロドロとしている。

『うわぁ、気持ち悪い』

「て、手が!」

この黒く染まったのは分かるんだ、などと考えながら黒塊の中を探つてると細長い縄のようなものを掴んだ。

『ねえ、なんか細長いのが捕まえたんだけど。…気持ち悪いから手抜いていいかな?』

腕はヘドロ黒く汚れていくし、

「細長い?まさか《夜》の蛇…それを引き抜いてくれ!」

『え、ほんとにいいの?なんか動き始めたけど』

「いいから早く!」

『はいっ!』

ポンっ、と音を立てて腕を引き抜いた。

手には一匹の黒い蛇が居る。ぐったりとして動く様子はない。

その直後ティーの周りで渦巻いていた黒い何かが霧散しはじめた。

「ティー!…っっっ…」

崩れ落ちるティーをささえるべく黒髪美少女（仮）は飛び出したが自分も怪我を負っているの忘れてしまっていたらしく彼女自身もティーとともに体勢を崩す。

『あつぶね』

咄嗟に蛇を離して2人を支える。

意識を失った人はかなり重いと聞いたことがあるが、2人ともとても軽い。

ティーのほうには目立った外傷はない。

先程までの刺すような雰囲気はなく年相応の（年齢はしらんけど）寝顔だった。

「ティー…」

『彼女は大丈夫だから、休めよ』

自分が怪我をしてまで誰かを守り、誰かを助けようとしたんだ。もう眠ったっていいだろう。

安心するように彼女に諭すと、緊張の糸が途切れたかのように意識を完全に失った。

その表情はとても幼い寝顔で、安らかに微笑みながら眠るこの子を
守りたいと思った。

2人を支えているとすぐに人が集まってきた。

俺が彼女に召喚されたことを伝えたと驚かれながらも納得してくれ
たようで深い詮索はされなかった。

医務室まで運ばれる2人について行った。

ティーは外傷がなかったが早々に別の部屋に連れて行かれた。

俺は黒髪の娘が治療されるときこそ別室に移されたが（服を破って
治療する為、と女医さんにおいやられた）ベッドで横になってから
はずっと彼女を見守っていた。

知り合いが一人もおらず行く場所がない、ということも理由ではあ
ったが彼女を1人にしたくなかったから。

保健室らしき部屋の窓に差し込む光がオレンジ色に染まってきた頃、
彼女が目を覚ました。

「じ、こは？」

『保健室……であってるのかな？安心して。ティーちゃんは無事だよ』

目を覚ますと真っ先に聞いてくると思ったので先に答える。

「そうか。それは良かった……」

彼女は安心したように微笑んだ。

『…………』

「どうかしたか？」

ときめいてなんかいないよっ。

『うつん、なんでもないよ。それと』

「？」

『名前を覚えてくれないかな？』

先程の機を逃してしまったため、かなり照れくさいが尋ねずにはいられなかった。

「なんだ、そんなことか」と彼女が笑う。

その笑顔がまた魅力的でぱりぱりと頭をかいて視線をそらす。顔が赤く染まったのはきつと夕陽のせいだ。

夕焼けの教室で彼女は起き上がり俺を正面から見据えて微笑む。

「紹介が遅れた、私の名前はリン。リン〓ソラルだ」

『よろしく、ええと…』

「親しいものはリンと呼ぶ。好きに呼んでくれ」

『じゃあリン。改めて、俺の名前は時田彼方。彼方って呼んでくれ』

「ああ、カナタ」

『なんだよリン』

唐突に俺らは笑い出した。

俺は初めて頼れる人ができた喜びで。

リンがなぜ笑っているのかは分からないが、彼女の目も俺と同じように安心しているように穏やかだった。

第2話 「名前を教えて（後）」（後書き）

戦闘シーン！と言えるのでしょうか…。続きは来週頭ぐらいまでに
は投稿させていただきます。はたして需要はあるのか（汗）

第3話 「願い事」(前書き)

感想を書いて下さった方ありがとうございます！
調子にのって連日投稿です。

これからは週1ぐらいのペースで更新していくつもりです。

第3話 「願い事」

リンが目を覚ました後、安静を条件に彼女は自室に戻ることを許された。

女医曰く

「こんなトコに一晩中居たら体内の循環が悪くなるわ」

だそうだが、自分の保健室しんくわをこんなところ呼ばわりはどうかと思う。またも彼女についていき、先程の部屋に入る。

廊下の窓から見える景色は暁を終え、夜の帳が下りてきていた。部屋は暗かったが、彼女が黄色く光るランプを持ってきてくれたので明かりには困らない。

「ソファにでも座ってくれ」

『ありがとう』

「いろいろ聞きたいことがあるんじゃないか？」

リン言うとおり、彼女が意識を取り戻してから考えないようにしていた疑問が脳内で巡っていた。

ここはどこか。なぜここにいいのか。俺は戻るのか。さっきのは何なのか。

『顔に出てた？』

「捨てられた子犬みたいだったぞ」

『どんな顔ですか？』

からかう彼女の顔には疲労は見えない。直感だが彼女は無理をしていないだろう。

これなら心おきなく質問できる。

『聞きたいことはいくつもあるんだけど…取り合えずここはどこ？』

「王立教育機関エクリプス魔導学校、では物足りないな。ええと――」

俺の知りたいことの意味を読み取ってリンは説明をしてくれた。

俺が立っている場所は、この世界の約半分を占める巨大なU字型の大
陸の上にある。

そしてその大陸には3つの巨大国家が存在している。

西部を治め、帝政を布く竜胆。リンドウ

ここのイメージは戦前の日本に近いようだ。帝を頂に置き、覇道を
唱えている。

そして、今俺がいる大陸東部の国。天空王国アスカ。

実際に空に浮いているから「天空」とついているのではなく、宗教
的な意味合いなのだそうだ。

国力は他の2国家とあまり変わらないが、魔道の技術で他を圧倒し
ているらしい。

小国が大国に抵抗するため力を合わせ、1つの国家を形作っている
ラック共和国連合。

建前では民主主義国家らしいが、実際のところは上層部の一派が牛

耳っている状況。

大陸南部で2つの国に挟まれているためどちらともと国交があり、非常に富んでいる。

彼女の説明はとても分かりやすかった。

魔道とか新しいキーワードが出てきて混乱させてくれたが。

いずれの国も俺は聞いたことがなかった。

一応日本についても尋ねてみたが、彼女は聞いたこともない様子である。

「この大陸上の3ヶ国のほかにも小さな国家はいくつかあるがそれほど文明をもつ国は存在しないよ」

当然のようにランプをつける様子から想像は出来たが「科学」という概念はあまり発展していない。

「なんにせよ、この世界でこれらの国を知らない成人はほとんどいないだろうな」

『さいですか…』

日本もなく、科学も発展していない。

認めるしかないのか。

「君はこことは違う世界から来たんだろうな」

こともなげに彼女が言い放った。

『異世界とか信じてるの?』

「まあ、そもそも精霊の召喚だって異世界に住む精霊を呼ぶ儀式だからな」

『なるほどね。じゃああの歌が召喚のための詠唱ってやつ？』

「いいや、精霊召喚にはそもそも詠唱の必要はな……もしかして聞こえていたのか？」

『へ？そりゃあしつかりと。でも詠唱じゃないんだったらあれは——』

何かに願うかのような声だった

「わっ、わすれてたっ！

あれは私オリジナルの召喚術式でな、マナのラインを通す時に詠唱を加えるとそれはもう強い精霊を召喚できるというとっても便利でお手軽な方法で高位存在が呼べるものでな、別に家族が欲しかったかと思っていたわけではなくてなっ」

冷静だった態度はどこへやら。

真っ赤に顔を染めて非常に分かりやすく「願い」を教えてくれた。

『愛してほしいってのはそういうわけだったのか……』

「だっただだから。それは！」

恥ずかしがる表情はとても可愛らしくまたからかいたくなった。しかし、アレはとても切実な願いだった。

知り合って間もない俺ではその重さを推し量れない程に。ま、だからこそ惹かれたのかもしれないけど。

『はいはい、わかりましたよ』

「わ、わかってないだろ！」

『つまり、俺は君に呼ばれてここにいてわけだな』

「いや、だから…」

今は彼女の過去（さつ）を掘り下げるべきではないだろう。

『それはともかくまだ質問してもいい？』

「……構わない」

『俺はここから元の世界に帰れるのかな？』

とくに待つてゐる人がいるというわけではないがあれでも生まれ育つてきた世界だ。

愛着（あいしやく）がないと言えはウソだ。

だが、いわゆる異世界召喚系のもものでは元の世界に帰れることはあまりない。

そういう読書経験が役立つとは思えないが一応聞いておきたかった。

「無論だ。帰れないのでは拉致と変わりがないではないか」

『だよ、俺は一生この世界に……って帰れるの！？』

釣りじゃないだろうな？

「当然だ。精霊召喚というのは相互理解の上で行われる。いきなり初対面の人間に一生いてくれ、と頼まれてはいそですかと答えてくれるような馬鹿はいるわけない」

俺は声に惹かれて何も考えずに来ちゃったんだけどね。考えなしの馬鹿ですいません。

「というか世界を越える感覚なら私よりカナタのほうが優れているだろう？」

『俺は意識的には無力で無能な一般人なのに、世界を越える方法なんてわかるはずがないよ……』

「いや、君は無力なんかじゃない！君は私とティーを助けてくれた。その君が無能であるわけがないだろう！」

リンちゃん、論点ずれてるよー。

「君がいなければ彼女はっ！」

『落ち着いて、そのことはおいおい考えるよ。ありがと』

まくし立てるリンを落ち着けるため彼女の肩を掴んで微笑む。

「……いいや、私こそ済まない。今はこの話をしていたのではなかったな」

彼女はすぐに落ち着いて俺の意図を察してくれた。つくづく頭のいい、そして優しい娘であると思う。リンの肩を離し空気を変えるためにも質問を重ねる。

もとの世界に帰れると分かっただけでも僥倖だ。

『この世界に魔法は存在するんだよね』

質問するまでもなく実際に目の当たりにしているので確認のようなものだけだ。

「ああ、存在する」

また説明パートに入りまーす！

この世界の魔法は大きく2つに別れる。
その2つとは

《日》と《夜》

《日》が司るのは《火》《土》《光》

《夜》が司るのは《水》《風》《闇》

たいていの魔法を使える人々は《火》《土》《風》《水》のうちどれか1つの属性を持っている。

1つの属性を持つ者はそれぞれの属性以外の魔法は行使できない。

また《光》もしくは《闇》を持っている人は1万人に1人いるぐらいで、それを持っているだけでアス力では確実に職を得られる。

そして属性《日》もしくは《夜》の魔術師とはこれらが司る3つの属性をあわせもつ者をさす。

《日》と《夜》どちらも当然《光》と《夜》よりも貴重な人材で10万人に1人いたらラッキーだ！くらい。

『ちなみにリンの属性は？』

「私は《日》だ」

当然のように言ってるのけるね…。

また、それぞれの属性には代表シンボルともいえる精霊が存在する。

その属性と一定以上（ラインははつきりしていないらしいが）に感応が強ければ精霊を召喚できる。

《火》には火蜥蜴サラマンダー
ノーム

《土》にはルビー<rb>土竜

</rb>><rp>(</rp>><rt>光</rt>><rp>)

</rp>></ruby>にはエンジェル
<rb>><rp>(</rp>><rt>水</rt>><rp>)

</rb>></ruby>には海獣リヴァイアサン

《風》にはルビー<rb>鎌鼬かまいたち

</rb>><rp>(</rp>><rt>闇</rt>><rp>)

</rp>></ruby>には影シャドウ

そして

《日》には日輪サンシャイン

《夜》には月光

といった具合に。

召喚を行うとたいていの場合代表シンボルと同一の精霊が現れる。

だが、例外的に召喚した者と精神的に結びつきが強い精霊が選ばれることもあるらしい。

この精霊召喚には下手をすると精霊のマナに召喚者が耐えきれず、ティーのように暴走してしまうリスクをはらんでいる。

「魔法と精霊に関してはこんなところか」

俺が理解できず何度も同じことを聞き返したため結構時間がかかってしまった。

『頭が痛い』

知恵熱というか、一気にいろいろ詰め込みすぎたかもしれない。

「私もまだ学んでいる身だからな。説明下手で申し訳ない」

楽しそうに謝るリンの言葉には全然誠意が感じられない。

『思っていないでしょ』

「ふ、これでもまだまだ冒頭程度だな」

『どこでも勉強つてのは疲れるもんだな…』

「カナタも学生なのか？」

『そだよ、男子校に入ったのは失敗だと今でも後悔してる』

「本当にただの男の子だったのだな」

『男の子って、そういうリンは何歳だよ。どうせ俺とたいして変わらないだろ』

「女性に年を尋ねるとはね」

やれやれと肩をすくめる彼女の仕草が若若しい容姿と合っており、笑いを誘った。

「む、なんだか馬鹿にされている気がするぞ…」。

ちなみに私はこの世に生を受けてから100年と5カ月だ」

ぶうつうつ！

お茶でも飲んでいたら今頃リンの顔に盛大にぶちまけていた…。
平然と言つてのけた彼女は俺の返答を待っている。

すなわち「お前はいくつなんだ？」である。

『18歳』

悔しがりながらも年齢を答え、リンを窺う。

そういえば彼女は喋り方も最初から独特だったしこの世界のヒトの中には長命種もいるのかもしれない。

「ふふふ、冗談だよ。納得しないでくれ。私は18歳の真正正銘ただのオンナノコだよ」

これまた楽しそうにリンは笑った。

そんな雑談をしていると、窓の外が明るくなってきた。

「朝か」

『早いね。ここは学校なんだろう？授業とか大丈夫なの？』

「《日》の魔術師を舐めないでもらいたい」

彼女とそんな軽口を交わしあっていると突然ドアの扉が開け放たれた。

「リンちゃん大丈夫！？……ってリンちゃんが男の子連れ込んでる

「――！！」

ローブ姿からラフな格好に着替えたティーちゃんだった。
今はまだ早朝なんですが…。

「テ、ティーこの人は――」

「せーん―せー！リンちゃんが！あの奥手で、鈍感天然のモテ女の
リンちゃんが、おとつ、大人の階段を
――！！」

リンが何かを言いきる前にティーちゃんは走り去って行った。
なんか喚きながら。あとドツプラー効果も発生させつつ。

「あれで悪い奴ではないんだが」

リンの言葉には諦めが見て取れた。

第3話 「願い事」(後書き)

いろいろな小説を読んだと毎回様々な魔術理論のようなものが出てきますよね。難しいですね…。

今回は大まかな説明だけでしたが、後々詳しく書かせていただくつもりです…機会があれば、ですが。

彼方の能力が分かるのはいつになるのやら。次話までにできたらいいな…。

リンはほんとに18歳です。ねんのため。

一ヶ所、リンとティーが逆になっているところがあったので修正しました。

第4話 「大丈夫、ここにいる」(前書き)

週1で更新するつもり！などのたまっていましたでしたがいつの間にかお気に入り登録が3件に増えているのを見て、書いてしまいました。コメントして下さった方、お気に入り登録をしてくださった方、読んでくださっている方ありがとうございます！

第4話 「大丈夫、ここにいる」

「えっへへー、私の誤解だったんだー」

『「……」』

まっつたく悪びれる様子もなくティーちゃんはそう言ってのけた。ウィンクとちよつと舌を出しつつ片手で自分の頭をコツンと叩くという日本の古きよき伝統の体現だった。少女漫画的な意味でね。

「てへ ぺろ」と言えば伝わるだろうか？

いや、これで伝わらなくても良いのだが。

暴走時には首の黒い輪と謎の威圧感で容姿をじつくりと見るものがなかったため普通にしているティーちゃんを見ると初めて見るような気分だ。

ティーちゃんはリンのように黒髪黒瞳ではなく、髪は薄い茶色で瞳も茶色。

可愛らしい、と表現出来るその顔はコロコロと変わり小さな子どものように、ツインテールの髪型が似合っている。

リンの同級生らしいが、そうとは思えないほど身長が低い。

俺もそこまで高いほうじゃないが——四捨五入すれば170cmとだけ言っておこう——並んだら俺より頭1つ小さい。

だけど出るとこはしっかりと出ていて俺の見立てではEを確実に……ゲフンゲフンとっても女性的な体つきをしています。

彼女は自分の召喚にリンが巻き込まれた、と目を覚ますと聞いて後の説明も聞かずにリンの部屋へ走ってきたらしい。

その為格好はローブではなくゆったりとしたジャージに似た服装。

そのままティーちゃんはひとしきり騒いだ後もう一度リンの部屋に戻って来て今に至るという訳だ。

その際誰も起きてくる気配が無かったのはこれが日常だからなのか。それともたまたま周りの部屋には聞こえなかっただけなのか。リンの諦め具合から察するに前者なのだろう。

「いやいやー、こんな時間までうら若き男女が一晩中熱くなっているなんてー」

「誤解しっぱなしじゃないか……。ただ話してただけだ」

「誤解なんてしてないよー。つまりは一晩中睦言の応酬だったんだねーっ」

「もしかして確信犯か？」

時間が経つにつれリンもティーちゃんも喋らなくなっていった。俺は最初から1度たりとも口を挟むことは無かった。ガールズストークに入れる訳ないし。

「……」

「……」

「…ま、なんだ。お前が無事で良かったよ、ティー」

「ありがとう、リン。リンも無事でホントーに良かった」

結局、2人とも照れ隠しであんな会話をしていたのかもしれない。リンが切り出すとティーちゃんがリンに抱き着いた。

そうしてティーちゃんはリンの存在を確かめているようだった。

……百合？何それ美味しいの？

「そういえばー、こちらの方がリンの契約精霊さんー？」

「いいや、違う」

『時田彼方って言います』

なんだか久しぶりに喋った気がするな。

「私はティラミス〃ハインスね。よろしくー。んー？本契約が済んでないんだー。」

ま、見た目が人間の男の子だと恥ずかしいもんねー」

『いやいや、俺はただの人間なんだけど……。なあリン”本契約”って何？』

「ええと」

リンの顔が赤い？

『どこがただの人間よ！一杯私の身体をちぎろうとしたじゃない』

『ひゃいつ！ごめんなさいっ！』

唐突に聞こえた高圧的な女性の声に咄嗟に謝った。

「ティー、今の声は？」

「うん、私の精霊ー」

黒い何かがティーちゃんの肩に集まり、細長い縄のようになっていく。

そのまま太くなることもなく黒い何かはどんどん濃ゆくなり、一匹の蛇を形作った。

「《夜》の蛇、たーちゃんです」

『タナトスよ!』

黒い蛇、タナトスの表面は漆のように高級感漂う黒だ。

『で、あんた。そんだけ馬鹿でかいマナを内包してるその身体が人間なわけじゃない』

『は、はあ』

『はあ、じゃなくて! マナの流れも見えているんでしょう? それも視覚だけでなく、全ての五感で!』

俺、蛇に怒られてる・・・。

『だから濃縮されたマナの小宇宙の中から私を助けられたんだろうし。まあ、それに関しては感謝してあげるわっ』

この蛇ツンデレだッ。

「すまない、つまりカナタは精霊なのか? しかもマナを観ることが出来ると?」

『でなきゃ、ティラミスと私を助けることが出来るはずもない。そも、精霊召喚で来たんなら精霊以外のなんだったの?』

「そう言われるとそのとうりなのだが」

『うん、あくまで俺はただの人間だよ』

『じゃあどうやってティラミスを助けたの?』

『火事場の馬鹿力?』

『そうじゃなくて。もっと具体的に!』

『わ、わかったよ。ええと——』

リンとともにティーちゃんとタナトスさんが暴走している現場にたどり着いた時、複数の男が倒されていた。

先生とリンがティーちゃんの状態で口論している時に首元の輪から黒い欠片がわれでてきていた。

なんか明らかにヤバ気だというのに2人はまだ気づいていなくて…。

「ちょっとまつた!」

『突然何?』

急に叫ばないでよ!こわ…別に怖くなんてないんだからねっ。

リンは信じられないものでも見たかのような態度をとっている。

「どうしたのー？私もたーちゃんも《夜》なんだから今の説明におかしなところはないとおもうよー」

『会話の内容に気を取られていたんでしょう？』

俺の説明を遮ったリンに対し、2人（？）は即座に反論した。

「いや、そこまで発動直前になってまで気がつかないわけがない。私だけならともかく、その口論していた相手はあのセオドア先生だ。あの人が気がつかないはずがない。

それにあの後ティーが使った魔術は《夜》ではなく、《水》なんだ」

『「！？」』

なぜだか皆さん驚いていらっしやる。

「戦慄……！」というアオリ文をつけてしまいたいぐらいに。

『どしたのー？』

「説明を遮ってすまない。続けてくれるか？」

『もちろん』

ええと、それから青色の冷たそうな風が吹いてきて、黒い欠片の中に満たされると欠片が氷の槍になったのだった。

その氷の槍から俺を庇ってリンが怪我をした。

そのまま怪我をしたリンを連れて逃げようとしたところに黒い腕が俺らを襲ってきたのである。

その黒い腕を最初は避けていたのだ。

しかし黒い腕が3本にまで増え、避けるのが困難となった。
俺は覚悟を決め、無我夢中でその腕の上を走り抜け、黒い塊に手を突っ込みタナトスさんを引っこ抜いた次第である。

「……」

なにかマズイことでも言っちゃったかな！？

驚きを通り越してあきれ顔で少女がこっちを見ている。

やめて！そんな目で俺を見ないで！！

唯一平然としているのはタナトスさんのみ。

『その黒い腕つてのは《夜》の魔術、秘奥「しんかい侵界」でしょうね』

秘奥…だと…！？何それカッコいい！

『でもあれそんな大層な攻撃だった？動きも遅いしそこまで大したことなかったよ？』

「あのな力ナタ。私はあの時力ナタが何を避けているか全くわからなかったぞ？」

『え？あの腕が見えなかったの？』

「ああ。誰一人として何も見えていなかった。皆マナが集っていることしか感じられなかった」

「大したことないなんてひどいよー。「侵界」は精神攻撃らしいーしー、見えなければそれだけで致命的だよー」

そりゃああんなでっかい腕、見えてなければ避けられないだろうな。

『あんたはあんたの思っているとうりのただの人間じゃない』

見た目が蛇であるためタナトスさんの表情を読み取ることは難しい。けど少し言いづらそうな声音で言った。

『あんたは精霊だ』と

第4話 「大丈夫、ここにいる」(後書き)

新キャラはあわてん坊(♀)とツンデレ蛇(♀)です。

一文が長すぎて読みづらいところがあつたかもしれませんが……。

時間が進まない。

7/11 一部修正。

第5話 「人生は朝に始まる」(前書き)

この作品を見ていただき、ありがとうございます。

5話目にして難産な回でした。

遅くなったうえ文章も短いかもしれませんが、こゆっくりとゆっず。

第5話 「人生は朝に始まる」

『俺が人間じゃない？』

『ああ、アンタは精霊だ』

タナトスさんから突き付けられた衝撃の事実。

『ふ〜ん』

人によってはかなりショックを受ける内容だとは思う。
自分のことを化け物だと感じて、自己の否定に繋がることだってあるだろう。

しかし、俺に関しては

『それで？』

この一言で片が付いてしまう。

「……………」

なぜかリンが沈痛な面持ちをしていた。

『まあ、アンタが気にならないんならいいけどさ』

「リンの無事も分かったことだしー、私達も一旦帰ろっかなー」

タナトスさんも言いたいことを言い終えたらしく、一瞬俺を見た後現れたときは逆に黒い靄となり消えていった。

「じゃーねー、また後でー」

言いたいことを言い終えたらしく、ティーちゃんもまた去っていった。

「……………」

「……………」

そして部屋には俺と辛そうな表情をしたリンが残されたのである。多分、リンもタナトスさんの発言で考えるところがあったのであるう。

しかし思い当たることがないので何も言えず、時間が経っていく。美少女はこんな表情でも綺麗だし得だなあ、などとくだらないことを考えていた。

ここで気のきいたことでも言えたらいいんだけど。

「カナタは怒っていないのか？」

リンが突然俺に聞いてきた。

『なんで俺が怒るの？』

辛そうだった表情は怯える子どものようだ。

「その…、君がそうなってしまった理由の一端は私にもあるだろう」「いつもは真っ直ぐに相手を見つめている彼女の瞳の先は床に向いている。」

『いや、リンは何も悪くはないよ。気にしないでよ』

リンに悪いところがあつたとは思えない。

彼女はただ家族が欲しかつただけだから。

「そう言われても私は…」

言われてみればリンに非があると考えることもできる…かな？
しかしなぜ彼女がここまで怯えているのかがわからない。

『なんでそんなに怖がつてるの？俺が精霊だから？人じゃないって
言われたから？』

「ちがつ…！」

ちよつと言い方が悪かつたかな。

『そんなにリンのことはよく知らないけどさ、君らしくないとい
うか』

俺は怒っていないし、女の子を泣かせているのは忍びない。

「私もおかしいとは思つが、…みに……んだ…」

声がだんだんと尻すばみになりリンの言っていることが聞こえな
かつた。

『もう一度はつきり言ってくれないかな？聞こえなかつたよ』

「私は…」

どうしたというのだろう。

「君に嫌われたくないんだ」

『え？』

今度は視線はしっかりと俺を捉えている。

「我ながら理解しがたい感情だが、君に嫌われると思うと胸がつかい」

瞳には涙がいつの間にか溜まっていて、頬はほんのりと赤く染まっている。

「だから、怖いんだ。君の人間性や在り方が怖いわけではない。誤解はしないでくれ」

そういうとリンはまた押し黙った。

彼女もまた、自分の言いたいことを言い終えたということか。ならば俺も何か言わないと。

『タナトスさんにああ言われたけどさ、リンに俺はどう見える？』

「……背が小さくて、妙な服を着ているただの男の子だ」

今心に2つ傷が出来ましたー。

身長とか服のセンスのこと言わないでよ……。毎日牛乳飲んでるんだけど…。

『だ、だろ。それに俺は精霊かもしれないけど人間だよ』

「？」

リンは俺の言いたいことがよくわからない様子だ。

『タナトスさんは精霊だろうけどさ、それでもどう考えたって蛇だ。俺も精霊とやらなのかもしれないけど、それでも人間だ。だからあの言葉はそこまで気にならないよ』

それに、と言葉を重ねる。

『リンみたいな美少女をすぐに嫌いになれるはずないじゃん！むしろこっちが仲良くしてほしいくらいだしね！』

HAHAHA！とさわやかに笑いかける。
歯が光輝いてたらベストなんだけどな！

「そうか。そう、だな」

少しリンが笑ってくれた。

『嫌われたくないなんて、告白みたいだしっ』

自分で言っけて恥ずかしくなってきた…。

「う、我ながら恥ずかしいがそれ以外に言葉に出来なくてな」

お互いにまた照れあい、また笑い出した。

『俺ら黙ったら笑ってばかりだね』

「本当に、な」

今回はただの照れ隠しだけど。

また場が緩んだところで気になっていた疑問をぶつけることにした。

『ティーちゃんが言ってた本契約ってなに？』

「あ、ああ。覚えていたか」

慌てているリンの様子を忘れるわけではない。

「精霊との契約は2段階ある。召喚に成功した段階で仮契約。召喚後、特定の行為を踏まえることで本契約としている」

『特定の行為？』

「なぜ、契約という手間を踏むかというとだな」

なんだか濁されてる気がする。

『特定の行為って？』

「契約をしなければ精霊は現界できない」

流しやがった！今度は確実に！

「なぜなら、精霊は自らマナをこちら側の世界で発生させることが

出来ないからだ」

……質問に意味は無いのかもしれない。

「通常仮契約状態の精霊がこちら側に存在できるのは半日がやっとだ。

元来マナ量が莫大な精霊とはいえ自己のマナでは異様に消費が激しい」

最高速度が高いスポーツカーは燃費が悪い、みたいな感じかな？

「しかし、この世界の生物——人間以外の亜人種も含むが——と本契約を結ぶ、

つまりマナをリンクさせることによって長期的に現界できるというわけだ」

全然俺の意見も聞かず、リンは説明してくれる。

こんなに頑なになられては余計に気になるだけだというのに。

「また精霊は自らの意思で姿を消したり出来るようだな。先ほどの蛇タナトスのように」

『で、特定の行為って何？』

「……そんなに知りたいか？」

『うん。かなり』

「……経口接触だ」

『けいこう接触？それってどういう――』

「キスだ」

『……おおふ』

真っ赤に顔を染める美少女と同様に顔が真っ赤のジャージ姿の男がそこにいた。

いや、ジャージは俺なんだけどね。

「カナタ、君にはマナのリンクが必要か？」

リンはすごすごと聞いてきた。

そんなこと俺にわかるはずなのに。

『必要ならどうすんの？』

「”本契約”を結ぶしかあるまい。いや……」

赤くなっていたリンだったが何かを思いついたように呟きだした。

『どうしたの？』

「……ただの仮定の話だぞ」

わざわざ釘をさしてからリンは喋りだした。

「このまま、リンクを結ぶことなく現状を放置していれば君は消えてしまうだろう。」

しかし君が精霊であるならばもといった場所、つまり元の世界に戻れ

るのではないだろうか？」

「だろうか？って疑問をぶつけられても俺に何かがわかるはずはないのに。」

しかしリンの言うことが正しいならば何もしなくても帰ることができる。

『なら...』

「だが、帰れない可能性もある。精霊が人間を語るという話は聞いたことがない。

彼らは基本的に、いや、絶対に人とは違う者たちだ。なのに君は自分が人間だと語った。

普通の精霊同様に元の世界に戻るか確信できない。それに...」

持ち上げ落とし！

まだなんかあるの！？

「君にリンクをする必要があるかも分からない」

『どゆこと？』

「体調は万全か？」

『うん。違和感もないし熱もないよ』

「やはりな、それがおかしいんだ。さっきも言っただろう？すでに君と会って半日以上経っている。

つまり、君は精霊でありながらマナを自発的に作り出すことができる」

リンの言いたいことがわからない。
帰れるかもしれないと言ってみたり、すぐにそれを翻したり。
俺はこの世界にいられると言ってみたり。

『ね、リン。何が言いたいのか？』

「…私は君と離れたくない」

唐突に何言い出してんのこの子！プロポーズされた気分だ！

「恥ずかしくて誤魔化してしまったが、カナタは私の願いに応じてくれたのだろうか？」

顔はまだ赤いが覚悟したかのようにリンが俺の目をしっかりと見て話す。

その表情はティーちゃんを助けると決めた時と変わらない。

思い切ったら一直線！タイプの娘なのだろう。

ちなみに俺はラーメン屋に入ってから10分以上は悩むほど優柔不断である！

「今も初対面の人にあそこまで嫌われることに抵抗を覚える自分がいるとは思わなかった。

属性うんぬんはともかく、君と私は精神的に近しい、もしくは相性がよいのだと思う。

マナのことなどどうでも良い」

「ここに、私といっしょにいてくれないか？」

ああ、リンの言いたいことってそういうことか。

もとの「あの場所」にはの郷愁に似た何かはある。

けど、あの場所には俺を待っている人たちはもういない。

だからこの子を守りたいって思ったあの衝動に従ってみよう。

あの召喚されるときに自然と考えられた、俺が生きてきた理由とやらを確かめてみよう。

「ずっとというわけではないっ、ただもう少しカナタのことを知りたいというか……」

『よろしくね、マスター』

俺を思ってくれる人がいるのなら、知らない世界だって楽しめるのかな？

小鳥がさえずるなかで、俺の異世界の生活が幕を開けた。

第5話 「人生は朝に始まる」(後書き)

次回からは学園モノになっていくと思います。

他のさまざまな作品に埋もれないよう、精進していきますのでまたお越しく下さい。

第6話 「転校生」

色とりどりの髪と瞳を持つ30人前後の少年少女たちの前で俺は立っている。

ここはエクリプス魔導学院九回生「甲」クラスの教室。

ちなみに九回生は日本の高校生にあたり、小学生から大学生までにあたる一二回生までである。

甲、乙、丙…とクラス名がある。

で、この教室に知り合いはリンしかいない。

ではなぜ、俺がこんなところに立たされていれのかといえば、

『えー、皆さんはじめまして。時田彼方と申します。

ひよんなことからこの世界に召喚された精霊です。

とは言え、皆さんと同じ18歳ですので仲良くしていただけると嬉しいなー、なんて』

新たなクラスメート達の前で自己紹介をするためである。

出来る限り、無難に喋ったつもりだったけど何か失敗しちゃったかな？

俺に向けられる視線には好奇心こそ感じられるが皆一歩ひいているように感じる。

自称精霊という、中二病まがいの転校生が来たら俺でもそう思うけど。

「二学期から転校で珍しいから驚いてるかもしれん。

昨日の召喚式でトキタ は召喚されたばっかだから、それなりに気を使ってやれよ」

適当に言っただけのける担任——確か、ティーちゃんの暴走のときに

格好つけていた人だ——の言葉にクラスがまたも呆然としている。リンだけは楽しそうにこちらを眺めているが。

「それと、まだ仮とはいえソラルと契約してるから考えなしに手を出さないように。以上」

またも爆弾を投下する先生。

この人本当に何を考えているんだか。

今の今まで心イタい相手を見る程度の視線を向けていた新たなクラスメート達だったが、先生の言葉のおかげでそれは一変した。

男は敵意を、女は先程とは比べものにならない以上の好奇心を。

異世界デビューは失敗かなあ…。

一言、現状について言及するならば……どうしてこうなった？

今朝、リンの願いに答える形でこの世界で生きてみることを決めた俺。

だが、生きるために何をすべきか解らなかった。

目標といえば「せっかく魔法が存在する世界に来たのだから魔法を使ってみたい！」ぐらいしかない。

リンに魔法を習おうと思ったがそもそも俺の属性がわからないため、彼女にもどうしようもなかった。

『この学校に入れたらなあ』

ああ！これだ！この言葉が原因だった…。

「それはいい」

と乗ってきたリンに流されるようにして、この学校の校長に挨拶に

行き、校長がサクツと入学を許可しやがった。

『この学校で王立のお偉い学校なんですよね？そんな簡単に入学とかアリなんですか？』

「面白いため可（笑）」

（笑）てなんですか！？

容 姿は十代後半の少女。実年齢は3桁らしい校長は無表情に笑っていた。

で、ロリババア校長（本名は長くて忘れちゃった。てへ）のありがたいはからいのもと、俺はこの学校に入学することが決まったのだった。

さっぱりと決まりすぎて裏がある気もするが。

そして、今に至る。

とりあえず、今はへらへらと笑う以外に出来ることはあまりない俺なのです。

自己紹介を終えると指定された席に着いた。窓側の席でリンの横にあたる。

『なんか俺睨まれてる気がするんだけど』

「みんな不思議なんだろう。この学校に転校してくる者は滅多にいないからな」

『それだけかなあ』

「皆、まだ18歳なんだ。疑問を隠せないことだってあるだろうさ」

リンと言葉を交わしながら軽く周りを伺うが、目が合っても気まずそうにほほ笑むばかりだった。

「転校生が来たくらいしか報告はあまりない。終わりな。っと授業に遅れないようにー」

くだららと先生は歩き去って行った。

教室の扉が閉まると静かだった教室がにわかに騒がしくなった。

「ねえねえ、トキタ君ってホントに精霊なの？」

「ソラルさんと契約してるの？」

質問のあらしである。

女子は異世界でも女子だな…。

「精霊たちが住む世界ってどんな世界なの？」

「人気者（笑）」

「なんで仮契約状態でここにいられるの？」

今なんか違和感が…。

「鼻の下のびてる（蔑）」

って校長じゃん！

『どうしたんですか？校長先生』

俺が問いかけると周りで質問を浴びせかけていた女生徒達は離れた。

「え？校長先生いるの！？」

「ど、どこにいるの？」

彼女達は校長先生が見えていない？

もしかして…幽霊？

「違う（怒）。これは《水》の鏡。その名も…」

声だけは表情豊かに校長先生が答えた。

今この人俺の考えよんだよね。

こわあ…。

「また「水鏡」で見回りしてるんですか？」

うるたえる女生徒達を尻目にリンが声をかけてきた。

あれ、リンなんか機嫌悪い？

「見せ場取られた（泣）」

『あの、用件は？』

「属性とマナ量を計測するから来て欲しい（願）」

便利な喋り方をする人だ。

『今からですか？』

「私も行く」

「レッツゴー（爆）」

水の膜が弾け、姿を現したらしい校長についていくことにした。

校長先生についてリンと歩いていると広々として何も無い部屋へとたどり着いた。

何もないが、部屋全体がうつすらと光っている。

『ここは？』

「儀式用の教室かな？私は初めて入る。

属性とマナ量を計測するのにこれだけ大規模な式は必要ないのでは？」

部屋の中心へと向かう校長先生についていきながら、リンが疑問をぶつけた。

『だからこの部屋光ってるんですね』

やはり魔法はすごいなあ。

驚嘆が自然と漏れた。早く俺も使ってみたいぜ。

「……………」

呆れるように2人から見られた。

「まだ何もしていないのに（驚）」

「言ったでしょう。彼はマナを見ることが出来ます。多分、残存したマナを見ているのでは？」

「ここを最後に使用してから50年以上経っているというのに（感動）」

2文字で表すのもアリなんだ。

「何を行ったのですか？」

『というか、今 から何するんです？』

「ここは精霊用の魔法空間。通常の式では計りきれない精霊の属性やマナを計るの。

私の属性とマナを計ったの（懐）」

無表情だった顔に少し懐かしさが見えた気がした。

「先生は精霊だったのですか？」

驚いたように聞くリンに無表情で頷く先生。

とっつきにくい人だと思っていたがけっこう話し易い人みたいだ。

「そこに立って」

先生に指示され俺が中心に立つと輝いていた光、マナが脈打ち始めた。

マナそれぞれ絡み付き、1つの魔法陣が足元に浮かび上がった。

「ちょっと痛いけど我慢して（謝）」

ちよつと痛い、って言われた場合ほんとにちよつとしか痛くないって稀だね。セオリーのに。
魔法陣の光が針を形作つた。

「ねえ！なんか刺さるんじゃないの！？」

「大丈夫（笑）」

「笑いながらこたえ——」

「魔術針、打ち込み開始」

「いっづうううう——！！」

「結果がでた」

「……」

「カナタ、大丈夫か？」

「う、うん。問題ないよ……」

女の子にこんな心配をされて大丈夫ではないと答えることはできなかった。

悲しいかな、男の性というやつだ。

「トキタカナタ、属性は無し。マナ量は測定不能。詳細不明」

『…それだけですか』

「つまらない（不服）」

「つまらないって…」

結局属性もわからないまま儀式の部屋を後にした。

「とりあえず、皆と一緒に頑張ってね（適当）」

校長はさっさとどこかに行ってしまった。

「とりあえず教室に帰ろうか」

『うん。なんか無駄に時間を潰してしまったね…』

「しっ　かりとマナがあるとわかったんだ。それを収穫しよう」

励ましてくれるリンの優しさが辛いよ。

昼休み、俺とリンは食堂にいた。

『あー酷い目にあった…』

「悪気があってああしたわけではないだろう」

何処の世界でも学生は学生なようで、食堂は人で溢れている。

『悪気は無いにしても絶対に楽しんでたよね』

「否定は出来ないな」

ちらちらと俺達を伺うような視線を感じるが話しかけて来る人はいなかった。

そりゃリンは美人だから、人気なんだろうな。

「おまたー。まだ食べてないのー？」

「ティーを待っていたんだ。さあ列ぼうか」

ティーちゃんは学年が違うため遅れてきたのだ。

「トキタくんは食事できるのー？」

『食べれる……らしいよ？』

「何故疑問なんだ？」

『校長が教えてくれたから』

「あー」

あの愉快犯のような性格の発言を真っ正直に信じられるほど俺は子どもではない。

……結局何事もなく食べることができた。

肝心の食事だが異世界だというのにパンやシチューなど見知った料理ばかりで少し残念だった。

『お金、どうにかして返すね』

「気にするな。今は金には困っていない」

「でも私には買ってくれないよねー」

「無駄遣いはしない主義でな」

「酷いつ！男が出来たら親友なんてポイ捨てなんだー！」

姦しく騒ぐ2人を見ながら、この世界のことを考えた。

季節があるのかはわからないが窓の外に見える木々は繁り、ちらちらと花も見える。

暑いとも寒い感じないため、季節は春か秋だろう。日本同様ならば貨幣は当然日本のものとは違った。

いつまでもリンに頼るわけにはいかないしアルバイトでも探してみようかな。

リンはああ言ってくれたが俺にもプライドってもんがある。ちっぽけだけどな！

「この次は魔法の実技だな」

リンの言葉で意識が現実に戻された。

「カナタくんは精霊だから楽勝だねー！楽しみだねー」

『ティーちゃんも一緒なの？学年違うのに』

「午前中の座学は学年別だが午後からある実技は能力別だ」

「えっへーん！私もリンも1番上のクラスなんだよー」

『俺はどうなの？原理もわからんのに上級者と一緒だなんて無理だよ』

「カナタくんは三回生と一緒にだよ？」

「え？」

『え？』

小学生といっしょ？

第6話 「転校生」(後書き)

ご覧くださっている方、お気に入り登録して下さい、ありがとうございます。

彼方は自然に言葉も読めたので違和感もってません。

それではまたお越しください！

第7話 「初めての……」

「皆さん話を聞いてください！」前では若い女性教師が子ども達に向けて叫んでいた。
しかし相手は9歳の子どもである。弱々しい教師の声を聞いてくれるはずもない。

「昨日の続きな！」

「今日は違うことしようよ」

「早く帰りたいですわ」

『手伝うべきかなあ』

最後尾の席で座り込んでいるこつちを助けを請うように見ている気がする。先生が。

はしゃぐ子ども達も見知らぬ年上には構いたくないようで、俺の周囲にはいないためだろうか。

『はあ、俺は魔法を使ってみただけなのに……』

先生からの視線を避けるようにして、さきほど借りたこの学校の資料に目を落とした。

くくく

この魔法実技という時間は本校、エクリプス魔導学校を魔導学校たらしめる特徴的な授業である。

この国にはここを含めて5つの魔法を教える学校がある（各学校名は12頁を参照）。

しかしそのどれもが魔術理論に重きを置いており、授業で魔法を使用することは実験以外にない。

それらの学校の指針は「魔法技術の発展」なのだから当然ともいえるよう。

本校では「学徒の向上」を指針としており、卒業後に一人前の魔術師と名乗ることが出来るよう魔法実技を実施しているのである。

また、魔法実技は三回生の2学期から始まる。

この時は各クラス単位で授業を行うが、四回生からは実力でクラス編成を行い……

~~~~~

「はうー、これじゃ今日も授業が……」

鈍臭い先生だなあ。

こんな状況じゃ、俺も魔法を学ぶこともままならないし。

先生はまだ俺を見ていた。

さっきよりガン見だった。

…一肌脱ぎますか。

15分後。

あれほどうるさかった教室は静まり帰っていた。

教卓で語る俺の言葉に耳をすまし、話に聴き入っている。

『授業をいつつも聞いていなかった男の子はとっても後悔したんだ。けれどドアの向こうでは男の子を呼ぶ声が聞こえる。』

「おいでえ〜」ってな。魔法が使えれば亡霊なんて恐くなかったのに」

身振り手振りを加えて話す俺の怪談は効果覿面だった。

ストーリーは勉強嫌いな男の子が魔法しか効かない化け物に襲われ、魔法をしつかりと勉強すればよかったと後悔する話。

少し稚拙がすぎるかと思っただがウケは良かった。

「そ、その後どうなったんですかあ？」

いい年した大人も怖がっているが。

それで先生でいいのかよ。

『…このあと、誰も男の子を見ることはなかったとさ』

話の落ちに子ども達は戦あそっていた。

『みんな、こんなことにならないようにしつかりと勉強しような？』

「「は、はい！」「」

『よし、いい返事。先生よろしくお願いします』

「はい！」

こちらの良い返事なこと。

「それじゃあ四人一組になってくださいーい」

やる気を取り戻した先生の言葉で俺は凍りついた。

この1人も知り合いがない中でグループを組め…だと…!?

中学時代、いつもあぶれかけていたこの俺にそんな芸当が出来る  
でも?

なんか涙出てきた。

子ども達はそれぞれ仲の良い子とグループを組みはじめた。

俺を誘ってくれる奇特な子はいない。

「トキタさん?どうしましたあ?適当でいいですよ?」

適当が出来ないんです……ッッ。

「俺らの班に入る?」

涙をこらえていたとき、1人の少年が声をかけてきた。

『俺でいいの?』

「もちろん!」

班のメンバーは俺を含めて4人ちょうど。

自己紹介を軽く済ます。

「兄ちゃんせいれいなんだ。すっげー!俺はメロウ!!ディステイ」

メロウは赤い髪をした、猪突猛進な男の子。

「ぼ、僕はタスティティムズです」

タステは女の子のような男の子だ。一言で言えば男の娘。女装しているわけじゃないんだけどね。

「ワタクシ私はルルリリアィファイアラーですわ。以後おみしりおきを」

『ルルリリアて呼びづらいからニツクネームとか無いの？』

「まあ、人の名前を呼びづらいなどと！…親しい人はルリアと呼びますわ」

ルリアは金髪碧眼の西洋人形のような娘。どことなく貴族っぽい。

「はい、今日はマナの収束と魔弾の復習から始めます」

先生の指示が下されると皆一様に目をつぶり、片手を前に突き出した。

直後、様々な色の風が教室内で吹き荒れ、30秒ほどすると突き出した手の前に球の光が出来ていた。  
なるほど、これが収束か。

「皆さんはそのまま維持してくださいね。トキタさんも見てないでやってみてください。」

胸の内から熱を手の平に集める感じで「  
見様見真似でやってみよう。」

目をつぶり、手を前に。

『《集まれ》 《集まれ》 《集まれ》』

イメージ。

この世界で見た、色のついた風。それがマナだ。自分の中の熱いモノを核にして作りたいものをイメージする。核を満たすように、覆うようにマナを集める。

「はわわわわっ！こんな密度見たことがないですう！」

「兄ちゃんすっげー！俺でもマナが見えるぜー」

先生の怯える声とメロウの大声が聞こえた。

そんなにすごいのかな。

恐る恐る目を開けてみた。

『うおっ、まぶしっ』

手の平に無色透明の光球があった。

クラス中が皆俺を見ている。

そんなに見ないでよ恥ずかしい。

で、この後はどうすればいいんだ？

「トキタさんっ、解放はゆっくりしてくださいね！」

もしかして俺がどうにかしないとイケないの？

初めてじゃ無理だよ！

途端に球体で落ち着いていたマナが振動し始めた。

『なんかヤバい気がするー!』

振動はどんどん大きくなり、俺の手から離れていこうとする。

「兄ちゃん大丈夫!？」

心配したのかメロウたちが駆け寄ってきた。

「えっと、とりあえず落ち着いてください!」

「取り乱しては余計にマナを制御に置くのが難しくなりますわ!」

2人のアドバイスどうりに心を落ち着ける。

深呼吸、深呼吸。

つて、こんな状況で落ち着けるか!

『…安心してくろ!これが精霊の魔法だ!』

せつかく同じ班になってくれた3人に嫌われなくなかったので格好つけることにした。

「あんなに慌てていたのにいまさらですわ…」

「噛んでたし」

思ったより賢い子たちだった。

「まじでっ?やっぱり兄ちゃんはすごいなあ」

馬鹿は1人釣れたみたいだけど。

ただならない雰囲気<sup>に</sup>他の子ども達が逃げ始めた。  
無軌道に逃げ回るせいで手をどちらにも向けられない。

「トキタさんつ、魔弾を撃つなら人のいないところにつきゃー……」

魔弾なにそれ!?

先生が逃げる子ども達に流されて行ってしまい、説明が聞けない！  
落ち着いて考えろ。

……。

…わかるか！そもそも落ち着けるような心境じゃないし！

「そのマナの塊を放つことを魔弾と言いますわ」

ルリア、ナイスサポート！

近くには3人がいる。

かといって3人のいない所を狙って撃てばどこに魔弾が飛んで行くかわからない。

ならば何処に向けるのか？

『じゃあ、こつちだ!』

腕を真上に向ける。

テンションが上がってきた！

『人呼んで……』

鎧<sup>たが</sup>が外れたように魔弾が銃弾の如きスピードで真上へと昇っていった。

本物の銃弾なんて見たことないけど。

魔弾を放ったままのポーズで呟く俺と俺を見て黙っている少年少女。

『カナタスペシャル!』

リイイイイン!

フィニッシュで叫ぶと同時に何かが割れるような音が聞こえた。

窓の外を見ると厚みのないガラス片のようなものが降ってきていた。

「兄ちゃんカッター!!」

「いたあ……」

俺には小学生2人からの冷たい視線を浴びせられていた。

『つまり、さっき降ってきたのはこの学校を守っていた結界だったんですか』

「そう。結構お金がかかっている(怒)」

校長室で先程の件でお叱りをうけていた。

『はあ、それで?』

そんなお金がかかっているなら俺の初めての魔法程度で壊れるわけないだろうに。

「……君はどこに住むつもり?(笑)」

『家ですか? リンの部屋にでも泊めさせてもらおうかと』

「あそこは女子寮。それに男子寮にも空室は無い（笑）」

校長先生、楽しそうだ。  
いやな予感がする。

「今は午後1時。今日中で下宿先を見つけて（笑）」

さっきから笑ってばかりなので絶対に悪いことは確信していた。

『もしも、見つけれなかったら？』

「野宿（笑）」

さっきから笑ってばかりだなこのババア！

こちらに来てまだ1日と少ししかたっていないのに分かるわけないだろ！

「がんば（爆）」

地の文読むのやめてください！

次回、俺の下宿探しの旅っ（仮）！

第7話 「初めての……」 (後書き)

今回もご覧いただきありがとうございます。

あれ？ヒロインでてない？

次回予告も本気かは謎です。「！」「マークばっかり！！」

それではまたお越しください！

## 第8話 「下宿探しの旅」(前書き)

タイトル…どうしてこうなった。

## 第8話 「下宿探しの旅」

夕方、とはいってもまだ子どもたちが遊んでいるような時間。

『やっぱり身元不明者を雇ってくれるような奇特なお店はないよなあ』

「すまないな、役に立てなくて」

『いや、よくよく考えたらリンの部屋で、っていうほうがやばいしね』

「む？何がやばいと言うのだ？」

男は狼らしいよ、気をつけなさい。

レンガ建ての家々の合間にひっそりと作られた小さな公園のベンチでリンと座っていた。

校長の命令を受けた後、リンの町案内のもと下宿先を探していたのだ。

ただ下宿するためならば学校が近くにあるため困りはしなかった、が先立つものがなかった。

精霊だということになんたる不便。いちいち姿を消せばよかったんだけど。

校長やタナトスさんに聞いても『感覚』で片付けられてしまいわからなかった。

「本当にどうするんだカナタ？そろそろ時間もなくなってきた。最悪はまた私の部屋にとまるといいが……」

『校長が許さないだろうね…。結界のことでかなり怒ってたし』

「そりゃあ、大陸でも有数の『水』であるあの人の最高レベルの結界だったからな。

あの結界だけで魔法さえなければ一個師団の攻撃さえものともしい、といわれる代物だ。

それをまあ、初級も初級な「魔弾」1発でだめにしてしまうとは…」

また呆れられてる気がする。

『リンだったら破れないの？』

「失礼な。魔弾ではともかく、本気を出せば造作もない」

無然と答える。

リンは負けず嫌いな節がある。

てか、一個師団以上の攻撃力を持つ女子高生（日本基準）ってどうよ…。

「なぜか失礼なことを考えられている気がするのだが」

『気のせいさつ。それにしてもこの街はこの手の公園が多いね』

「この町ができた当時は独立都市だったらしいからな。

狭い土地に家をいくつも建て、あまった土地は今でも住民たちの憩いの場となっている」

この街、アスパイアは王国の中央よりやや北寄りの都市である。四方を野生生物の少ない平原と森の人と呼ばれる民族が住む森に囲まれている。

近隣の村や街は近いところでは半日もせずに徒歩で着けるほどに近い。

街道も整備されており、近くには軍学校と基地もあるようで治安もすこぶる良い。

交易の拠点となっているわけではないが、エクリプス魔導学校の影響も大きいらしくそれなりに栄えている模様。

国内外から学生が多く学びに来ているため、下宿も多く住む場所を見つけることはあまり難しくない。

…はずだというのに。

『なんですむ場所がきまらないんだ!?!』

俺学生だよ?てか精霊なんだよ?

精霊つてもつと優雅な感じじゃないのっ?

「カナタは自分の居た世界ではどのようなところに住んでいたんだ?」

『ここよりもずっとごみごみとして息苦しいところだったよ』

すくなくともあん摩天楼のようにただ天を目指したような建物はこの街にはない。

技術的な問題で無理なのかもしれないが。

「息苦しい、か。1人暮らしか?」

『一応両親らしき人はいたよ。一応ね』

我ながらなんかありそうな答え方をしてしまったかもしれない。しまった、と思った時にはリンが何か尋ねようとしていた。

『んー！休憩はこれぐらいにして歩きますか』

あからさまに話を逸らしたので、リンも察したらしく何も聞いては来なかった。

裏路地を通って表通りへと向かう。

とその途中で小さなお菓子屋さんのようなお店があった。

こじんまりとしているが甘い香りが漂ってきている。

『ちよつと寄っていかない？』

「別に構わないが」

ちなみに、俺は料理はできないがお菓子だけは得意だ。

せつかく異世界にきたのだからこちらのお菓子に興味を持っても罰はあたらないだろう。

『失礼しまーすつと』

ドアを開けると、そこは犯罪現場だった。

床を赤く染めて倒れるコック姿の壮年の男性と、ロープで縛られた2人の女性。

そして刃渡り30センチほどの赤く染まったナイフを持った覆面をした男。

どう見たって強盗現場である。

縛られた女性らは親子なのだろう。よく似た金髪碧眼の容姿をしている。

若い娘さんと目があった。

『おじやましたー』

ボタンとドアを閉じた。

「どうしたんだ？中に入らないのか？」

リンからは中の様子は伺えなかったようである。

「って待てやゴラァ！」

あまりに自然に出ていったため呆気にとられていた強盗が扉を蹴破ってきた。

店の中では縛られている女性たちのもがく音が聞こえた。

「誰だ、お前は？」

急に怒鳴りつけられたためか、リンの声音が厳しくなっている。

「ああ？その制服は魔法学生か？」

『一応確認しますが、あなたは強盗ですか？』

「ちっ」

リンが魔法を使おうとしているらしく、マナが彼女の元に集まってい  
いく。

強盗はそれに気がつく様子もなくナイフを構える。  
リンを庇うようにして強盗と対峙する。

『この街って治安がいいときいたんだけど？』

「かといって、犯罪が無くなるわけではないさ」

リンは軽口を言いつつもマナを操る。

「おいおい、人間のガキ2人でなにができるってんだあ？」

言葉に違和感を感じた。

『人間？人間じゃないのか？』

強盗に質問を投げかけた直後、リンのマナが形を成した。

「《開け「大地の扉」》！」

男の足元が盛り上がり男を挟み込んだ。

「ぎゃふんっ」

男が悲鳴を上げるがそれも一瞬だった。

上のほうから片手だけ出ておりピクピクと動いている。

あれ？強盗対精霊の血沸き肉躍るアクションシーンが始まるんじゃないの？

「ありがとうございます！」

「いいえ、お気になさらず」

リンの治療で男性ほとんど回復し、元気に感謝していた。  
強盗はすぐに駆けつけてきた衛兵に引き渡した次第である。

「オーバーキル…」by 衛兵

「怪我也治りましたし、一晩休めば明日からは働くことができます  
しょう」

「本当にありがとうございます。それで、当店に何の御用で？」

『いやいや、偶然いい匂いに釣られたんですよ』

「エクリプスの生徒さんがいい匂いといってくれとは！」

俺たちが入った菓子店「ウィンド・ムーン」の店主は助けたことも  
あつてかとても感じがよかった。

「ウチは家族4人で経営してるからさっきはどうしようかとおもっ  
たわ」

奥さんとても優しい。

「わざわざ来てくれたんだ、いくつか食べていかないかい？」

床が少し汚れているがね。はっはっはっ！」

笑えない冗談はやめてください。

赤い汚れって完全に貴方の血です。

「お父さんもお母さんもこんな男に感謝する必要ないわよ！こいつさつき私たちを見捨てようとしたのよ！？」

ぐさっ！

ですよねー。あれはないよねー。

「あらあら、メリアちゃんったら失礼なこと言っちゃだめよ。恩人なんだから」

「そうだぞ。ではトキタさん、ソラルさんこちらにどうぞ」

「むー！2人ともだまされちゃだめだよー！」

『美味い…』

「酸味と甘みのバランスが絶妙だな」

見た目は黄桃のような果実をのせた、黄色いショートケーキ。それを食べると自然に言葉が出た。

『この果実は何というのですか？』

「キツ力ですよ？まさかキツ力をご存じない？」

ん。そういや説明してなかったから俺を普通の学生と勘違いしたの  
だろう。

『まあ。この人たちに説明してもいいかな?』

「特に隠すことでもあるまい」

前例がない精霊が人間を名乗る、という事態なのだから誰にでも話  
してよいのか気になった。

いや、不安になった。

「人間と精霊はそもそも全く違う存在なんだ。

どこぞのマッドサイエンティストでもない限りカナタの身柄を欲し  
たりしないよ」

そのフラグ的発言やめて!

どこぞのマッドサイエンティストって、確実につかまったらヤバイ  
よね?

「どうされたんです?」

急にコソコソ話し始めた俺らを不審に思ったのか店主が声をかけて  
きた。

『い、いいえ。俺の名前は——』

ばん!と大きな音を上げて扉が開いた。

「たっただいまー! ってせいいいの兄ちゃんだー!」

そこに立つのはメロウ・デスティ少年だった。

「つまり、住むところと働き口を探しているということですか？」

精霊に関してはスルーされた。

一瞬メリアに可哀そうな目で見られた気がする。

「ねーちゃん、なんでそんなに兄ちゃんのこと見てんだ？」

「あんな大人になつたらだめよ。可愛<sup>メロウ</sup>い弟」

現在進行形で見られていたよ！

可哀そうどころか道端の犬のフンを見るような目で！

『はい…、なにぶんここの勝手がわからなくて』

「そつだ！家で働くのはどうかしら？」

「ちょ！お母さん！？本気？」

「3階の部屋ならいくつか余っているが」

「お父さんも！こんな菓子作りの素人なんかにはウチが務まるわけ…」

その台詞は聞き捨てならないな。

俺のパティシエ魂に彼女は火をつけたようだ…。

実際はお菓子作りが好きなただの高校生なんだから魂なんて無（略）

。

『だったら勝負してみませんか？』

「いいわよ！あんたが勝ったらここに住むことを許したげる！」

「ここは私の家なんだが」

「お父さんは黙ってて！」

結果、職場と住居を手に入れました！

「このケーキを作ったのは誰だー！」暖簾がばあ

「これが私の至高のケーキよ！」ドン！

『これが俺の究極の和菓子だ！』ばん！

とか

すれすれ（アウト？）な状態までなったが親父さんに許可をもらえたのだ。

「ぐ・や・じ・いー」

メリアの悔しがる声が妙に印象的で

『そこまで嫌われてんのか俺…』

とこぼしたのは良い思い出です。

夕陽も沈んだデイスティ宅「ウインド・ムーン」前でリンと2人でさっきの魔法の処理をしていた。

男を挟むために跳ね上がった地面はそれが嘘だったかのように綺麗になっただい。

『もういいんじゃない?』

「そうだな」

ふう、と一息ついてリンはウインド・ムーン前のベンチに腰掛けた。それにならうように彼女の横に座る。

「ひとまず良かったな。ここならば学校にも近いし、人もあの娘を除いていい人たちのようだ」

おや、リンちゃんのようにすが?

『あの子のこと怒ってるの?』

そういえば、お菓子対決の前からずっと黙っていた気がする。

「そりゃあそうだろう!いくらなんでも私のパートナーをあそこまで言うとは...!」

ぶんぶんしてるリンも可愛いなあ。いつもよりちょっと幼げで。

『俺のために怒ってくれてありがとう』

「……当然だ」

リンはそっぽを向いて立ちあがった

『寮にもどるの?』

「も、もうそろそろ門限だからな。それに校長にも私から報告しておこう」

そのままこつちを見ずに彼女は早口に語った。

『ありがとう、リンが居てくれて良かったよ』

「~~~~ッ!ではもう帰る!学校は8時登校だ、遅れるなよっ」

彼女は走り去って行った。

『足はやー』

擬音をつけるならば、ピューって感じた。

「ソラルさんは帰ってしまったか。

カナタ君、君も一緒に晩御飯どうだい?」

『いただきます!』

顔をだした親父さんに返事をして家に入る。

『失礼します』

「違うだろう、ここは君の家でもあるんだ」

『…ただいま』

「おかえり」

久しぶりにこの言葉を口にした。

最後に言ったのはいつだったろうか。

そんなことを考えながら俺は親父さんの後について行った。

## 第8話 「下宿探しの旅」(後書き)

閲覧して下さった方、お気に入り登録をして下さった方、ありがとうございます！

やっと2日目終了です。

彼方は元の世界でも結構、喧嘩はしてたみたいで場馴れしてます。勝ってたかどうかはともかくとして。

それでは、またいらしてください！

## 第9話 「厄介事」

デイスティ宅に世話になるようになって1週間が経った。

学校でリンとティーちゃん以外の友人も出来た。まだまだ遠目に俺を見てくる視線も多いが。

元の世界での「理科」にあたる授業の終わった後、3限の休み時間。リンは席を立って何処かに行っており俺は暇を持て余していた。

「どうしたんだよ？」

『別にー』

前の席の男子生徒が話しかけてきた。

名前は………忘れた。

「愛しの彼女がいらないから暇なんだろう？精霊とはいっても男だからな！相談ならこの……」

親しげに話しかけてくる男子生徒（名前はまだ無い）の少しばかり鬱陶しい声を聞きつつ考えにふけていた。

この世界は月の名前こそ違うが、元の世界同様に1年は12ヶ月で季節も日本と同じだ。

今は9月の中旬で秋口。

悩み、というか考えの種は来月に迫ったあるイベントである。

それはこの学校の近く、街の郊外にある軍学校との合同演習である。

別にその演習が嫌というワケではなく気になっていることは別に  
ある。

「出番を作っておくから楽しみにしておいて」

という校長の言葉である。

いつもながらの無表情だったが嫌な予感だけは感じた。  
リンやティーちゃんに聞いても思いあたる節は無いようだった。校  
長の言葉だと考えると無視は出来ない。

『はあ…』

「どうかしたか？悩みでもあれば相談に乗ってやろうか？  
ただ…その代わりといつてはなんだが、ソラルさんに僕を紹介し—  
—」

『あ、リン。おかえり〜』

「や、やあソラルさん！どこに行っていたんだい？」

休み時間に女子が何処に行ったか聞くやつがあるかよ…。

「…………どうしたんだ？カナタ。やけに顔が優れないな」

黙殺したッ！

『んー校長先生の発言がね』

ま、俺もスルーだけど。

「ああ。そのことか。いくらなんでもそんなに深く考える必要ないと思うが」

『そうは言ってもなあ』

「よし席につけー」

セオドア先生が教室に入ってきた。

それを見て立ち上がったいた生徒も席につく。

（俺が名前を忘れたから）謎の男子生徒は（・ω・）な表情をしていた。

「キリがいいところで終わっとくか。うし、これまでー」

いやいや、全然キリ良くないですよ先生！という生徒の声が聞こえそうなところで授業が終わった。

「カナタ、昼食はどこで食べる？」

『リン達は食堂？』

「ああ、弁当か？」

『メロウのついでに作ってもらってるからね。じゃ、席が空いてる内に行こう』

「そうだ、トキタはちょっとついて来い」

セオドア先生からの呼びだしに嫌な予感を感じながらも俺はついていかざるをえなかった。  
だってセオドア先生怒ると恐いから。

『先生、何故ボクは校長室に入らなければならないのでしょうか？』

「知らんわけではないが俺からは言えん。ただ……ドンマイ」

こちらの世界にもドンマイって言葉あるんですねっ。  
気にするな<sup>イン</sup>って素敵な言葉だと思います！

『どうせ今度の演習のことでしょう？』

「お察しのとうりだ」

『はあ…九回生クラス甲、時田彼方です』

「入って」

ノックに返事をされ、校長室に入った。

校長は机の上に座っていたが、俺を応接用らしきソファに座らせると彼女はその向かいに座った。

その後ろにはセオドア先生が部下のように立っている。  
実際に部下なんだけど。

「用件は分かっているとと思うけど」

『ええ、今度の演習でしょう？』

「そのとうり。例年の演習の内容は知ってる？」

『ええ。リッソラルさんから伺いました。

しかしその中で俺をメインに据えるようなものは無かったと思うのですか？』

毎年十月に行われるエクリップス魔導学校と軍学校——正式名称はアス力士官学校——の演習。

目的は両校の学生の交流、スキルの向上にある。

参加するエクリップスの生徒はほとんど十回生から十二回生。

七回生から九回生は見学こそすれ、参加する者はあまりいない。

一方軍学校はそもそも入学年齢が18歳以上なため全員参加である。演習の内容とはちよつとした遠征だ。

近隣の草原には野生動物しかいない。

しかしその草原を東に抜けた先にあるのは、山々が乱立し深い森を持つ急峻な土地「新月」。

その森、新月の森にすむ魔物の討伐がこの演習である。

学生の中から指揮官をたて、実践的な戦いを目指すというもの。

新月の森は深く、その奥地は例え腕に覚えのあるような者でも滅多に行きたがらないほど危険だ。

逆に浅いところはそこまで強い魔物もおらず、他人と協力することを学ぶにはとても都合がいい。

毎年多くの負傷者と少しの死者がでるがそもそも覚悟のないものはこの演習に参加しないので特に問題視されていない。

死者が出ること悲しく思わない、というのは違うが。

『ボクは九回生です。それにマナの量がそれなりだとしても、属性も不明で戦いに関してはまるで素人です。』

仮にこの演習に参加しても指揮官役に迷惑がかかります。

「どれだけ使えるか分からない味方がいては戦いがままなりません」

もしものためにリンが教えてくれたことを先に話した。

これだけ言えばわざわざ演習に参加させられることはないよな。

「そういう事情は分かってる」

セオドア先生に校長が目配せをする。

「あー、ソラルもまだ実戦を踏んだことがないから分かってないと思うんだが、この演習で必要なのは安定だ。

たまにマナや戦闘技術がとんでもないやつがウチにも軍学校のほうにもいるんだわ。

部隊の中にそういうやつがいればその生存率はあがる。

だが魔物はそこだけを避けるように行動する。

結果的に平凡なやつらがやられちまう。

こつという事情とお前が今言った理由を鑑みて今年から指揮から独立した部隊を創設することになった」

『特殊部隊ですか、かつこいいですね。…それとボクに何の関係が？』

俺だって空気が読めないわけじゃない。

話の流れぐらいわかるけど、足掻いてしまっ。

絶対にこれは面倒事だ…！

「トキタ、がんばってくれ」

そんな同情するような目で見ないで！

…わかつている、わざわざここまで説明したのだ。

「君にはその特殊部隊に参加してもらおう（わくわく）  
無言でサムズアップする校長。  
眉間を揉むセオドア先生。

『拒否権は？』

「ない（キリッ）」

## 第9話 「厄介事」(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

一気に一週間、彼方は結構コミュニケーション力あります。ただし面倒な男子には冷たいです。

またお越しください！

## 第10話 「プラネタリウム・オーバー」

「……！」

上段から剣が迫る。

なんとか目視できるぎりぎりのスピードのそれをこちらで剣で迎え撃つ。

『っ！』

がぎんっ！と嫌な音と火花を散らせながら剣をそのまま振りぬく。相手は弾かれた剣を一瞬で制御化におき、また衝撃とともに刃を放つ。

まだまだっ！

俺も振りぬいた剣をそのまま勢いを殺さずに相手の剣にぶつける。1撃目は相手の剣の横つつらを弾く。

それよりも迅く俺を刈り取りに来る2撃目は上からたたき落とす。相手の剣先を地面に埋め、今度はこちらから切りかかる。

『うああ！』

一瞬力をため、上段から切り落とす！

「わかり易すぎる」

『え？』

地面に突き刺さっていたはずの剣はもうそこにはない。しまった、と思っても動き出した体を止めることができない。

全力の1太刀を体を半身そらすだけで避けられる。

渾身の一撃は地面に跡を作っただけ。

そして俺の頭上には相手の剣が添えられていた。

「ほい、お前の負けだ。ってなわけでちつとばかりきゅーけー！」

それまでの鋭い眼光はどこへやら。

セオドア先生は剣を放り投げると練習場の端へと向かい壁を背に座り込んだ。

『いきなりすぎやしませんか？まだ練習初めて1時間も経ってませんよ』

「俺は疲れたんだ」

んな身も蓋もない。

座り込む先生に習い俺も剣を立て掛け、先生の横に立つ。

体が熱くなる感覚こそあったが体の動きが収まるとその熱はすぐに引いて行った。

汗など1滴もかかなかった。

『俺はこんなに運動神経良くなかったはずなんですが』

「そりゃあ人間の体と、ある魂的存在である精霊<sup>マナ</sup>とじゃ身体の反応速度は比べ物にならないだろうさ」

『すいません、言ってることがよく分かりません』

「気にするな。理解してもらおうとは思っていない」

それは俺がバカってことですか！？

『主人公補正ってやつですね、わかります』

「主人公？お前が？」

主人公なら召喚されたお前は精霊なんて使役されるような存在じゃないだろう。

確かに妙に体の動きが良くなるのは早いが、それだけだ。

どう考えたって絵物語の主人公には物足りん」

やけに饒舌だなおっさん。

そんなに俺の心に傷をつけたいか…orz。

「それよりも…お前たち隠れてないで出て来い。別に怒ったりしないから」

これまたつまらなそうにセオドア先生は入口へと声をかけた。

『ゆ、幽霊でもいるんですか？』

ぎぎぎと俺も入口を見る。

時刻はもう8時過ぎでわざわざこんな時間に練習場に足を運ぶ者がいるとは思えない。

嫌な音をたててレバーが回る。

え？

嘘でしょ？

この世界では幽霊なんて珍しい存在でもないとか？

某魔法の学校みたいに数多くの霊がこの学校に住み着いてたりして。建てつけの悪い木製の扉が不快な音をたててゆっくりと開く。

その暗闇から人影が2つ現れる。

シルエットから想像するにそれはまぎれもなく…

『ティーちゃん、にリン？』

「なぜ影だけでティーだとわかるのか甚だ疑問だな」

「いやー、ばれちゃいましたかー」

2人だった。

「こら、寮生はこの時間はもうこの棟には立ち入り禁止だぞ」

「うっわー、先生の嘘つきー！怒らないって言ったじゃないですかー！」

ぶー、とティーちゃんが抗議する。

「大人はずるいもんなんだよ。で、お前らどうしたんだ？」

「邪魔してすみません。先ほどカナタが校長先生に呼ばれてから様子がおかしかったもので」

子どもらしいティーちゃんとは対照的にリンは大人な対応だ。

『ごめん、説明する暇がなくて』

「いや、そこまで深刻そうな顔をしていなかったしな。気になっただけだ」

「あーあー、お熱いことで。面倒だし今日はこれぐらいにしとくわ」

『面倒って放課後の先生との個人授業始ったのって今日からですよ？』

この言い方エロくね？

座り込んでいた先生はさっさと道具を片付け始めた。

「明日からのメニューでも考えてくるから、今日はもうこれまで少しばかり言葉を交わしているうちに先生の道具は片付いた。この人ほんとに帰る準備だけは速いな。」

「トキタも、お前たちも、鍵閉めるからとつとどこから出る」  
急かされるようにして俺たちは練習場から追い出された。

「んじゃ、気を付けて帰れー」

『明日も同じ時間ですか？』

「ああ」

鍵をくるくると指で回しながら先生は教員棟へと去って行った。  
いや、帰るのもマジはえー！。

「それにしてもー、さっきのすごかったねー！」

正門へと向かう廊下を歩きながらティーちゃんがこぼした。

『へ？何が？』

「カナタの剣の腕がだよ。

手を抜いているとはいえ、あの人とあそこまで打ち合える学生はここにはほとんど居まい」

称賛してくれるリンにこそばゆい気持ちになる。

「いつやー、目にも止まらぬとはこのことだねー！」

「うむ、私としても鼻が高い」

『……なんでリンが？』

「はうつ、そんなことよりどういうことだ？いきなりセオドア先生と一対一で稽古など」

今、とてもかわいい声が聞こえた気がしたが幻聴だったのだろうか。

『…ハッ。ええとそれはね——』

俺は先ほど校長室で聞いた話を話した。

「なんだと？いくらなんでもカナタは先日まで普通の学生だったというのに。」

いきなり演習に参加とは異常だぞ？」

歩みを止めてリンが俺を見る。

「カナタは納得できたのか？」

『出来るも出来ないも拒否権は無かったからね』

言いつつ立ち止まるリンを歩くように促す。

「命がかかっているんだぞ？」

歩き始めたもののリンは追及をやめない。  
俺としてもそれなりにメリットのある条件だからのんだけど。

「あー！さっきのところに忘れ物しちゃったー！」

返す言葉を迷っているとティーちゃんが急に大声をあげた。

「どうした？」

「さっき隠れてた場所に忘れ物しちゃってー。私先に帰っててー。  
それじゃー！」

「3人夕食を食べると言っただろう！？」

「ごめん！それまた今度ー」

この前のようにドップラー効果を起こしつつティーちゃんは走り去って行った。

『いつちゃった』

竜巻みたいな子だ。

『ん？晩御飯食べてないの？』

「ああ。今日はたまたま遅くなってな。カナタを誘って街の食堂にでも行こうと思ってな」

それは魅力的だ。

『メロウに晩飯はいらなくて伝えてあったから助かるよ』

「それはよかった。ふむ、ティーもああいつているし2人で行くか」

『うん。レッツゴー』

8時過ぎ。

日は落ち日中と比べるとだいぶ暗くなったが、等間隔におかれた街灯のおかげで道が見えないことはない。

仕事終わりの大人や仲間で遊んでいる若者も多くいて人は多い。

『どんな店に行くの？』

「行っただけのお楽しみだ」

何度尋ねてもほほ笑むだけでリンは答えようとしない。

「おやじー、もう一杯よこせー」

「よーし！今日はとことん飲むぞー！」

「おー！」

「それにしてもうちの親方がよう……」

「お、おい。お前後ろ……」

「ああん？なんだ、って親方あー！？」

聞こえてくる喧噪は活気があり、この街が生きているんだと感じた。

『みんな楽しそうだね』

「カナタはああして騒ぐのが好きなのか？」

『そうでもないけどさ、楽しそうにしてる人を見るのって気分がいいじゃん』

「それには同意する。ただああいった酔っ払いは苦手だな」

『相手するのが面倒なんですよ？』

「ぶっちゃけてしまふとな。ここを右だ」

たしかに堅そうなりんはああいうのが苦手そうだ。  
リンの後を追ひ、細い道に入る。

さつきまでの通りに比べると細いその通りからもう一回まがったところ  
にその店はあった。

「ここだ。店名は「月の踊り場」、よくティーと2人だけで来るんだ」

『へえ。ここ木製住宅なんだね?』

言葉の通り、その店は石造りの建物がほとんどを占めるこの街には  
似つかわしくない木製住宅だった。

山の中にあるロッジのような感じの2階建て。

「家主の趣味らしくてな。さあ、入ろう」

木の扉を開けると一気になかの喧噪が聞こえてきた。

「いらっしやいませー、適当なところに座ってー」

カウンターで女性がこつちを見ることなく忙しそうに言った。

「女将さん、ソラルです。上あがってもいいですか?」

「ん?リンちゃんじゃないかい!最近来ないから心配してたんだよ、  
ってその男の子は誰だい!」

リンが女将さんに声をかけると笑顔で振り向いた。

「もしかしてオトコかい?」

女将さんがそう言うと近くの酔っ払いたちがそれぞれに嘆き始めた。

「そ、そんなあ！リンちゃんに男があー」

「お父さん認めんぞぉー」

「アンタは家に家族がいるでしょうが！詳しい話は後で聞くよ！さつさと上にあがってな」

「ありがとうございます」

苦笑しつつ階段をのぼるリンの後について行くと2階のベランダに出た。

ベランダは人2人には十分すぎるほど広く、これまた木製の椅子とテーブルがある。

「座ろうか」

『うん』

向かい合う形で座るとリンが口を開いた。

「カナタはもう演習に参加するのは決めたのだな？」

『うん。さっきはああいったけど自分で考えて決めたよ』

「そうか、なら私も深くは問うまい。…私にも考えがある」

納得してくれたかどうかわからない最後の言葉が妙に気になる。

『考えてな——』

「はいよおまたせ!」

どこかと階段を女将さんがあがってきた。

両手にはたくさん料理を抱えている。ちよつと多すぎやしない?

「さすがにそこまで食べれませんよ?」

「いーの、いーの!リンちゃんに彼氏ができた記念なんだから!」

「いや、カナタと私はそんな関係では、カナタも何とか言ってくれないか?」

「恥ずかしがらなくていいのに。彼氏くん、リンちゃんは優しい娘だからね!

泣かせたら承知しないよ!」

『了解しました!』

「カナタまで...」

恥ずかしがって俯くリンもかわいいなあ。

「少年、ノリがいいね。おふざけはこれぐらいまでにして、そんなに遅くまで出歩けないんだろう?」

「ふざけていたんですか?」

『いやあ、照れるリンかわいんだもん』

「かつ」

「ほんとに付き合ってるみたいだねアンタら。  
じゃなくて、余った分は梱包したげるから持ち帰りな」

『ありがとうございます女将さん』

「それなりにごゆっくり」

『ふう、美味しかった…ってまだ怒ってるの？』

「…別に」

からかいすぎたかな。

食事を始めてからリンが喋ることはあまりなかった。

「それではな」

『まだ寮まで結構あるし送るよ』

正確な時間はわからないがそれなりに遅い時間だろうし。  
リンと2人で夜道を歩きたい、と思ったのも理由の一端……ほとんど  
だけど。

「ありがとう」

無言で夜の街を歩く。

ふと、空を見上げた。

『すっげえ』

夜空には元の世界ではなかなか見ることが出来ないほどに綺麗だった。

空を分かつ天の川。

天体望遠鏡でも覗いているみたいだ。

「カナタ？」

急に立ち止まったのでリンは不思議に思ったらしい。

『今行くよ』

その後も黙って歩いたが、いつの間にやらリンの険しい雰囲気は取れていた。

「わざわざ校門前まで、ありがとう」

空を見上げながら歩いているとすぐに学校に着いた。

『どういたしまして。それじゃあ、おやすみなさい』

「それでは、今度こそ」

夜間用の入口にリンは入っていく。

そんな後姿に何か言わねばならないような気がした。

この星空を、間接的にはいえ見ることができたのはリンのおかげだ。

だからそのお礼ぐらい言っておきたい。

『俺、ここに来て良かった。召喚してくれてありがとう』

返事を待たずにそのまま帰った。

『遅くなりました』

一階の厨房には親父さんだけがいた。

「おかえり、ちょうど良いところに来た。試食しないかな？」

『いただきます！』

温かい紅茶でも飲みながら親父さんとお菓子談義に花を咲かせる。まるで、家族みたいだと思った。

第10話 「プラネタリウム・オーバー」(後書き)

御覧くださり、ありがとうございます。

照れてる女の子を書きたかった回です。だけってわけじゃないんですが。

もう少し学園モノにしたいですが、ままなりませんねー。

またおこしくださいます。

## 第11話 「嗚呼、厄介事のかほり。」

先日から、カナタの演習に向けての特訓に見学、そしてたまに参加させてもらうようになった。

演習までは一ヶ月もない今、カナタは休む間もないほど物事に追われている。

午前中こそ通常の九回生と同様に授業を受けているが、午後の魔法実技以降は自宅に帰るまでほとんど休みをとっていない。

一度カナタに大丈夫か質問したが彼は

『んー。リンが思ってるより大変じゃないよ?』

と笑顔で答えるだけだった。

特訓の内容は実技の時間の後、2時間程度校長と魔法の練習。

その後休みをとらずに練習場へ移動し1〜2時間セオドア先生と剣、というより超至近距離での訓練。

私は魔法の練習のみ時折参加する。

カナタと同じメニューをこなすだけでかなりの疲労をつけるので、とても体を動かすことが出来ない。

週末は2日間、居候先で店の手伝いをずつとしている。

何度かティーやクラスメートとその店に行ったが、カナタが疲れている様子はなかった。

あの日、一週間前2人で晩御飯を食べに行った日にカナタが言っていた言葉が気になっている。

感謝を表す言葉だった、はずなのに。

どう考えたって、人間ならば明かなオーバーワークだ。

朝は勉強、昼から夜まではとんでもない密度の鍛練。

休日だとしても一日中店番をして夜には何かしている。

身体が大丈夫だとしても精神がへばってしまう。

周りは彼を特別だから、として見ている。

例外の精霊だからただ呆れるだけ。

そうして「人間」の、ただの少年として考えなくなっている。

このままでは、彼は私が居ても孤独を感じるようになるのではないだろうか。

杞憂なのかもしれないし、そうであってほしい。

だから、私はあの日彼に願った時と同じでいよう。

カナタと離れずに一緒にいよう、どんな時でも。

季節は巡り、というわけじゃないけど十月になった。

学校の木々は青々と茂っているが、街の木は少しずつ秋らしくなっている。

学校の制服も冬用らしくコートを身につける生徒が増えてきた。  
俺は特に暑いとも寒いとも感じないのでまだコートは着ていないが。  
そして時間が経つにつれ、魔法実技の時間にも変化がでてきた。

「はぁーい、今日の実技の時間はこれまでです」

「きりーつ、礼」

「『』ありがとーございましたー』」

ここって本当に異世界なのか、と疑ってしまうような挨拶だ。

この学校、というよりココには部活動などもない。

なので放課後はとりあえず三回生にしてみれば自由な時間になる。

もう少し年齢を重ねれば自己鍛錬などに励む子どもがでてくるかもしれないがそれはまだまだ先のはなしだろう。

「兄ちゃんは今日もつくん？」

メロウが尋ねてくるも、答えはわかっているのだろう。

『ああ。今日も晩飯はいらない。というか演習まではそんな時間ないかもな』

「ちえー、父ちゃんも母ちゃんも最近兄ちゃんと晩飯食えないって言ってたぜー」

『悪いな、演習が終わったら普通になると思うから』

「メロウくん、仕方ないよ。カナタさんは精霊だからいそがしいんだよ」

「そうですね。引きとめていては悪いですよ」

タステが気遣ってくれるのは予想どおりだがルリアがこう言ってくれるのは意外だ。

「…む、なんだか失礼なことを考えていますわね？」

炎のように赤い瞳で俺を見上げるルリア。

『いえいえ、そんな滅相もないですよお姫様』

迫力はないけど、こんな時女性に逆らうもんじゃない。

それぐらいには俺だって常識人だ。

「なんで…」

む、ルリアの様子がおかしい。

「ちょっとこちらに来てくださいますし！」

『今から魔法の——』

「愚図愚図してないではやくっ」

嗚呼、厄介事のかほり。

んで、校舎裏。

建物の陰になっているが、風が通りジメジメとした雰囲気はない。  
ここで告白とかがしたら叶う、みたいな伝説でもありそうな太い木が生えている。

「カナタさん、先程のことですが」

ぜいぜい、とルリアは肩で息をしている。  
ちよつと落ち着かせてやんなきゃ。

『ん？告白でもするの？』

この木に伝説なんてないだろうけど。

「…ばれているようですわね。そうですともルルリリアとは仮の名前——」

ここで一気にためて——

「わたくしの本名はルリア＝フィーネリア＝アスカ。この国の第三王女ですわ！」

ばーん！

知りたくなかった、そんな事実。

だって絶対厄介事でしょ！

なんでこちらに来てから退屈しないんだろうか。

「何か言うことはございませんの？シルトがパチンコに打たれたような顔をして」

シルトは元の世界でのハトに良く似た鳥だ。

つまりは「鳩が豆鉄砲をくらったような」表情をしたということ。

『うん。どゆこと？なんでいきなりそんなことカミングアウトするの？』

「…どういふことですか？」

『さっきのお姫様ってのは冗談だったんだけど』

「わたくしの早とちりだったと？」

『だろっね』

一国のお姫様がこんなにまで早とちりなのはどうかと思う。  
あれだけではれたと思うなんてこの先隠していけるのだろうか。  
よく今までではなかったな…。

「ばれなかったというか、メロウとタステは信じませんでしたわ」

『いつてたんかい…』

普通信じないよね、こんな話。

『ルリアの言ってることが冗談じゃないなら、俺はどうすればいいの？』

ここで嘘でも冗談でした、と言ってくれればいいんだけど。

「秘密にしておいてくださいまし…。それよりも信じますの？」

論点はそこじゃないんだ、なんて言っても通じないだろう。

『ここに俺が来て、君は一度も嘘をついてないからね。誰にも話さないよ』

やれやれ、だまっていればいいのならこれ以上問題は起きないかな。

『それじゃ、俺は魔法の特訓があるから』

遅れると校長に何言われるかわからんし、早く行かなきゃ。

「わたくしを信じて…」

校長先生との特訓は魔法を使うことではない。

マナの流れを観ることと、ひたすらに集めたマナを制御することだ。前者は魔物に魔法を使われる前に相手の魔法を判別、妨害する為の訓練らしい。

実際にマナの動きをみていると様々な魔法の中でも一つとしてマナが同じ動きをするものはない。

だからその動きだけで、どの魔法を判断し先手を選ぶことが出来れば演習での生存率もあがる。

これは結構簡単だった。

問題だったのは、後者。

俺が現在使える魔法は先日のはじめて使った「カナタスベシャル魔弾」のみ。その精度を上げるためのものだ。

「乱れてる」

『はい』

出来ない。

そりゃ、特訓を始めた時よりは長くマナの収束状態を維持することができるようになったけど。

「カナタ、深く集中しすぎないことも大事だぞ」

3日に1日ぐらいのペースで一緒に特訓を受けているリンは俺よりもずっと収束が上手だ。

『了解。かるーく、かるーく』

脱力する。

息を吐いて集中を緩める。

「力を抜きすぎだ！」

「暴発（呆）」

『え？』

…そんなこんなで特訓に使っている教室には俺の魔弾のせいで空いた穴がたくさんあります。

その後、セオドア先生との特訓を終えると辺りは真っ暗だった。今日はリンもないので先生と別れると1人だ。

昼に比べて幾分人の減った街道を歩く。

その時、妙な物が目についた。

裏路地で子どもを抱えている男が居る。

ただそれだけなら不思議なことでもなく、父親が子を抱えているように見えるだろう。

ただ妙だったことは、その子がどう見たってルリアだったことと男が認識障害の《闇》の魔法を使っていたこと。

校長曰く何か後ろめたいところがある人が良く使う魔法らしい。何も無ければいい。

一応事情だけでも聞いてみよう。

『すいません、その子のお知り合いですか？』

返事はない。

言葉の代わりに男は《水》のマナを操りはじめる。

マナの動きは幸運に校長先生の特訓のおかげで分かる

男が放とうとしているのは「アクアスパイク」、高圧の水のカッターで相手を切り裂く魔法。

人を殺す魔法……！

絶対に只事じゃない。

ルリアを助けないと！

男が魔法を完成させる前に魔弾で男の足を打ち抜く。

「ッ！」

咄嗟に放った魔弾は男の右太ももに風穴を開けた。

マナは術者の集中が途絶えたため、霧散。

『この子はボクの友人なんで返してもらいますよ！』

男に詰め寄り魔弾で穴のあいたほうの足を蹴りつける。

が、男はそれを避けて踵を返しすと逃げ出した。

『待てっ！』

こう言われて待つ馬鹿にあったことはないけど、とりあえずどなってみる。

怪我で思うように動けないためか男はルリアを俺に投げつけてきた。

……ルリアを？

『あつぶね!』

何とか彼女を抱きとめる。

危うく避けるとこだった…。

見たところ外傷はなく、眠っているだけのようだ。

「またな、バケモノ」

男はもうどこにもいない、逃げられた。

第11話 「嗚呼、厄介事のかほり。」（後書き）

毎度、ご覧いただきありがとうございます。

序盤に少しリンの一人語りです。彼女は彼方を心配しているけれど、  
当の本人はリンが感じた周りの態度に疑問をもつてなかったり。自  
分のことは自分が一番わかってる、というわけでもなかったり。  
そして戦闘シーンorзです。生温かい目で見てください…。

それではまた、お越しください！

第12話 「眠り姫と精霊と」(1)「(前書き)

セキュリティはしっかりと。

## 第12話 「眠り姫と精霊と（1）」

男を追い払ったものの、ルリア嬢が目を覚ます様子はない。  
多分男は逃げるために思い切り彼女を投げたらしく結構な衝撃だったというのに。

『おーい、お姫様。ちょっとお話伺ってもよろしいですか？』

抱いたまま彼女に問いかけるも返事はない。

現状はよく分からないが、このまま外に放っておくというのはありえない。

一応助けてしまったわけだしひとまずルリアを安全なところに連れて行こう。

それくらいの責任はあるし。

『となると衛兵さんとこの詰め所が1番無難かな？』

ルリアが起きることを少し期待して呼びかけるも返ってくるのは寝息だけ。

早く家帰りたいなあ…。

それから15分後。

とりあえずあのままでは幼女ルリアを抱き締めた男とでも思われそうなので眠った彼女をおんぶした。

その状態で大通りを歩く。

結局、道行く人々の視線を感じつつ歩く。

信じてくれ！俺はロリコンじゃ（略）。

そうこうしている内にリンがこの前の道案内の時に教えてくれたところはまだ近くだ。

確か角をもう一度曲がれば…。

『あれは…！』

丁度詰め所の上空あたりに《水》のマナが渦巻いていた。見たことのある魔法だ。

校長が特訓時に見せてくれた《水》のトラップ魔法。

案の定、詰め所の中の衛兵も、表を歩いている人々も気がついていない様子はない。

校長曰く、このトラップの魔法は術者が発動タイミングを指定する必要がある。

威力はかなりあるが、あまり遠くから操作することは出来ない。

つまり加害者は近くににいるというわけ。

先ほど、ルリアを連れ去った男は《水》の魔法をつかおうとしていた。

誘拐されていた子どもを届けるならば、衛兵詰め所に行くのが至極当然。

…嫌なつながりを感じる。

ここにきて、衛兵以外に頼る必要が出てきた。

真っ先にリンの姿が浮かんだ。

使われた魔法からするに危険な香りがするから巻き込みたくない。

しかし、この世界で頼れる人といえば彼女しかない。

『携帯とかあったらなー』

伝令に使える魔法はあるらしいのだが校長曰く俺は使えない。

と、もうひとつ安全な場所を思いついた。

学校だ！

先日俺が壊した結界も次の日には復活していた。

校長はいつも特訓の後、すぐにいなくなってしまうから何処にいるかわからないけど。

とりあえず、目的地も決まった。

ここにはじきにトラップをかけた魔術師に引っかかってしまう恐れもある。

善は急げ、嫌な予感も感じていたし俺はすぐにここを離れ、学校に向かった。

夜間用の入り口を通り、女子学生寮に向かう。

ちなみに俺が抱えているお姫様はまだ起きない。別に重いわけじゃないからいーんだけど。

『夜分遅くにすいません、寮母さんはいらっしゃいますか？』

寮母室の明かりはついていた。

……返事はない。

もう一度呼びかけようとしたところで見回り中と書かれた木版が目についた。

「見回り中：御用のある方はご自由にお入り下さい。寮母」

『いや、ダメでしょ!?!』

くっ、おもわずつつこんでしまった。

だってここ女子寮だよ?うら若き少女たちが生活してるんじゃないの?

寮母さんそれでいいのかよ!

瞬間、何故か親指を突きたてた校長の姿が浮かんた。もうやだこの学校。

……リンの部屋に行こう。

「どうぞ、鍵は開いている」

リンの名札が書いてある扉はすんなりと開いた。

『こんばんは、リン』

「カナタ?どうした?このような夜更けに…その子は?」

『かくかくしかじか』

「?」

こういう表現はダメなのね。

『とりあえず説明したいから入っていい?』

「私は最初から構わないと言っているだろう。さあ、入ってくれ」

一応、ね。

勝手に入るのはなんだか腰がひける。

…ただのチキンですごめんなさい。

『失礼します。リンの部屋に来るのも久しぶりだよ』

「半月ぶりくらいか? その子はベットに寝かせればいい」

『ありがとう』

ルリアをベットに移し、リンの向かいに座る。

「改めてこんな時間にどうした?」

リンの眼光が鋭く光る。

「襲われた…? しかも《闇》と《水》を使う相手に?」

『《闇》の魔法に関してはその人が発動しようとするタイミングは見れなかったけどね』

男の説明に驚きはしたものの、リンは冷静に話を聞いてくれた。

ルリアがこの国のお姫様だということは伏せておいた。  
口止めされてるし、今大切なのはルリアをどうすれば良いかだ。

「魔法を使える者をさらうなど……」。

この子が子どもだといえどもかなりの強者だろう。  
それにしても何故私の所に来たんだ？」

『頼れる人がリン以外に思い浮かばなくてね』

「…そうか」

『迷惑だったかな？』

「いいや、頼ってもらえて嬉しい」

そういつてもらえて何よりだ。

「とりあえず学校ならばそのような心配はないだろう。今まで以上に強力な結界もある」

ルリアは一晩リンの部屋に寝かせておくことに決まった。

「時間も遅い。」

まだカナタに聞きたいこともあるから明日しっかりと話そう」

『聞きたいこと？』

「まだこの子について隠していることがあるだろう?」

リンは少々慚然としている。

『はい。また明日』

にこやかに笑う俺の顔が引きつっているような気がしてならなかった。

俺は嘘をつくと顔に出るみたいなんだ。

翌朝、いつもより早起きして学校に向かう。

いつも俺が起きなかつたら怒るメリアだが今日は早く起きたというのに怒られた。

「居候のくせに私より早く起きるとかなんなのよっ」

本人もわけのわからないことを言った自覚はあるようで、頭上には?マークが浮かんでいた。

本当にわけがわからないよ。

流石にこの時間では女子寮は入りずらかったので寮付近のベンチでリンを待つ。

そういえばルリアはリンと面識はなかったんだっけ?

ルリアは目が覚めたらいきなり知らない女性の部屋というわけなの

でかなり驚くだろうな！。

妙に聡いところがあるからすぐに納得しちやいそうだけど。  
と、女子寮からリンが飛び出してきた。  
俺を見つけると一直線に走ってきた。  
なんだかあわててる？

『おはよ、どしたの？』

「あの子が目を覚まさないんだ…！」

## 第12話 「眠り姫と精霊と」(1)「(後書き)

ご覧いただき、ありがとうございます。

少し更新ペースがおそくなっていますorz  
頼ってもらってリンは表面こそ平静を装っていますが、歓喜しています。

一応数話にわたっての話になるかと思います。  
今回はさわりということでご容赦ください。

それでは、またのお越しを。

### 第13話 「眠り姫と精霊と」(2)」

ルリアの寝顔に違和感はない。  
ただ眠っているだけだ。

目を覚ますことがないだけで。

「校長先生！」

「診せて」

まだ朝礼前、リンの部屋に校長先生が来た。  
俺の目には魔法の影響に見えなかった。

ルリアにマナを重ねて見る事が出来なかったからだ。  
リンにそのことを伝えると校長を呼ぶことになった。  
そしてその選択は正解だった。

「今、この子の身体には魂が閉じている」

『魂？どう見ても眠っているようにしか…』

「どういふことでしょうか？」

「心を奪われたようなもの。厳密には眠りの呪い」

フォーリンラブ  
心奪われた？

睨まないで校長先生！

というか心読まないで！

俺だけでなく、リンも校長の言っていることが理解出来ない様子だ。

「呪いならばマナの動きでカナタが感知できるのでは？」

『俺には何も見えませんよ？』

俺マナを見るととき色で表しているが、視覚で判断しているのではなく「そう」認識できるただだから。

たとえどんなに暗いところでも《闇》のマナを見逃すなんてことはあり得ない。

マナと存在する色は似ているけどまったく違う色をしているから。

「君達にこの子が狙われる心当たりは？」

「私は何も」

『…あります』

ルリアが本当にお姫様なら、それが理由だろう。

「カナタ？」

「聞いた？」

『本人から』

リンはルリアの正体を知らないから驚いた表情で俺を見ている。

「それが黙っていたことか？」

『…はい』

リンに包み隠さず話した。

「まったく…そんなこと他言するわけがないだろう」

『約束だったからさ』

「カナタらしいというか馬鹿正直というか」

『馬鹿にしてる?』

「誉めているんだ」

どうだか、なんてここで言ったら話がこじれそうなので口に出すことは無かった。

やはり校長もルリアの正体を知っていた。

それどころかルリアのお母さんから直々に頼まれたらしい。

『ルリアのお母さんって王妃様なんじゃ…』

「知らぬが仏（笑）」

そこまで言っただけのやめて欲しい。

閑話休題。

校長曰く犯人といよりその集団に心当たりがあるらしい。

反政府組織、自称「革命軍」。

この国とラック共和国連合の間にあった小国を母体としている。

他国の王に従うのも、連合に取り込まれるのも良しとせず徹底抗戦を唱えたらしいがいろいろあつて軍部の一部を除きアスカに併合された。

その一部が故国を取り戻すためという名目でうごいているらしい。しかしその発足は今から百年以上前で今ではただの暴力集団と化している。

今回の件は王女の人質にとって大金を得ようとしていたらしい。というのも、昨晚そのような脅迫状が届いた模様。

しかし邪魔者のせい<sup>オレ</sup>で王女を奪うことに失敗し、王女の意識を取り戻させることを交渉の要に変更。

『呪いは解けますか？』

「この魔法は解こうとしなければ効果が出ない」

「効果は今出ているのでは？現に彼女は眠っています」

「呪いの効果は夢を見せ続けること。内面に働く呪いだから君がマナを観ることはできない」

肝心の解けるか否かを校長は答えていない。

俺の視線で気がついたのだろう。

「これぐらいの年齢の子ならば私が治療できる。この子のことは私に任せて授業を受けなさい」

「どうする？」

リンは関わった以上、ルリアのことが気になるといった様子だ。かなりうずうずしてる。

『校長先生に任せよう』

「……わかった」

少々不服そうだったがリンは俺の意見にしたがってくれた。この件は政治の分野っぽいし面倒そうだしね。ルリアも無事だったんならもう俺がすることはない。良かった、良かった。

んでもって、教室。

今1限が終わったところ。

リンが横でかなりそわそわしてる。

多分ルリアのことを心配してるんだろう。

『落ち着きなよ。校長を信じよう？』

「いやいやいやいや、ぜんぜんぜん落ち着いてるぞ？」

いつもの冷静な口調で壊れてる…。

ティーちゃんの時もだったけどリンは人に任せることに慣れていない感じがする。

信賴していかないわけじゃなくて待つことに慣れていないというか。  
まあ、こればかりはどうしようもない。

あの校長が言ってたんだし。

「これぐらいの年齢の子ならば私が治療できる」という台詞に違和感はあるけど。

わざわざ限定して言うってことはルリアの年頃じゃなかったら危ないってことなのか。

考えても無知な俺に分かるはずはないので結局待つだけになる。

「おいおい、ソラルさんに何かあったのかい？」

俺とリンの会話が途切れたところを狙ったように例の名無し君が話しかけてきた。

みなさん憶えているだろうか？

ちなみに俺はまだ名前を覚えていません。

リンを落ち着ける方法も思いつかなかったので意識を前の名無し（  
♂）にむける。

『それよりも君の名前を覚えてくれないかな？』

「…僕が話しかけるたびに聞いてくるのやめてくれないかな？  
結構傷つくというか…」

「はい、席につきなさい」

あ、先生だ。

ルリアのことは校長が何とかしてくれると信じているからさほど心配じゃない。

むしろそわそわしてるリンのほうが心配だ。  
けれど今は授業だ。

俺は意識を切り替えて勉学に励むことにした。

『まだ後ろ向いてるの？先生来たよ』

「どうして僕はこんなにも邪険に扱われるのだろうか……」

リンに色目使おうとしてた、なんてリンの前で言ったら彼女はどう  
反応するんだろ。

「よし、キリがいいところで終わんなきゃな。これで授業を終わ  
ー」

だからセオドア先生、せめて答えあわせだけでもしてって下さい。  
中途半端な授業な黒板を残してセオドア先生は教室を去って行った。  
ほんとにあの人の帰るスピードはねーっす。先生まじばねーっす。

「ああそつだ、自分の部屋に忘れ物をしていたな」

それ誰に対しての言い訳なんだろうか。自分自身？

『治療するなら保健室かどっかに移してるんじゃない？』

「…少し気分が悪くなったので保健室に行こうと思う」

どうしてそんなに心配だと言わないのだろう。

聞いてみよた。

「カナタには隠せないな」

誰だって授業中もぼそぼそと独り言を言っていたら気がつくと思うけど。

気がつくどころか付近の生徒だけでなく先生もリンの態度に違和感を感じてたし。

基本的に賢いけど……若干あほの子だな。

「わざわざ校長先生に頼み、任せろと言ってくれたんだ。心配してました、などと言っては失礼にあたるだろう」

うん。本当に賢いんだ。あくまで基本的にだけど。

『先に校長先生の所に行こう。ルリアはリンのこと知らないでしょ』

「む、それもそうだな。

ぐっすり眠る姿は見ていたらまるで姉にでもなったような気持ちになっていた」

お姫様の姉って。

そういうことじゃないってのは分かってるよ？

ただそう思ったただけで。

くっだらなことを考えているという自覚はあるのでスルーして下さい。

校長室に行くとまたも机に座っている先生がいた。

「アイデンティティーだから」

誰もそんなこと聞いてません。

結果的に言つとルリアは意識を取り戻した。

彼女も寮生活だったらしく今は自室でもう一度治療を受けているらしい。

当の本人は誘拐されたことをまったく憶えておらず、気がついたら昼過ぎでかなり驚いていたとのこと。

俺とリンは明日にでも挨拶に行くことにした。

また、ルリアのこともあり、今日の魔法実技の時間は全学年通して休校になった。

教員総出で学校内に魔法で侵入した形跡の探查と街の見回りに出かけたりするために。

魔導学校である以上、どの先生も基本的に王の認めたかなりの手練の魔術師ばかり。

加えてセオドア先生のように剣技が優れている先生もいる。それにともなつて、俺の特訓は今日ばかりは中止となった。

自由になった放課後。

「みなでご飯食べに行こー」

というティーちゃんの決定で「月の踊り場」に行くことが決まった。

「いらっしゃい！」

『どうもです』

「お！色男君じゃないか」

「彼はトキタカナタというしっかりとした名前が…」

「はいー、リンちゃん落ち着いてー。おばちゃん上にあがっていい？」

「料理は適当でいいかい？」

「おまかせー」

先日と同じテーブルを三人で囲む。  
すぐに女将さんが料理を持ってきてくれた。

『魚料理ですか！』

そう、何かと肉やパンばかりで少々魚に飢えていていた。

「たまたま鮮魚が手に入ってね」

「これは何という魚なのですか？」

「マゲロっていう淡水魚だよ」

『ブッ』

「どいたのー？」

『ごめんなんでもない』

淡水魚て！

それにこの魚、白身なんです。

「おーい、おかわりくれー」

下から女将さんと呼ぶ声が聞こえてきた。

「おっと、話してる余裕はないみたいだね。ま、それなりにごゆっくり」

今日はこの前よりも早いからじっくりと食べられそう。

「『いただきます』」

三人で合掌する。

こちらの世界には食前にこのような挨拶をするような決まりはなかったが、癖で俺がしているとリンとティーちゃんもするようになった。

ちなみにディステイ家では当然のルールと化している。

そう、これが俺の計画「人類いただきm（恥ずかしいので省略）」。

俺の食事中の余計なひと言で久しぶりにタナトスさんにも会った。  
ルリアのことも話したけど

『なんで精霊なのにあんたはそんなのに関わるのか理解できないわ』  
と怒られた。

メリアといいタナトスさんといいどうしてこいつも怒られるんだろう。  
デレをくれ。

いや、リンのデレがあればそれだけで…。

そんなこんなで楽しい食事の時間は過ぎていった。  
本当に楽しい時間はすぐに去っていく。

「じゃー、私はここでー」

「泊っていくのか?」

そっいえば女将さんはティーの叔母さんらしい。

「うん。寮に届けもだしてるから大丈夫ー!」

『じゃ、おやすみ』

「また明日な」

「じゃねー」

こうして俺はリンと2人で夜道を歩く権利を得たのだった。  
ティーちゃんがこっそりとウイंकをしていた。  
ありがとう！ティラミス先生っ！

「なんだかんだで久しぶりだな」

リンが横を歩きながらぼつりと呟いた。  
それなりに人通りが多い通りなので危うく聞き逃すところだった。

『ご飯たべに来たのが？』

「いいや、カナタとこうしてゆったりと話すことがだよ」

穏やかな微笑み。

「昼以降はあまり顔を会わせられなかったしな」

『一緒に魔法の特訓したじゃん』

少しおちゃらけつつもリンとの会話を楽しむ。

俺としても結構、いやかなり嬉しいのだ。

「それにしだって特訓中はほとんど口をきく余裕などなかったではないか」

『…もしかして寂しかった？』

「……そうかもしれないな」

『えっ？』

「ふふふ、一本いただきだ」

気になる女の子と2人きりで楽しく話すこのシチュエーションに我ながら浮かれていた。

だから、ってつなげるのはおかしいだろうか。

誰だって未来が分かるわけではない。

この時はこの楽しい時間が無理やり終わらせられるなんて思ってもみなかった。

リンと喋れなくなるなんて、思ってもみなかった。

2人で、微妙にお互いを意識しているような距離で歩いていた。学校近くの、人が少ない通りに差し掛かった時、複数の男が道をふさいだ。

「なにか用か？」

不審に思ったリンが問いかけるも一団は言葉を返そうとしない。セオドア先生と打ち合っている時と似たような感覚を感じる。

鋭く、こちらを射殺さんとする殺気。

その中の1人が前に歩いてくる。

「よう、また会ったな。バケモノ」

《闇》のマナが渦巻いた。

### 第13話 「眠り姫と精霊と」(2)「(後書き)」

毎度、ご覧いただきありがとうございます。

とりあえずお姫様の件は一件落着……？

本気で名無し君の名前を考えていません。いつか思いつくでしょう！(棒)

それではまたのお越しを。

修正：第三話の各属性のシンボルについて

《夜》のシンボル精霊を「蛇」から「月光」に変更しました。

設定ミスでしたorz。すみません！

こんな調子の本作ですが、生温かい目でスルーしてください。

## 第14話 「眠り姫と精霊と」(3)「

「死ねっ、小僧！」

後ろから両刃の剣を持った男が飛びかかって来た。

動きもセオドア先生に比べると亀のように鈍重に見える。

いや、亀もあれで結構速く動く時もあるから失礼だったかな？

「来るぞ、カナタ！」

『大丈夫い』

振り向きざまに剣をたたき落とし、足を引つ掛け転ばせる。

「うがつ！」

男は頭から地面に落つこちると意識を失った…って弱っ。

せっかく後ろとってんのにわざわざ大声上げるとかワケわかんね。

『先生たち呼んでくれない？』

前後をパツと見て人数を確認する。

《闇》のマナで形作られた黒い玉を放シャドーボールとうとしているのが前後に各2名、剣やらダガーやらを持ったのが前に3人と後ろに2人。

意識を失った特攻馬鹿を除いて計9人。

と確認しきつたところで少しずつタイミングをずらして魔法を発動させてきた。

『あつぶな』

「え？——」

咄嗟にリンを抱えて横に逃げる。

こちらに向けてくる殺気といい、魔法の発動のスピードといいかなりのものだ。

魔法の着弾に合わせて前後から5人の男が飛びかかって来た。

さっきの馬鹿とは違うようで踏み込みの音さえ出さずに。

かなりの手練を相手にこのままリンを抱えて立っているようでは俺らの命は無い。

人数の少ない方へこちらから飛び込んでいく。

『必殺・精霊だつしゅ！』

意味のないことを叫びながら。

いやいや、あれですよ。ドーパミンが出て興奮してる感じの。最高にハイってやつ。

この世界に来て、テンションが上がると身体能力が上がるようになったと気がついたのはセオドア先生との特訓の時だ。

もともとこんなに痛い性格ではなかった……と思う。

ともかく、リンをまたお姫様抱っこして男たちの間を駆け抜けた。すり抜けざまに2人の獲物<sup>ぶき</sup>をけっ飛ばしつつ。

「お、俺様の剣が！」

「鉄の剣を折ったと！？」

ブレーキの代わりに魔法を使っただけの1人の顔を使う。

「へぶしっ」

すげえ、何回転もして転がってった。

流石精霊だっしゅ！

説明しよう精霊だっしゅとは（略）一瞬で十メートルを駆け抜ける必殺わざなのだ！

別名、電光石火。後からカッコよさ気な名前を思いついた。

え？たいしてカッコ良くない？心配しないで、自覚はある（キリッ。

「い、今何がおきたの？」

突然なんかが起きるときたまリンは口調が可愛くなることに気がついたよ。

…今はそんな事態じゃないですよー。

『リン先生たちを』

俺とリンが襲われた理由は全く分からないが、幸運にも今日はこの街に数名の教師がいるはず。

こうして軽く戦ってみて分かったが今のところ負ける気がしない。

セオドア先生との打ち合いに比べたらこの集団を相手にする方がずいぶんマシだ。

先生たちが来て、数の不利さえ補えば負けるはずない。

「貴様ア」

急に近くに立っていた俺に驚きつつも残った方の魔術師がマナを操り始める。

それと同時にリンがマナを操りだしたのを感じする。

『こんなドガンッ！至近距離でつかわせるわけないでしょ』

『こんな』ぐらいのところで1発蹴りを叩き込んだ所でその男は壁にめり込むようにしてこちらも吹っ飛んだ。

多分最後まで聞こえてなかったと思う。

俺が言い終わると同時にリンの魔法が天に昇っていき三尺玉ばりの爆発を引き起こした。

綺麗な花火だぜ。

「カナタ、私も戦うから降ろしてくれ」

少し顔を赤く染めたリンを降ろして残りの男たちと対峙する。

今の一連の流れ（せんとう）でかなり焦ってる様子だ。

『もう一度聞きますけど、何の用ですか？』

ただの時間稼ぎに最初に声をかけてみる。

「昨日のこと憶えてねえのかよ？バケモノ」

予想外にも男が会話に乗って来た。

「貴様ッ、化け物など！」

『リン、少し抑えてね』

「だが…」

「テメえのせいで俺たちの計画はおじやんだ」

男の後ろで残った魔術師たちがマナを操り始めた。  
なるほど、あちらさんも時間稼がらしい。

『計画ってなんですか？というか俺あんたらみたいなのわからん  
集団に狙われる覚えはないんですが』

遠くのほうから近づいて来るマナが複数ある。  
おそらく先生たちが魔法で移動しているのだろう。

「おいおい、昨日のこと忘れたとは言わせねえぞ」

男の態度は喧嘩腰にみえるが目は落ち着いてる。  
てか昨日あったことといえば……

『誘拐事件？』

「おい、まさか今思い出したんじゃ……」

凶星である。

男だけでなくなぜカリンも呆れた顔をしてる。  
なんで？

「まさか素でそう言っているとは……」

『だってそのことは今日解決したじゃん』

ルリアは無事で「革命」とかいう犯罪者の計画は丸つぶれ。  
解決してないことがどこにあるんだ？

「多分こいつら「革命」の残党だぞ」

リンが呆れからバカを見るような目で俺を見ている。  
そんな目で見ないで！……いや、これはこれで…。

『…それぐらい最初から気づいてたもんね』

今気づいた。

「ああチクシヨウ、こんな野郎のせいで俺たちは…」

なんで俺は犯罪者からもバカにされてんの？

「だがよ、それも今ばかりで助かったぜ」

男がにやりと笑う。

「時間稼ぎはこれぐらいだ。永遠に眠りに堕ちてしまえ」

この勝負、あちらさんの勝ちらしい。

向こうのほうが多く早く、欲しいタイミングを得た。

魔術師たちが魔法を完成させた。

負けたとは言っても「時間稼ぎ勝負」に負けただけなんだよね。

『リンは下がって！』

あえて向かってくる魔法に突っ込む。

別に突撃する以外に才能がないってわけじゃないんだからね！

俺を捉えようとする魔法の攻撃はティーちゃんの暴走時に出てきた

黒い腕、「侵界」よりも細い。

こんなの当たる道理がない！

最初に倒した男からもう一度剣を奪って喋っていた男と剣を結ぶ。

「おっせえなあ！」

『まだまだガキなんでね』

軽口を言いあいつは一撃一撃加えるたびに男の剣が重くなっていく。けどセオドア先生と比べると大したことない。それに

「トキタ！」

こっちの時間稼ぎも終わった。

セオドア先生が一瞬で2人の魔術師を切り伏せた。

魔法の腕が消失すると同時にセオドア先生は男の後ろに迫っていた。

「畜生！」

俺よりも危険だと察したらしく、男はセオドア先生に飛びかかっていく。

だが、遅すぎた。

飛びかかるうとした時、男は先生の剣の腹で頭を殴られ一発で昏倒した。

「阿呆、昨日の今日で夜道を歩く馬鹿があるか」

『心配とかないんですか？』

「お前以外に誰一人として立ってないんだ。心配する気も起きん」

え？

誰一人？

『リンッ！』

俺の背後には倒れた（・・・）人影しか無かった。  
崩れ落ちた、男たちとリンが。

駆け寄るとリンは額から血を流して意識を失っている。

『リン！？』

抱き上げて呼びかけるも答えてくれることはなかった。

「・・・どうした？」

『わかりません。さっきまで元気だったのに・・・』

「まさか例の呪いじゃないのか？いくらなんでもそれだけで意識を失うなどありえんぞ」

まさか、あの腕が呪いだっただのか。

ならリンが今こうして意識を失っているのは俺の所為だ。

くだらない時間稼ぎなんてしてしないで、魔弾も使っていれば魔法を使わせることも無かったのに。

今思えば、さっきまでの自分はどうしてあそこまで好戦的だったのか。

いつもの俺ならこんなときはリンを連れてまっさきに逃げるはずだ。

「大丈夫ですか!？」

ほかの先生も遅れてやってくる。

「賊は片づけた。それと、ソラルが例の呪いを食らったらしいから部屋に運んでやってくれ」

「……了解です」

『リンは俺が運びます。先生方はこの男たちをどうにかして下さい』

「……わかった。学校までは俺も同行する」

『ありがとうございます』

俺は倒れたリンをおぶり、先を走るセオドア先生について行った。意識を失った人間を一人かかえているというのに、全然重く感じなかった。

学校に着き、リンのベッドに彼女を寝かせるまで先生はついてきてくれた。

「校長は朝までは来ない。自分が起こしたことだ、お前が見てる」

口調は厳しかったが先生は俺の頭をくしゃくしゃに撫でてからどこかに行ってしまった。

特にできることもすることも無いので明りも灯さずになんとか眠っているリンを見る。

ここにきて直ぐ、ティーちゃんを止めたときにもずっとリンの寝顔を見ていた。

『可愛いなあ』

呟いてから自分の不謹慎さに気がついた。

## 第14話 「眠り姫と精霊と」(3) (後書き)

ご覧下さっている方、お気に入り登録して下さい方、誠にありがとうございます。

タイトルの眠り姫はリンでした。ルリアはあて馬みたいな感じです。彼方はロリコンではないので。

次でこの事件？は解決するかと思います。それから真剣に書き方の勉強をしたほうがいいのかもしれない……。

またのお越しをお待ちしております。

第15話 「眠り姫と精霊と」(4)「(前書き)

お待たせしました！

え？まってなかった？

そうですか（´・ω・｀）

## 第15話 「眠り姫と精霊と」(4)「

また、夜が明けた。

やったことと言えば一晩中、眠っているリンを見ていただけ。

想い人といっても過言ではないリンが怪我をしたというのに我ながら落ち着きがありすぎる気がした。

リンが意識を失ったのも昨日俺が戦うことを選んだから。

平時の自分ならば、今考えると自分らしくなかった。

セオドア先生とここ数日特訓漬けだったとはいえ俺はただの学生だった。

人と争うことはあまりなかった。

争うほど自分の心をぶつけられる人がいなかったのも関係してるの  
だろうけど。

……結局、昨日の自分は自分と思えないってことなんだ。

昨日は戦闘することを選んだ自分が。

今は心が静まりきっている自分が。

「おはよう」

『おはようございます、校長先生。リンを診ていただけますか?』

校長はルリアのときと同様に夜が明けた後に来てくれた。

おまけにセオドア先生も。

何しに来たんだろ、おっさん。

なにはともあれ、校長が来たからには一安心かな?

「ところがどっこい」

『へ？』

「私ではこの子を助けることは不可能」

安心じゃなかったー！

『Hey！何を仰りやがっているのですか？』

「落ち着け」

『おいおいこの俺が落ち着いていないだって？H A H A H A、何言ってるんだい？』

「ぜんっぜん落ち着いて無いだろお前」

セオドア先生は突っ込み要因だったようダネ  
俺は校長に頼れば大丈夫だと思っていたのに。  
その校長が無理と言う。

不思議なほどに静寂を保っていた俺の心にさざ波が広がる。  
さざ波どころか大荒れだ。

『…詳しく話を聞かせてください』

表面上は急に落ち着きはらっているみたいだけどかなり焦ってますよ、私。

「この呪いは彼女の魂ソウルと外界の間に壁を創るもの。

その壁は人の魂の強度により強度を増す。そして――」

『二〇文字くらいで簡潔にまとめてください』

だって人の心とか魔法のことなんて俺わかんないしね。  
決して考えるのが面倒くさいわけじゃないよ？

「じゅうごさいいじょうはたにんがたすけることはむり」

二四文字……ギリギリセーフッ。

そういえば呪いをかけられたルリアを助ける前にも校長は変なことを言っていた気がする。

「これぐらいの年齢の子ならば私が治療できる」

たしかこんなことを言っていた。

『じゃあリンを助ける手立ては無いってことですか？』

後悔が胸をよぎる。

昨日はなぜ戦うことを選んだのか。  
守りたい人がいたというのに、その人を危険にさらしてまでなぜ戦ったのか。

普通に考えて俺のせいだろjk。

うあああ、鬱だ。

「お前の表情は分かりやす過ぎるな。最後まで話は聞け、トキタ」  
そんなに顔に出やすいの？

「まるで家族か恋人でも失ったかのような顔をしているぞ」  
やーん恥ずかし、ってこんなことを続ける気にもなれない。  
以前にもリンからからかわれたな。

『正直なところ、リンを失うのならば僕はここにいる意味を見出せません』

「話は最後まで聞け。理解する努力をしろ」

こえーよ、先生。

堅気の人とは思えない目をしてやがる。  
ともかく、セオドア先生の口ぶりだとリンを救う手立てはあるようだ。

落ち着こう。

「この子が今助かるには自分で壁を壊すしかない。けど方法はある」

『そう聞いて、俺が協力しない訳がないでしょう』

考えるまでもない。

むしろ答えることさえ必要ない。

俺はリンのためにここにいるのだから。

「即答、か」

『でもわざわざこんな説明をするなんて。あれですか、その方法だと俺の命の危険でもあるとか?』

この展開ならそういうことだろう。

「君はともかくこの子に危険はある」

「というかトキタはどうでもいい」

なんて教師陣だよ、この学校は！

『……貴方達のボケには突っ込みませんよ。

それよりも、リンに命の危険があるような方法試せるはずありません』

「その危険も君次第」

『とりあえず俺はどうすれば?』

「この子の魂と君を繋げる」

『つまり?』

「本契約を結んで」

本契約。

先日、リンから聞いた話を思い出す。

召喚者と精霊との間にマナラインをつなぐ儀式。

通常は精霊は魔力供給無しで現界し続けることはできない。

しかしながら俺はその必要がなく、何の問題も無かったためそれを結んではない。

とまあ、いろいろとそれらしいことはともかく俺が想像したのは――

「キスして」

『ぶつはあー！急に何すか？校長！』

「この部屋の外にいるから。ここからは若い人に任せます」

「……がんばれ、トキタ」

具体的には他に言うことないのか？

校長は一度も振り返ることは無く、セオドア先生は憐れんだ目をしてドアを閉めていった。

『なんて大人たちだよ』

ふと言葉が漏れてしまったものの、返してくれる人はいない。そうだった、今この部屋にいるのは俺と眠ったリンだけ……。

俺と眠ったリンだけ。

俺とリンだけ。

2人きり。

今からするのは契約。

そして契約〓キス。  
思考停止。

……しそつになったが状況が許してくれない。  
リンを助けたい。

ならば、俺がすることは決まっている。

俺の葛藤なんてどうでもいいし、リンにどう思われたってかまわない。

俺は覚悟を決めた。

なんて格好つけて考えてみたけどいまからするのは無防備な女の子を襲うことなんだけどね！

『他意はないぜ』

キリツと誰にともなく言い訳をして、今度こそ俺は覚悟を決めた。寝転がっているリンを見る。

いつもの凜とした表情とは違い無防備に眠る姿は幼く見えた。寝顔が可愛いって犯罪です。

細かい描写をしたらキリがないのでこれだけにしときます。

『リン、寝てる所につてのは卑怯かもしれないけどゴメン。やましい感情がないって言ったらウソになっちゃうけど、君を助けたいんだ。』

あとから存分に怒ってくれて構わない』

我ながらくつせえことを言っている自覚があります。

それでも、けじめってやつです。

『起きてください、お姫様』

あーあーあー。

これ思いだして三日はもたえ苦しむ自信がある。

こんな感じに自分をごまかしつつ、俺はリンに口づけをした。

## 第15話 「眠り姫と精霊と」(4) (後書き)

今回も閲覧して下さった方、お気に入り登録をしてくださっている方ありがとうございます。

更新遅くなり申し訳ありませんでした。

予定ではこの眠り姫編？はサクッと終わらせるつもりだったのですがもう少しかかりそうです。自分の文章力エ…。

彼方がリンとついに<sup>キス</sup>鱈しやがりました。爆発してしまえばいいのに。

それではまたのお越しをお待ちしています。

第16話 「眠り姫と精霊と（終）」

「……………」

「……………」

エクリプス魔導学校の子学生寮の廊下は早朝にも関わらず、緊迫した空気に覆われていた。

その原因は九回生のリン＝ソラルの前に、この学校の校長と教員が立っていることであつた。

普段の二人ならば周りもこうはならない。

校長であり、魔法の盛んなアス力でも指折りの女性魔術師でもある彼女と、一騎当千と謳われた剣技をもつセオドア＝クライハウス。

「……………」

「……………」

この二人が臨戦状態で並んでいた。

恐らくこの二人に現時点で敵う者はこの学校には一人もいない。

魔法実技で群を抜いた実力と素質を持つリン＝ソラルやティラミス

＝ハインスでさえ一瞬に散ることだろう。

総合的にみても拮抗出来るものは数名のみ。

当人達にとっては全力とはほど遠いものの、常人ならば本能的恐怖を感じる殺気を放っていた。

二人と不幸にもすれ違うこととなつた女生徒は後に

「死が自分にも訪れるものであると初めて感じたッ……！」

と語ったほどに。

「校長、今からでも遅くありません。やはりトキター一人に任せるのはやめにしませんか？」

「早くあの子を助けるには彼しかない」

（当人達にとつての）口喧嘩の原因は現意識を失っている少女の処遇にあった。

生徒をなんであれ危険な目に遭わせることを恐れるセオドアは彼にしては珍しく上司に口答えをしていた。

生徒からはやる気のない教師ナンバーワンの（不）名誉を受ける彼であるが、実際はそんなことはない。

不器用な自分の性格を誤魔化すためそう振舞っているだけである。

そもそも、万事適当ならばこれまでの剣技を持つにいたるまで努力を続けることもないし、教師になれるはずもない。

世の中には隠れた努力家である彼を嘲笑ってしまうような怪物のよ  
うな者は少くないのだが。

なにはともあれ。

状況は寮の廊下でかなりの実力を持つ者が相對している。

「ああ言つてはソラルを助けるのに契約したトキタが動かない道理がないでしょう？」

犯人も捕まっていることですし、時間をかければ我々でも助けられたはずです」

軽い怒りをにじませた、いつもとは全く違う彼の口調に運の悪い通行人は戦々恐々とする。

その感情を向けられた当の本人はそれこそ何時もどおりの無表情だが。

「それではあの子が精霊を召喚した意味がない。君が思っているより二人の関係は意味がある」

セオドアは十七年前初めて彼女と出会った時から変わらぬ無表情に軽く嘆息しつつも言葉の意味を考える。

全く意味のないこと、誰かに害を成すようなことを主張するような性格をしていないのはわかつている。

おそらく今回も真意はあるのだろう。

しかしながら、一度は説得され、彼方<sup>カナタ</sup>に任せることに同意した彼だが不安は大きくなっていくばかりだ。

（やれやれ、俺は嫁入り前の娘を持った父親か）

「眠りに落ちたお姫様を助けるのは、王子様だと相場が決まってる（笑）」

「……」

本当に真意はあるのだろうか、と余計に心配し始めた彼である。

りいん——。

背後の扉の奥から鈴にた音が鳴り響いた。

「入るよ」

セオドアに言ったのか、部屋の主にいったのか。

いぶかしむ彼を置いて彼女はリン〃ソラルの部屋に入っていく。

それを追って入って行ったセオドアだったが、部屋の中で見た風景に彼は言葉をなくした。

なぜならば、眠る少女の横には彼方が着ていた服のみが落ちていたから。

彼女の部屋からは精霊にんげんが一人消え去っていたのだから。

気がついたとき、周りは木々に囲まれていた。

俺の服装はいつかのジャージ姿。

元の所、日本でお気に入りだったのスニーカーも履いている。

『私は誰？ここはどこ？』

いろいろと「痛いこと」を言ってからリンの唇に触れたまでは憶えている。

展開的にここがリンの心の内側ってことだろうな。

世界を超える経験をし、魔法だって目の当たりにした俺はちょっとやそつとのことでは動じない。

以前読んでいた小説のような世界に来て、心がとっても広くなった

気もする。

友達もできたし！

小学生がほとんどなんだけど。

『はあ…』

リンを探せばいいってことかな？展開的に。

背が高く、うつそうと茂った木々が空の光を遮っている。

とりあえず進んでみるかな。

時間を計測する手だてがないからどれほど歩いたのかわからないが大分歩いた気がする。  
これから何をすべきかもわからんし。

『？』

ふと視界が開けた。

眼前には森の間に出来た広場だった。

人が整備したというよりも日の当たり方でたまたまこうなったという雰囲気。

その広場の中央には小さな水たまりのような池があった。

池の外周こそ小さいが広場の端からは底が見えない。

『……のど乾いたな』

これまた唐突にのどの渴きを感じた。  
渴きに気がつかなかったのではなく、本当に唐突に水が欲しくなっ

た。

俺は何かに突き動かされるように池に駆けつけ一心不乱に水を飲んだ。

手で何度も何度も水をすくう。

次第に異様な渴きも飢えてきて、俺は後ろに手をついて空を仰いだ。いつしか空は暗くなっていた。

空にはリンと晩飯を食べた帰りのように星が輝いていた。

リンと過ごした楽しかった時間を思い出して心がほっこりする。

『誰もいない、か』

ん？

自分の言動に違和感を感じた。

確かに俺は思ったことをすぐに口に出してしまうけど今は違う。

俺の言葉じゃない。

『私はこれからどうすればいいんだろうな』

この疑問に答える人は誰もいない。

そして今のも俺の言葉じゃない。

頭の中ではわけのわからない自分に対してエマージェンシーだ！

もう一度ど水を飲み、池に近づいた時、俺は驚いた。

どれぐらい驚いたかと言えば——そんなちよっどいい語彙は俺の辞書にはありませんでしたっ。

ともかくとってもびっくりしたということです。

さっき水を飲んだ時は無我夢中だったから気がつかなかったが、水

面に映ったのは美少女だった。  
リンだった。

「何も覚えていない、自分がだれかもわからない」

静かになっていた水面に波紋が出来た。  
ぽつぽつと俺の目から涙がこぼれてた。

「私は」

見慣れた彼女よりいくらか幼い容姿をしたリンは咽びんでいる。  
周囲にはだれもいないというのに大声で泣くのを良しとしていない、  
それもまたリンらしい。

おそらくここは過去のリンの記憶。

彼女の記憶の始まり。

リンが家族が欲しいと言ったのは彼女に記憶がなかったからなのか。

水面に映った自分の泣き顔を見ていたつもりだったが気がつくと俺  
が水中にいた。

さつきから「気がついたら」ばかりだ。

今だって水中だというのに水の重さも冷たさも感じない。

まさに夢見心地というやつだ。

リンの涙がゆっくりと落ちてきているのを見る、不思議な経験がで  
きたぜー。

正直、涙を流すリンをどうにかしてあげたいけど俺にはどうもでき  
ないのが分かる。

ここは記憶のなかだから。

「私は…独りだっ」

――！

『違っつ！君は独りじゃない！』

水面に遮られたリンに思わず叫んでしまった。

「え？」

偶然かもしれないがリンが俺に気がついてくれた気がした。

『待つてて、今に会いに行くから』

言い終えたとき、俺の視界は暗転した。

そしてまた「気がついた」とき、俺はまたリンの部屋にいた。

リンに背を向けるようにして部屋を見渡す。

別にリンの唇を見て恥ずかしくなつたわけじゃないんだからなつ。

出て行つたはずの校長とセオドア先生もいる。

二人は眠るリンには目を向けず、ソファで向かい合つて座りながら眠っているようだ。

外は日が昇り昼過ぎな様子。

「……ん」

『リン！？』

眠っていたリンから声が聞こえた。

リンはうつすらと瞳を開いた。

俺が何を出来たのかはわからないけど、何かができたんだ！  
そう思うとうれしさがこみあげてきた。

『リン、大丈夫！？』

横たわっているリンの肩をつかみ呼びかける。

「ん…カナタか？」

ゆつくりとリンが体を起こした。

『よかった』

「何をそこまでしんば——キャー！」

『！ いきなり悲鳴なんてどうしたのっ？』

寝起きのぼうつとしたリンの顔が真っ赤に染まった。

「そ、その格好…！」

『うわぁ！』

裸やん！

俺の裸なんて誰が見たいんだってばよ！？

『！』

殺気！

「賊が！」

リンの悲鳴に誘われて、起きたセオドア先生が斬りかかってきたあ  
ー！ー！

「カナタっ？」

そうこうして、今回の事件は幕を閉じたのだった。  
なんて独りごちてみる。

「約束どおり会いに来てくれたな」

『当然ですよ。お姫様？』

「…カナタは狙って言っているのか？」

計画どおり…なんつって。

正直なところリンが覚えているのを知って実はかなりドキッ  
た俺でした。とし

第16話 「眠り姫と精霊と」(終)「(後書き)

今回もご覧下さりありがとうございました。

眠り姫編？は終わりです。

今回の話、彼方の言動を振り返ってみるとまんまジブリでしたorz  
ハウル。動く城じゃないですか。既視感とか感じた方すみません。  
彼方は中二病ですね(笑)

それではまたのお越しをお待ちしております。

第17話 「招待と正体」 (前書き)

セクハラ、ダメ、ゼツタイ。

## 第17話 「招待と正体」

昼休み。

それは午前中の授業から解放された学生諸君にとっての憩いの時間だ。

友人と他愛もないことで話し合っている人がいたり、提出が差し迫った人が居たり。

その過ごし方は人それぞれ。

まさに千差万別。

だから上級生が下級生を校舎裏に呼び出すつても間違っちゃいないだろう。

そしてその逆も然り。

『んで、どしたの？ルリア』

「まずは、いきなりお呼び付けしたことを謝らせて下さいまし」

『いや前置きはいいから』

学食にリンとティーちゃんを待たせているため、早く用事を教えてくれ。

いきなり九回生の教室に入って来たルリアに教室は騒然となった。

そりゃ、高校生の教室に小学生の子が入ってきたらみなさん不思議に思うだろう。

そのまま、無理やり引きづられるようにしてここまで来たという次第である。

昨日はリンと契約を結ぶだとかそんなこともあり忙しかった。

なので今日にでもルリアの調子でも伺おうと思っていたのだが。

「私の騎士になりませんか？」

……予想の斜め上を行きやがった。

この前と同じこの伝説の木（命名俺）の下。  
この木が俺になんか恨みでもあんのか？

『……………』

「校長先生から四日前の誘拐事件の件、聞きましたわ。  
私はそれを聞いて大変感動しまして」

だからってなぜ騎士に？

やはり小学生の考えてることは分からん。  
む、小学生というより女の考えてることが。

『えーと、やだ』

「なあっ？お、王国の騎士になるという名誉を蹴ると仰るのですか？」

『ああ。俺はのためにこの世界にいるわけじゃないからね。

それに、君の騎士になりたいやつらは君の周りにいると思うよ？』

「そう、ですか。

では、せめてもの礼として今度自宅にご招待させていただけないで  
しょうか？」

ちゃんと、引き下がれるとは。

俺よりもずいぶん幼いのに大人っぽいな。

将来はいい女になると思うぜ（セクハラ）。

『それは良いけど。当然、招待されるのは俺だけじゃないだろ？』

「ええ。もう一人の方も当然ですわ」

『じゃあ、人を待たせてるからもう行くな？』

「それではまた後ほど」

『———ということがあったんだ。リンも一緒に行く？』

「なんだかずるーい。私も行くー」

『ティーはなにも関係ないでしょうが』

タナトスさんは現在、ティーちゃんのペンダントを媒介にして現界してる。

そうすれば魔法を使うことこそ出来ないがこうして会話をすることができる。

そんなことしないで現界してる俺って…。

「だって、リンちゃんが危険だったのに蚊帳の外だったしー」

リンと俺が”本”契約を結んだことはティーちゃんには伝えた。それによって、何故か校内での周知の事実となっていた。

「ついにリンちゃんが大人の階段を――！」とこんな感じで。

特に公表するつもりもなかったのだが。

にやにやしてる女子の視線がつらいのですよ。

「……………なあ、カナタ」

『どうしたの？笑顔が引きつってるけど』

「先の少女の自宅とは…」  
ルリア

『』

さてここで問題です！

お姫様の自宅といったらどこでしょうか？

「王城だろう」

『』

「なにに――？王都に行く用事でもあるの――？」

『ティー、パンが落ちるわよ』

「ありがとー、たーちゃん」

『ん』

タナトスさん、たーちゃんでもいいんだ。

……問題はソコじゃなくて、王都か。

俺はすっかりこの街の何処かに行くのだと思っていたのに。  
そっぴゃルリアはお姫様だったわー。

『ここから王都までどんくらいかかるの?』

「まずはそこか。馬車だと三日ほどだ。

とはいえ王族が用件があるというならば王宮付きの魔術師が転移魔法を用いてくれるだろうが――」

リンはここで一度言葉を区切った。

言いたいことはまだあるといった様子。

と言うより、そういうことではない、と。

『んんん。詳しいことは後で聞いてみよう!』

なので俺は思考放棄に走ることにした。  
めんどいことから逃げるに限る。

「……やれやれ、実技が終わるころにカナタのいる教室に私が向うから。

件の少女と一緒に待っていてくれ。

そのときに詳しく話そう」

『やー、リンがいて良かった。ありがとうね』

問題が解決しそうな気がしてきた!

「（むう、そんな笑顔をされては怒れないではないか……）」

『どつたの?』

「な！なんでもない！」

そう言ってそっぽを向いたリンの顔が赤い。

にやにやとティーちゃんがりんをからかってるみたいだけど。  
リンといいルリアといい本当に女の子は何を考えてるんだか。

放課後、ルリアと一緒にリンを待っていた。

このクラスの生徒は（俺を除いて）まだ十にも満たないのでやはり  
授業が終わると蜘蛛の子を散らすように遊びに帰って行った。

ここでの俺の立ち位置は

「放課後いつも遊びに来ない子」  
なので特に誘われない。

別に寂しくなんかないぞ。

俺は特訓という大切な用事があるからだから。  
いや、ほんとに。

『誰に言い訳してんだよ...』

「どうなされましたの？」

『なあーんにも』

リンたちのクラスは俺らとは少し離れている場所で授業を行っている。

授業内容によってその場所も変わるため、リンはああ言ったのだ。

『それにしても、どうして俺を騎士にしたいと』

「だから先程言ったではないですか。

貴方のような勇敢な者、なかなかおりませんわ。

こんなチャンスを眺めているだけのほうが愚かですわ」

およそこのクラスでここまでしつかりと自分の意見を話せるのはルリアくらいのものだろう。

異世界とはいえ、ガキンちょはガキンちょです。

『にしちゃ、やけに簡単に引き下がったな？』

「我ながら貴方が精霊だということを失念しておりまして。  
つまり貴方にはこの世界に生きる明確な召喚者りゆうが存在するということ」

失念とか難しい言葉を使う小学生だな。

繰り返し言っとくけどメロウとかはふつーにB A K Aですぜ。

タステ曰く、魔法実技以外の授業はずっと寝てるらしい。

そんなんでなれんのか、魔術師。

『わかってくれる分にはありがたいくらい인데とさ。  
どうして、そこまで精霊に理解があるんだ？』

あくまでちよつとした疑問。

「自宅にも何名か仲の良い子がおりまして」

精霊にということだろうか。

話に一区切りついたところで教室のドアが開いた。

「遅くなった」

『大丈夫だよ。』

ルリア、この人がこん睡状態だった君を預かってくれた人だよ』

俺と違い、見ず知らずの年上ということでルリアが緊張しているのがわかる。

「はじめまして、では無いのでしょうか。」

私がルルリリア「ファイアラーです」

「ああ、私にとっては初めてではないな。

だがこうして元気に話している君に会うのは初めてだ。

はじめまして。リン「ソラルという者だ」

うむ、年は違えど美少女二人そろつと壮観ですなー（セクハラ）。

『違つつ、セクハラなんかじゃ……ルリア、この人も正体を知ってる。』

どうせならこの人も招待していいかな？』

「？ 勿論ですわ。」

この前の件、ありがとうございます」

「いや、君みたいないい子ならいくらでも迷惑をかけてもらってもかまわないよ」

リンさんかけー。

女子高はいつたら「お姉さま」とか呼ばれそうな感じ。  
当然、アニメ的な意味で。

「…お姉さまと呼ばせてください！」

「ははは、構わないよ。」

「ちょうど妹が欲しいと思っていたしな」

ほんとに呼ばれやがった。

黒髪黒目の和風美人と金髪碧眼の姉妹とかどんな深夜アニメだよ。

……実際のところ、この世界では髪色の全く違う家族も珍しくない  
んだけど。

予想外にリンとルリアが仲良くなったため、招待の件は早々にカタ  
がついた。

「自宅」といっても、この街の中心<sup>スパイア</sup>にあるらしい。

そして日程も今月に迫った演習の後、具体的には十一月に決まった。  
話の終わりにリンがルリアを明日の昼食に誘ったので明日から、昼  
はもっとにぎやかになりそうだ。

「明日の昼食に友達を二人呼んでもよろしいかしら？ お姉さま」

「構わないよ、ルルリリア」

『それじゃあ、俺はそろそろ特訓に向かうかな』

「そうか、私も今日は参加させてもらおう」

『了解。じゃな、ルリア』

「また」

「また明日、楽しみにしていますわ」

『それがあんなことになるなんて…!』

特訓場所に向かいながらそれっぽく呟いてみる。

「いきなりどうしたんだ？」

『言ってみただけ（キリッ）』

「ふふっ、カナタは本当に子どもだな」

そんな笑わなくても…。

そこまで、おもしろいのか？

「そんなところを含めて、召喚したのが君で良かったと思うよ」

『…俺も、君で良かったと思ってる』

特訓場所まで、互いにこれ以上語ることはなかった。

そんな必要も感じなかった。

## 第17話 「招待と正体」(後書き)

ご覧になってくれた方、お気に入り登録をしてくださっている方、ありがとうございます。

演習が差し迫っています。作品内に。

そろそろ内容を詳しく考えねばなるまい……！おい

またのお越しをお待ちしております。それでは。

第18話 「君には知る資格がない」 (前書き)

新学期の人ががんばって。

## 第18話 「君には知る資格がない」

「それじゃあ授業を始めます」

リンとともに特訓を始めようか、という時に校長が急にそんなことを言い放った。

『果てしなくいやな予感がするんですけど』

俺だけかな？

ちらりと横にいるリンを窺うも彼女はそんなことを思っていない様子。

『いきなり何故？』

「変わったから」

この人は文法とか勉強してきたほうが良いんじゃないかならうかつ。校長は人じゃないー、とかそういう突っ込みはなしで。

「君たちは変わったから」

「”私たち”、ですか」

なるほど俺たちか。

意識的に思考から排除してきたけどそうはいってられないか。

『契約のことですね』

リンも同じことを思っていた様子で校長をじっと見ている。

「そう。先達として、君たちに教えておかなければならない」

あれ？

やけに雰囲気重いぞ。

「召喚前に学んだこと以外に何かあるのですか？」

「ふつつはない。けれど君たちは違う」

一瞬の間。

「そして君は誰とも違う」

澄んだ湖のような瞳が俺を捉えている。

ごくろ、と隣に立ったリンが生唾を飲む音が聞こえた。

彼方やリンのいる、エクリプス魔導学校から東北東に約70キロメートルほどの所にアスカ王立士官学校はある。

塹壕や城塞が周囲を取り囲み、勉強や魔法を教える他の学校とは全く違うこの施設。

国防の要となる軍人を排出することがここの設立目的だ。

とはいってもアスカは——天候の問題で使えない所も多いが——広大な土地を持つ国家なので士官学校はこころ一つではない。

そのため士官学校同士ではこの士官学校を近隣の地名——月齡  
エクリプス  
0の新月——から「0番」と呼ばれている。

また、魔物が多く生息する新月の森に近いこともあり設立目的より  
も近隣の町や村の盾として機能していたりする。

そんな士官学校からエクリプス魔導学校のある街までは地面の状態  
もあり馬車でも約二日かかる。

かかるのだが、その道のりを馬車の数倍の速度で駆ける四つの影が  
あった。

彼らの身分はたなびくアスカの国章が入った漆黒のマントが示すと  
おり、0番の訓練生である。

時刻は黄昏時。

普通の旅人はこんな時間に狼がでるこんなところをうろろろしては  
いない。

「やれやれですね、教官の思いつきには」

「そう言うな、アリス」

「いきなり特殊部隊などと……、もう演習を目前にしているというの  
に」

「今更どうしようもなかつ」

「アリスさんもヨナも、くっちゃべってないでもっと急ぎやがれ。  
私は腹が減っているんだ。

ああああ、「月の踊り場」のディナーが私を待っている！」

「……相も変わらずプリーは食に関しては面倒ですね」

「……そう言うな」

「さあっ！ ばんばん加速していくよー！」

「（つつこんだら負けだ…）」

「セシルールさん？ どうかありませんか？」

「い、いやっ！別に何もっ」

「そうですか。」

——いきなりボクたちと、ということに緊張なさっているのかも  
しれませんが」

「いえ、な、何かありましたら自分から申し出るのです」

「そう、ですか。」

ではなにかありましたらボクがヨナにでも言ってください」

「お心遣い感謝します」

「こおらあー！アリスさんに新入り、口を動かしてる暇があるなら  
走りなさいー！」

「わかりましたよ」

「り、了解！」

ちょうどそのころ、彼れらの視界には目的地<sup>スパイア</sup>の放つ光が飛び込ん  
できた。

あの学校まではもう少しだ。

「これが第一の、最大の違い」

『んなあやふやな。ほとんど拡大解釈じゃないですか』

「……」

『リン？ 俯いてどうしたの？』

「な、な、なんでもないから」

耳が赤い気がするけど。

『そう言うならいんだけどさ』

それにしても校長の知識はどこから来てるんだか。  
どうして通常召喚された精霊と、精神によって召喚された精霊の違いを知ってるんだろ。

「君には知る資格がない」

『だ・か・ら！どうやって俺の考えを読みとってんですか!?!』

この際、校長の中二臭い台詞を突っ込んでる暇はねえ。

「顔にでてる」

「表情が分かり易すぎるよ、カナタは」

リンまでそんな。

自然と体が崩れ落ちてしまう。

客観的に説明すればOTLという感じに。

『もうその件は気にしないことにします。

……まだ授業はあるのでしょうか？』

「そう。君たちが本契約を結んでくれたお陰で君の魔法特性が分かった」

「やっとうですか」

俺から顔を隠すように俯いていたリンが復活。

まじめトークなら大丈夫らしい。

というかリンは何を考えてたんだろ。

「君の属性はこの世界に存在するどの魔術体系とも違う」

『はあ』

「…カナタの属性がですか？」

「先日の測定の際は無属性と断じたけれど違った。

君の属性は全ての複成属性。

通常ならば互いに相殺しあうはずのそれらが合わさった結果の新しい属性」

「なるほど……」

……なるほど、わからん。

これで分かる人がいるんだろうか。

『ええと、新しい魔術体系ってことはリンとかが使ってる魔法はつかえないってことですか？』

「簡単に言つと、そう。

君は新しい魔法の祖。

自分で魔法を考えなければならぬ」

ようわからんけど無茶言われてる気がするよー。

「…それでは特訓を始める」

そしてやっぱり説明は最後までしない、それが校長クオリティ。

こんな説明もあつてか俺の集中もいつも以上にぶれてしまい、今日だけで新しい穴を五個ほど壁にこさえてしまった。  
最近は減つてたのに。

セオドア先生との特訓では新たな事実が発覚することなく戦闘訓練練だった。

この時にはさっきまでの混乱もある程度落ち着いていたので目立ったミスをすることも無かった。

練習も終り、さつさとセオドア先生は帰って行った。

今日はリンもティーちゃんもいないしさつさと帰りますか。

『久々の平和な帰り道を楽しみながら帰ろー』

そして俺は暗闇に染まる学校を後にした。

彼方が学校を後にしたころ、セオドア「クライハウスが

「そついや明日は0番からトキタと同じ部隊になるやつが来るんだ  
つたな。

……伝え忘れてた」

などと呟いていたことを知る者は本人のほかにはいなかった。

第18話 「君には知る資格がない」(後書き)

毎度、ご覧下さりありがとうございます。

現在、演習に向けての準備期間みたいな感じです。

校長が言った「最大の違い」とはなんなのか。

説明をぼかしてるのは考えてないからではアリマセンヨ？

次は新キャラでるかもです。

またのお越しをお待ちしております。

## 第19話 「仲がいいのが一番」

学校からの帰り道はとても平和で昨晚はまっすぐ家に帰った。

晩飯はメロウのおふくろさんが作ってくれていて、仕込みを終わらせた親父さんと一緒に食べた。

だれかとともに食べる食事はいいもんだ。

そして朝。

「帰ってきたらその感想を聞かせてよ？」

『ありがとう』

俺はメリアの作った弁当と新作の菓子を手に玄関に立っていた。

ここに住まわせてもらった当初ルリアは異様なほどにツンケンしていたのに最近は結構優しくなった気がする。

前は存在から否定するような暴言ばかりぶつけてきたのに。

今では人格を否定されるぐらいだよ！

五十歩百歩だって？

そんなことわかってるさ。

『中身は何なの？』

「…ひ、秘密よ！

全部あんたが食べなさいよね」

『どうして明後日の方向を見るのさ』

脂汗もかなりかいてるし。  
怪しすぎる。

「ともかく！

あたしも店を手伝わなきゃいけないんだから、早くいきなさい」

『……いつてきます』

これぐらいは日々のスパイスってことで我慢しよう。

お世辞にも俺は朝起きるのが得意ではないので登校時間も早くは無い。  
い。

しかし学校生徒の四分の三数が寮から通っているためデイスティ宅周辺には学生は見えない。

見えるのは店で働いている大人や学校に通っていない子どもぐらいである。

この国には義務教育がないらしいから決して幼い子どもしかいないというわけではない。

俺と同じ年ぐらいのやつだっただくさんいる。

『学生つてのは楽な身分だよな、全く』

バイト経験なぞないから本気で働く大変さなどわからん。

今はこの身分を享受するのみだ。

我ながら能天気思索にふけりつつ学校までの道をゆっくりと歩く。

「すみません」

ぼうつとして歩いていたので突如前に立った人に反応出来ずかるくぶつかってしまった。

『わっ、すみません』

正面からぶつかったというのにその人は全く動かなかった。まるで電柱にでもぶつかったかのように。衝撃で鞆を落としてしまった。

「いいえ。」

イクリプス魔導学校の生徒さんですよ？学校までついに行ってもよろしいでしょうか？」

礼服のような服に身を包み、地面すれすれまである黒いマントを羽織ったその人物は女性だった。

柔和な顔立ちで紫がかった髪を首筋ぐらいまで伸ばしたショートカットにしている。

優しそうなお姉さんといった体だ。

『別に構いませんが、どういったご用件ですか？』

一応警戒しておくことに越したことはないだろう。俺の警戒能力はアホウドリ並みだからな。

「校長先生に御用事があるのですが連れの者たちとはぐれてしまったもので」

『そついつことでしたら』

鞆をもちなおしてその女性とともに歩き出す。

「なにやら美味しそうなものの香りがしますね。  
焼き菓子とクリームのような」

『そうですか？

多分これの臭いですよ』

メリアからもらった菓子が入った袋を指す。

「とても、美味しそうですね…」

女性のおながぐう、と大きな音をたてた。

『よろしかったら食べますか？』

メリアにああ言われたけど別に人にあげたって構わないだろう。  
袋を開けるとクッキー生地の中にクリームが詰まった菓子、シュー  
クリームが二つ入っていた。

この世界にもシュークリームはあったんだ。

『どうぞ』

そのうち一つを差し出すと女性は礼を言うとペロリとたいらげた。  
歩きながら食べても行儀が悪いとは感じられない丁寧な食べ方で。

「大変美味しいですね!」

朗らかに微笑む女性にこっちまでいい気分になる。

『も一ついかがです?』

「まあ、ありがとうございます」

ごめんね、ルリア。

その後もお菓子の話で盛り上がりつつ学校に着いた。  
校門前で女性と別れ、教室に向かう。

廊下を歩いていると女生徒の人だかりができていた。  
その中心からはマナが流れている。  
白いオーラみたいなマナが。

『なんぞこれ』

「あはよう」

『リン、これ何の騒ぎなの?』

身振りで挨拶を返しつつ尋ねるも彼女も分かりかねるようだった。

「私も席を外していてな」

『…少し気になるけど教室行こう』

「そうだな」

「おはよう、爽やかな朝ですね」

その人だかりの横を抜ける直前にそんな声が聞こえた気がした。  
不意に立ち止まり人だかりを見るも一瞬前と変わった様子は無い。

「どうしたんだ？」

『んにやー、なんでもないよ』

そうして俺らは教室に向かった。

リンと本当に契約を結んだというのに変わらない時間が過ぎてんなー、俺。

数学の授業を聞き流しつつそんな思索にふける。

俺が不真面目って訳じゃないよ、こちらの学問は以前の世界のモノより劣っている。

この世界の生活水準から考えたら相応なのかもしれない。

学問ってのは人の失敗と失敗と一握りの成功の積み重ねなんだからヒトに分類されない者もこの世界にはいるので一概にはそうとは言えないのかもしれないけど。

……そういうことではなく、この世界の現在はまだまだ「中世」ぐらいなんだろう。

じゃなくて！

リンとの間には不思議な縁——校長曰くマナを通すライン——  
を感じている。

けれど、新しく魔法が使えるようになったわけでもなし。

ここにきてからの異様な身体能力の向上と体の違いは本契約以前からあったものだ。

もう寝よう。

考えても分かんないから、こういう時は睡眠に逃げるのが一番だと思うわけですよ。

昼食の時間は昨日のルリアとの約束通り大勢でとなった。

食堂だと場所をとれない可能性があったので中庭でね。

リンとティーちゃん（+タナトスさん）といういつものメンバーに加えてルリア、メロウ、タステの小学生相当三人。

「お姉さま！はいあ〜ん」

「お、ありがとう」

「私にもちよーだい！」

「……やです」

「ひびー…」の子ひびー！「」

「これがせいれいさんですか？」

『コレとは何よ！？』

「ひぐう！ご、ごめんなさい…」

「あーあ！泣ーかした泣ーかした」

『ちよ、あんた泣くのやめなさいよ！気にしてないから』

俺はてつきりメロウとタステが気まずい空気になるんじゃないかと心配してたけど杞憂だったみたいだ。

よくよく考えてみればこのメンツで一番対人スキルがないのって俺なんじゃ…。

いやいや、別にそんなわけないよな。

ない…よな…？

「どうしたんだ？浮かない顔をしているな」

「トキタさん、もしかして私たちと食事をするのが嫌でしたか？」

『そんなわけないよ！ちよつと考え事してただけ』

自分のコミュ力の無さを痛感してたなんて言えるわけないじゃないか。

「うわ！ やっちゃった」

俺を気にしていた二人とは裏腹に四人？ で楽しくじゃれあってたデイーちゃんたちがメロウが弁当をひっくり返してしまった。

『あんだだけ落ち着いて食べなさいって言ったでしようが…。  
タステ、あんたの余り分けたげなさい』

「うん、わかったよ」

ペンダントのタナトスさんがやれやれといった具合にため息をついた。

精霊のくせして保母さんみたい。

そしてタステはため口だ。

この子俺にはまだ敬語がほとんどでこっちは距離を感じているってのに。

「教室から布巾でも持ってくるよ」

「ならば私も参りますわ」

「ルリアまで来る必要もないよ。  
な、カナタ？」

『そうそう、またメロウがこぼさないように見張っててくれ』

「わかりましたわ」

二人で中庭から校舎に入った時、リンが口を開いた。

「校長先生、なにか御用ですか？」

『ばれてますよー』

水の膜が弾けるようにして目の前に校長が現れた。

そう、わざわざリンと二人で校舎に来たのは先程から校長が俺たちをずっと見続けていたからだ。

当初は俺しか気づいておらず、わざと気がつかないふりをしていた。誰だって愉快犯に自分から話しかけたくはないだろう。

…なかにはそういった危篤な方もいるだろうけど。

しかしリンが気づいてからはそういうわけにはいかなかった。

リンも校長のお茶目な性格を知っているけど、それ以前に魔術師として尊敬している部分も多いようだ。

「邪魔しちゃ悪いかなって（反省）」

『とりあえず校長室に向かえばいいんですか？』

どうせこのパターンだろ。

「違う。練習場に」

『……誰かと戦えと？』

「正解」

本気でそうとは思っていなかったのに！

校長とリンとともに練習場に足を運ぶとそこにはセオドア先生と四人の黒マント集団が立っていた。

左からサクツと見た目だけ。

二メートルを軽く超えるような浅黒い肌と髪の大剣を左右の腰と背中に装備した大男。

レイピアを佩いたセミロングの金髪的美……少年とも少女ともとれる中世的な若者。

緑の髪の幸薄そうな長剣と楯を持った青年。

そして紫色のショートカットお姉さん系美人。

『って朝の人』

「その節はお世話様でした」

「知り合いか？」

『今朝少し話した程度だよ。』

（もしかしてこの人達のうちの誰かと戦えと？）『

リンに言葉を返した後、わずかな希望を込めて校長に小声で尋ねてみる。

嘘だと言ってよ、校長。

「違う」

リンが安心したように息を吐いた。  
違うよ、リン。

ここは安心するところじゃない。

「一対四で、君たちには殺し合いをしてもらいます」

「な……！」

そうだと思った！。

校長先生その話知ってるんですか！？

ちなみに俺はまだ未成年だったのでアレは見ていません。

「……校長、物騒なことを言わないでください」

セオドア先生が青筋を浮かべながら校長の言葉を否定した。

「一対四で実践訓練だ、トキタ」

『あんまり変わんねーよ！』

俺の突っ込みが練習場に木霊した。  
ここって無駄に広いなー。

## 第19話 「仲がいいのが一番」(後書き)

なんといいますが、ありがとうございます。

今回は久しぶりの戦闘シーンだぜひゃっほう正直戦闘シーンなんて書きたくないというか書ける気が全くしないです。

彼方はどうなってしまうのやら(棒)

それでは、またのお越しをお待ちしております。

## 第20話 「等価庭園」(前書き)

何度か全体を書きなおした結果がこれでした。ご容赦ください。

## 第20話 「等価庭園」

「校長先生！」

「何？」

「私も戦います。だから私もカナタと同じ部隊に入れてください」

『何言ってるの！？』

「カナタは黙っていてくれ！」

『はい！』

居てもたつてもいられなくなった。

今この場はそんな時ではあるまい、と分かっているのに私は校長先生に頼んでいた。

「貴女はその理由があるの？」

無表情のまま校長先生は私に尋ねてくる。

「カナタの契約主として、私はカナタを独りで進ませない。  
私も置いて行かれたくはない」

私も動じないで思いのたけをぶつける。  
そうしなければカナタは行ってしまう。  
何処だか分からない何処かへ。  
そんな不安が胸中に広がっていた。

「そして、もうカナタを独りで戦わせない。  
だから――」

いくらカナタでも士官候補生相手に無傷で済むとは思えない。

「いいよ」

この時、少しだけ校長先生の表情が綻んだ気がした。  
懐かしい思い出を回顧するかのように。

失った何かを慈しむように。

後々考えてみれば気のせいだったのかもしれないが、今はそう見え  
た。

無表情なはずのこの人が笑ったように。

「……」

先生――セオドア先生はいつものようにため息をついている。  
やはりそうだったか、というふうに。

『校長!?!』

カナタは私のことを心配してくれているのだろうか。  
それとも足手まといと思っているのだろうか。

冷めていた私は生きる意味を見いだせていなかった。  
けれど、今は確かにある。

「“家族”と離れたくない」

「キミと離れたくない」

……ここまで言われて男が引けるだろうか、いや引けはしない。

『わかつ』

「どうしてボクたちはここまで来て、知らない人たちの恋愛を見せつけられているのでしょうか？」

「……空気を読め」

「あれ？もしかして聞こえてました？」

もしかしてもねえよ！

金髪美形（性別迷子）さんんん。

せっかく二重否定を使ってまでリンと共に戦う決意をしたっていうのに。

「い、いやっ、私はそんなつもりではっ」

リンもめちゃくちゃ慌ててるし。

分かりやす過ぎ。

とりあえず巨漢の男の人が見た目以上に常識人てのは分かった。

「すみませんでした。どうぞ続きを」

こういうのって、タイミング逃すとかかなり恥ずかしいのよね。

『戦っんならさつさと戦いましょう』

「そうです。私もお腹がすいてきました」

紫色の髪のお姉さんも同意してきた。

理由がおかしいけどいちいち突っ込んでいたらキリがないのでスル  
ーします。

「にしてもいくらなんでも一対四……じゃなくて二対四でも無理があるのでは？」

緑髪の青年がおずおずと尋ねる。

そりゃあそうだ。

いくらリンが一個師団並みの戦闘力があるからって言ったって。

……あれ？

十分じゃね？

「心配無用。戦いの舞台は私が創<sup>つく</sup>世<sup>よ</sup>から」

心配そうにしている青年とセオドア先生に向かって校長が言ったの  
けた。

『ここで「訓練」をするのでは？』

「お腹がすいたのでご飯を食べに行ってもよろしいですか？」

「……………頼むから空気を読んでくれ」

お姉さんのボケはあっちの集団に任せるとしよう。

『そういえば、あなたたちは誰なんですか？』

よくよく考えれば自己紹介もしていない。

この人たち、誰なんだ？

「もしかして今まで分からないままだったのか？」

『自己紹介してないし…』

「まあ、戦ってからで良いでしょう？それよりお腹」

「プリー黙って」

ついに迷子さんまでもが抑えに回りだした。

「ボク達はアスカ王立士官学校の士官候補生です。

今回例の「特殊部隊」とやらに編入することが決まりました……」  
昨日」

「昨日！？」

「それで顔合わせの意味を兼ねてこの街まで僕らは来た次第です…」  
…走って」

走って！？

「ボクの名前はアリス」エクスと申します」

『あどうもご丁寧に。』

俺は時田彼方って言います』

「私はリン＝ソラル。カナタの契約者だ」

流れてリンも挨拶をする。

「契約？ご結婚でもされているんですか？」

ボンッ！

→リンから煙が出た音。

『あはは、違います。』

精霊なんです、俺』

「は？」

変な奴を見るかのように見られている！

『細かいことはともかく！』

他の方の名前は？』

「（ぜ、ぜんぜん細かい問題ではないと思うぞ？）」

『（いちいち詳しい説明しても面倒だしいいでしょ）』

「（…私は構わないが）」

「俺はヨナだ」

巨漢の男がぼそりと呟く。

「自分はミフル」セシルールです」

緑の人もつられて挨拶してきた。

「お腹がすきました」

「——このどうしようもないのがプリート」ディ」ハルガです」

一気に自己紹介が済み、変な沈黙が流れた。

「…始める」

校長がそう言った途端に練習場の地面にややこしい模様が浮かび上がった。

無秩序に様々な記号が書いてあるように見えるその模様は深い深い青色だ。

深海を思わせるマナが模様から噴き出し、この練習場にいる全員を包み込む。

次第に視界が青に染まっていく。

そして。

「青」が唐突に裂け、俺たちは先ほどと寸分違わぬ練習場に立っていた。

「ミラーガーデン  
《等価庭園》」

「すごい…！」

「マナによる魂の完全複製か」

「リンがよくわかんないことを呟いてる。」

『……』

「聞いてもどうせ分からないので尋ねませんよ！」

「これで怪我は心配しないでいい」

「全員準備は良いか？」

『準備つつも俺たちなんも持ってませんよ？』

「校長」

「《水》のマナが俺とリンの手元に集まったのを視た直後、そのマナは物質に変化した。」

『なん…だと…？』

「俺の手にはいつもセオドア先生との訓練で使っている刃引きした鋼」

鉄製のロングソード。

リンの手には薙刀が。

俺らが武器を持ったことに反応して四人も武器を構えた。

紫髪は両手にナックルを。

巨漢は二つの剣を。

緑髪は盾と剣を。

迷子はレイピアを。

「ここは校長が創った結界の中だ。

この中での傷は結界の外には反映されない。  
存分に戦え」

セオドア先生が告げる。

「始め！」

剣戟が鳴る。

## 第20話 「等価庭園」(後書き)

ご覧いただき、ありがとうございます。

始まらなかったです、戦闘。

本当はもうちょいリン視点とか掛け合いとか校長の魔法の描写とかしたいんですが私の語彙が底をついてしまいこんな感じになってます。

前書きも言い訳臭いどころか言い訳だ¥(＾o＾)ノ

こんな言い訳野郎ですが、気が向いたら感想などいただけると嬉しいです。

またのお越しをお待ちしております(土下寝)

## 第21話 「異世界の異世界で」

セオドア先生の掛け声の直後、四人が動き出した。

俺の目の前にはアリスさんとヨナさんが。

リンには残りの二人が。

結局二対一って不公平じゃね？

ヨナさんが双剣を振りかぶっていた。

リンのほうをチラリと横目に見て、視線を戻した時にヨナさんが攻撃に移っていたのだ。

そりゃあ相対した相手が何処か別の所をみてたら攻撃しますね。明らか過ぎる隙だし。

とはいっても、その隙を作りだした俺には関係無いわけで。

『ちょ、いきなり！』

上段から襲いかかる双流を切り上げながら叫ぶ。

ギインッ！

力が拮抗して押し上げる俺と圧殺せんとするヨナさんとで視線が重なる。

「始めの、合図は、あつた、ろうが」

籠められた力がどんどん強くなってくる。

『そついやそつだったわー！』

「背中がお留守ですよ？」

ざわり、と後方から嫌な予感がした。

『っ！』

ヨナさんと斬り結んだ剣から力を抜き咄嗟にリンとは逆方向——  
右に転がった。

直後俺の立っていた空間、それもちょうど頭部辺りにレイピアの刺  
突が駆け抜けていた。

『殺す気かあ！？』

がむしゃらに叫びつつ下がって距離をとる。

「それはもう殺す気ですよ。

そうでもしなければヨナと初見で斬り結んだ相手に勝てると思うほ  
どボクは甘くないんです」

「……アリスよ、あと数ミリで俺に刺さるところだったぞ」

「「『……』」」

<sup>アリス</sup>  
仲間の攻撃によって眉間を貫きかけられたヨナさんの発言で場が凍  
りついた。

『え、えーと、そんな攻撃あたるかよ！

殺す気なんかじゃ生ぬるい！

死ぬ気でかかってこいやあ！』

「そ、その減らず口がいつまで続くか見ものですね！」

「……やれやれ」

ヨナさんって俺以上に苦労人ばいな、うん。

『と、その隙に攻撃』

両足にマナを纏わせて二人の間に踏み込む。

「む！」

「速い！」

二人の反応からするに瞬間移動にでも見えたのだろうか。  
だがしかし、これは俺の『必殺・精霊だっしゅ』である。

ん？『魔弾』に続いてこれも俺オリジナルの魔法になのかな。

『ちえいさー！』

某勇気のトライフォースに選ばれた緑色の勇者よろしく回転斬りで  
二人を襲う。

「があっ！」

「くうっ！」

『必殺・精霊だっしゅ』の効果もあってか想像していた以上に勢い  
がついた。

ヨナさんは咄嗟に双剣で受け止めたようだが練習場の壁まで吹き飛  
ばされた。

アリスさんはギリギリでレイピアを使って受け流したようだ。

そんなほっそい剣でよくやる。

「これで！」

振りきった俺を地面に張り付けるように「突」の雨が降り注ぐ。  
剣で受け、必死に避け続けるもアリスさんからマナの流れを感じる。  
そのマナが身動きをとれない俺の足元で形を変える。

『下からもかよっ！』

「ボクの魔法を！？」

魔弾を収束させることもなく全方向へと解き放つ。

その衝撃でアリスさんは空を舞った。

かくいう俺も自らの攻撃で吹っ飛ぶ。

『づああ！』

「ぐう……」

運よく吹き飛ばされたヨナさんがいたのと同じ方向に吹き飛ばされた。

そして壁とのクッションになってくれたようだ。

「き、貴様」

踏んだり蹴つたりのヨナさんが怒りの声を上げた。

……まずい、これはマジギレやで。

壁、じゃなくて壁との間にいるヨナさんを蹴っ飛ばして距離をとる。  
いいや、逃げた。

いつも静かな人のマジギレってやばいぜ。  
立ちあがったヨナさんが双剣を投げ捨て、背に備えた大剣を構えた。  
《火》のManaが形を成し、陽炎が滾る。

『こいつは——』

これは——絶対に受けたら駄目な攻撃だ！  
咄嗟にとりすぎてしまった距離をもう一度詰める。

「させません」

『アリスさん邪魔！』

吹き飛んだと思ったアリスさんが俺の動きを止める。

いつの間にか金色だった髪は白銀に染まり、今朝見た白いManaがアリスさんを覆っている。

その間にもヨナさんは腰を深く落とし、四肢<sup>しじ</sup>を踏むように足を開き肉厚の大剣を頭の後ろに構える。

腰をひねって遠心力を最大に生かせるような形だ。

「セルキオス派三剣流魔剣士ヨナキリアスⅡロゼスⅡアクセティア

——」

なんか名乗り始めた！

滾る《火》が大剣に移り、剣が割れた。  
展開したというべきか。

「——ファイア・アクセル<sup>レディ</sup>、  
《融鉄剣》、構え……」

やばいって！

あれ超必殺技か何かでしょ！？

『せいや！』

散弾状に拡散させた魔弾でアリスさんを今度こそ吹き飛ばす。

怪我とかしたらゴメン！

しかしもう遅かったようだ。

もう彼を止められるタイミングじゃない。

ならば！

俺もこの場でマナを練り剣にマナを送り込む。

真似ですがなにか？

キイイイイ——。

俺の剣が微細な振動を始めた。

『えーとなんだ！必殺——』

「ブラスト  
斬オ——」

『考える時間をくれえ——！』

赤い斬撃が飛ぶ。

それは圧倒的な破壊の色。

迎え撃つは鋼鉄の剣。

それが放つは消滅の音色。

二つの剣が触れ合う刹那、視界が光に包まれた。

薙刀を構えたリンの前にはプリートとセシルールとが立っていた。

「そんな大ぶりの武器でどうする気ですか？」

プリートはマントと同様の黒を基調とした拳のみを覆ったナックルダスターを両手につけたまま問いかける。

彼女としてはさっさとこんなことを終わらせて食事をとりたいのである。

だからこそその挑発。

「いやいや、そう常識に囚われていては足元をすくわれるぞ？」

微笑み返しながらリンも返す。

傍らでは自らの片割れとでも言える少年が戦闘に入った。

彼が負けるはずがないだろう、とリンは思いこれ以降そちらには全く気を向けていない。

「……いいですね。

美味しそうですよ、貴女」

「それは……全く嬉しくないな」

女二人の会話が繰り広げられるなか、セシルールは一人展開について行けずに困っていた。

○番でも曰くつきの人外といわれる三人組といきなりチームを組めと言われてまだ一週間もたっていない。

○番きつてのお荷物部隊にだ。

彼にプリートを、ましてやリンを理解するなど不可能である。

それよりもすぐ近くで行われている二対一の戦いに彼は目を奪われていた。

（すげえ、あの二人が本気をだしてないとはいえ…）

一六〇あるかどうかの身長少年が”三剣鬼”と”幽鬼”やりあっているのである。

（俺じゃああんなにはできないよな）

客観的に見れば、彼も実は人外三人とならぶにふさわしい力を持っているのだが、えてして人は自分の価値を正當に評価出来ないもの。それが少年なら余計に。

と、まあこのようにセシルールは考えに耽ってしまった。

今がどんな時か忘れて。

今が戦いの場だというのに、相手に意識を向けるのをやめてしまったのである。

「ファイアーランス  
《火槍》」

「え？」

気がついた時にはもう遅く、リンの放った《火》の槍が彼の胸を、

腹を、足を――。

貫いていた。

燃えるような、事実燃えていることもあり「燃える」痛みに絶叫を上げようとした時には更に飛来した火によって彼の意識は寸断されていた。

「一人脱落」

校長がぼそりと告げた時には、セシルールのからだは庭園（にち）から消えていた。

「庇わなくて良かったのか？」

「今を見切れと？」

無理を仰りますね」

「だろうな。

わざと見過ごしたなどと言われたらこちらが困ってしまう。  
……さて」

「やりますか」

セシルールからしたらかき消えた、としか形容しきれないスピードで彼女たちは動き出した。

「本当に美味しそう……食べてしまいたい」

「残念ながら私にそんな気はない」

「あら、経験してみないとわかりませんよ？」

喋りあいながらも二人は動きを止めい。

リンは重量にまかせて薙刀をふりまわしているのではなく、完全に勢いをコントロールしている。

そうして雨のような拳打を放つプリートから距離をとっている。

対してプリートも地面を滑るようにステップを踏み決してダメージを受けていない。

人一倍容姿が優れた彼女たちの殺陣は見る者が見れば舞っているように見えるだろう。

切り札どころかこれ以上互いに手札を切ることも無く、数を重ねていく。

「まどろっこしいな」

リンが多少面倒臭そうに呟く。

この現状で、二人は拮抗していた。

「同感です。貴女を食べてみたい気持ちもありますがお腹がすきました」

プリートも優雅に微笑みながら、拳を止めない。

「提案があるのだが？」

無論、それはリンも。

「一発勝負ですね」

「話が早い」

そう言つて二人は同時に壁際まで下がる。

「互いの最大級の攻撃魔法でやろつか」

「臨むところです」

そうこうして、俺たちの初対面は女性陣二人の放った破界魔法でめちゃめちゃになった。

詳しく言つと、あと少しで俺の新技とヨナさんの必殺技が触れ合う直前に決着がついたのだ。

リンが放った《日》の魔法とプリーさんが放った《夜》の魔法とがなんだかヤバイ感じに作用しあつて校長が創りだした庭園？が崩壊。その余波で俺たち三人も吹き飛ばされた。

「大丈夫ですか？二人とも」

「……体は別に異常はない。  
だが――」

「心が、ね。」

粉々に砕かれました」

魔法の余波でやられた俺とヨナさんだけでなく、リンに惨殺されたセシルさんと同様に女性に対する恐怖を埋め込まれました。

「あの、えっと、女性って怖いですね」

「…ああ」

『あははー、はい』

迫真。

真に迫った表情でセシルールさんの問いかけに答えた俺とヨナさんである。

一方、性別迷子ことアリスさんは涼しげな表情をしていた。

「そうですか？」

少々お転婆なくらい、男なら受け止めてあげてはどうですか？」

『いや、あんた何者？』

リンとプリーさんのほうも何があったのか分からないがいろいろとあったようだ。

「これから一緒に食事でもいかがですか？」

「……断固辞退させていただく」

プリーさんがリンにアタックをかけてるように見えるのは錯覚かな？

昼休みの終わりを告げる鐘の音が鳴り響いた。

『暇だなー』

「そう言うな、もう少しで着くさ。  
それに私と一緒にの馬車が不満なのか？」

『け、決してそういうわけじゃ』

「ふふふ、冗談だよ」

そう、演習が始まる。

「いやいやー、私たちもいるんだけどねー」

『こういう輩に何を言っても無駄よ。ティー』

……演習が始まります。

## 第21話 「異世界の異世界で」(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

プリーはそっちの気はないと思います。

言葉通りの美味しそうもアレですが。

なにはともあれ次回から演習始まりです。

…さつさとまとめられるような能力が私にあるのかしらん。

では、またのお越しをお待ちします。

## 第22話 「揺れる車窓から」

いざ、演習だ！

…とはいうものの、揺れる馬車の中というのは予想を超えて暇だ。これならもくもくとご飯粒をちねるなどといった圧倒的に無駄な作業をしていたほうが良いわ！。

ちねり米を一生で一度は食べてみたいと思う俺は異端だろうか。

そついや、この世界に来てから米を食べていない。ともかく米食いたいな。

『ふあ〜』

俺たちエクリプスの生徒は三日前の朝にスパイアを出発し、今朝士官学校と合流を果たした。

それからかなりの時間がながれている。

しかし向こうさんも当然馬車で移動しているためほとんど顔を見ていない。

ただ、一概に馬車と言っても十人そこらしか乗れない俺たちの馬車と違って士官学校の馬車はもつと定員が多いようだ。

アクション映画で軍人さんがトラックにひしめき合うように乗っているイメージらしい。

そもそも彼らは学生とは言え軍属なのだから当然かもしれない。

「暇そうだな？」

『うーん、せめて本でも読めたらいいのに』

上下左右にガタガタと揺れるため、小さな文字なんて読めたものではない。

漫画とかも無いし、地デジ化もまだだしね。

「あまり贅沢を言うものじゃない。そんな快適に過ごせるのは王族が貴族ぐらいだろう」

「つまりは世の中金つてわけだよー！」

『んなもともこない』

ティーちゃんはまだ学年的には演習に参加することはないはずだったが、リンと俺が参加すると聞いて急遽参加を決定したのだ。さすがに特殊部隊には入れなかったけど。

「そうだ、気になってたことがあった」

『へい？』

「カナタくんの女性の好み？」

「魔物についてだ」

『？』

どうして俺に聞くのだろう。

「リンちゃんが無視するうー…」

「ああもうつ、ティー。」

お前は気にならないのか？」

リンはティーちゃんに優しいなあ。

「んー？何がー？」

「カナタが魔物を知っていることだ」

「別にきにならないよー」

「ティーに聞いた私が馬鹿だったのか……！」

何はともあれ。

車内の話題は魔物について、になった。

『魔物ってスライムとかドラゴンとかじゃないの？』

あとリビングデッドとか？』

「ドラゴンが魔物？それにリビングデッドとはなんだ？」

ありや？

俺の発言に不思議な顔をしてる。

「もしかしてカナタはドラゴンと戦ったことがあるのか？」

『竜ならなんども狩ったことあるよー！』

「なん…だと…？」

異世界に来てまでこのリアクションを聞くことができるとは。

『と、』冗談はこれくらいにして。

俺の世界には俺の知る限りは現実に魔物なんていなかったよ。

ドラゴンとかリビングデッド……ゾンビならわかる？  
こつフィクションというのは空想の産物』

「……やはりカナタの持っている知識は間違っている」

『魔物について俺の考えが？』

「そうだ。

今までの話しから推測するにカナタの言う魔物は怪物と同意なのだろう。

だがこの世界の魔物の概念とは「魔を宿す物」だ」

『生き物じゃないってこと？』

「そうではない場合が多々あるということだ。意思を持つモノとも言えるか」

『……いまいちわかにゃい』

男のネコ真似って気持ち悪いよね！

「見たことがなければそんなものか。

マナを見れるカナタから奴らはどう見えるのかは分からないが一目でわかるだろう」

『わかるのかな？』

「分かるさ。カナタなら」

全幅の信頼つてのはちょっとだけ俺には重い、かな。

『ティーちゃんは魔物をみたことあるの?』

「……」

へんじがない。

『ティーちゃん?』

「ぐー」

ティーちゃんは説明の途中で眠っていたようだ。  
この寝息は本当に寝てるのか……?

「さて、そろそろ着くと思うぞ」

リンが外を見ながら言った。

『ついにか!見せて見せて!』

リン顔を出している窓に体を滑り込ませるとそこには様々なマナを放出する森と山々が見えた。

「か、ち、近すぎ……!」

『うつわぁー!』

日中だというのに光を放っているように見えるこの光景はとても幻想的だ。

俺がマナを観測<sup>み</sup>する時は視覚で感じ取っているわけじゃないけど、膨大な自然の奔流はとも幻想的に「見えた」。

様々な色のマナが空へと向かって伸びる様は逆天国の階段といったところか。

ともかくにも意味のある言葉がでない。

夜ならばどうみえるのだろうか。

「か、カナタあー」

「ふつうは男のヒトがどぎまぎするものなのになー」

『恋愛の形はそれぞれなのよ』

ティーちゃんたちがなにか喋っていたが全く耳に入らない。

興奮した俺のテンションは到着するまで約一時間続いた。

到着してからはみんなの準備は早かった。

リンは終始ぐったりしていたけど。

各自割り振られた部隊ごとに両学校本部の設営を済ませるまで二時間とかからなかった。

《土》と《水》の混合魔法でコンクリ造りのような建物が出来上がる様は圧巻だった。

『凄いな、まるで魔法だ』

「だから魔法だよ」

リンからツツコミをされるほど。

そして野営用のテントを張り終えた現在は部隊ごとのブリーフィングを行ったりしている。

「甲部隊は探索用の装備を装着した後、セオドア・クライハウス教員の元へ集合！十五分でだ！」

本部から《風》を利用した拡声魔法で怒号が飛ぶ。

「乙部隊も同様の装備で集合なさい。甲部隊よりも早く集まること」

演習の内容は以前校長と話したとおり、生徒の習熟だ。

現在は特にアス力は戦線を開いておらず、命懸けの経験を獲得するための場所が少ないため各地の士官学校ではこの演習と同様なものが開催されているんだそうだ。

ただし、魔導学校で参加してるのは俺たちだけ。

参加する生徒は両校の生徒が約半分ずつの混成部隊を組み、その指揮官として教員がつく。

部隊数は通常のもの（部隊名は甲、乙、丙、丁……と続く。全く覚えづらい（´Д｀））は十。

それに加えて俺とリンが所属することになる「特殊部隊」が一つの計十一。

ただし特殊部隊には指揮官が就くことがなく、生徒だけで独立行動をする。

『ティーちゃんも集合地点に行っちゃったし、俺たちはどこに行けばいいのかな？』

「俺たち二人で」！？か、カナタはどこでななな何をするつもりなんだっ！」

リンちゃんはこんらん中だ！

「久しぶり、カナタ」

声の主はミフルだった。

以前リンと戦った時とは付けていなかった両手両足のアクセサリーを付けている以外は黒いマントと軽そうな防具を付けているだけで違いはほとんど見えない。

『リンに瞬殺された薄幸緑髪騎士ミフル』セシルール、通称薄幸<sup>ハッコー</sup>じゃないか』

「誰に説明してんだよ！っ！か通称でなんだ！」

女性に嫌な（恐ろしい）経験があるということでもミフル（以下ハッコー）とヨナとはだいぶ仲良くなった。

同じ傷を持つ者同士、傷をなめあつてるとか言うな！。

「久しぶりだな。たった半月会わなかったただけだというのに腕を上げたようだな」

「ははは…あんな負け方許さん、ってかなり絞られましたから」

俺には違いがぜんっぜんわからん。

どうみてもへたれっぽい。

今だって恐怖<sup>トラウマ</sup>の元凶から話し掛けられて脂汗だらだらだし。

「俺たちは出発は明日だから一応確認だけするみたいだよ」

『じゃあハッコーに着いて行けばいいん？』

「なに？それで通す気ですか？」

「行こうか、セシルールさん」

「了解しましたっ」

『行こうか、ハッコー』

「名前で読んでください！？」

## 第22話 「揺れる車窓から」(後書き)

どうも十日ぶりのお久しぶりです。

ここまで来たらさっさと演習に入れよ!といった具合に、今回もあまり進んでないですね…。

ミフルは彼方以上にツッコミ(ヘタれ)として活躍してくれるかもしれません。

ではまたのお越しをお待ちしております。それでは。

第23話 「夜天の瀑布を背景に」 (前書き)

なんだこのタイトル…

## 第23話 「夜天の瀑布を背景に」

俺たちの天幕の中にはミフル以外の三人——アリスさん、プリーさん、ヨナがいた。

『どーも』

気づいていない風なのでこちらから声をかけると三者三様の返事が返ってきた。

「軽く明日からの指針について話しておくか」

ヨナは入って来た俺とリンに席に座るように進めた後、ゆっくりと語りだした。

『リーダーはヨナ？』

俺にしるリンにしる演習を経験したことが無いのでそれが自然だろう。

「ボクはそんな器ではありませんし、プリーに責任ある立場が務まりませんよ」

冗談めかしてアリスさんが答えた。

『つまりは貧乏くじひいたんだ』

「……」

渋面を作り、ヨナは無言のまま。

沈黙が肯定とはこのことか。

「…では、この部隊の計画を伝える」

憐憫を込めた視線を振り払うようにヨナが沈黙を破った。

「最後の部隊が帰るのが二週間後だが、俺らは明日から十日かけて探索を行う。

一般部隊は横に広がるようにして浅い部分に行くことになるが、俺たちは極力戦闘を避けて森の中心を目指す。

他が一週間に対し俺たちが三日長く計画されているのはこのためだ」

地図を広げ、指し示すように説明するヨナはそこまで語ると周りの反応を窺うようにしゃべるのをやめた。

「どうしました？

説明を続けて下さい」

アリスさんが話しかけるとヨナは仕切り直すように深呼吸すると語りに戻った。

なんだかフラグ臭いんだが。

俺の気のせい、だろう。

「すまん。

そして俺たちが探索するのは……500年前に封じられた魔王城だ」

……いきなりファンタジーみたいになってきた。

剣と魔法の世界だから今だって十二分にファンタジーだけでも。

「魔王城？」

あれは 作り話ではなかったのか？」

リンが不思議そうに言うと言ナはなんとも言えない表情を作った。

「俺もそう思っていたんだが、一応これが上からの指示だ」

一人微妙な顔をする俺を尻目に話は進んでいく。

「教官ですか？」

「いいや、どちらもだ」

どちらも、ってことは校長もかんでるわけか。  
それよりも。

『魔王とかこの世界にいたん？』

自分一人だけ話題に乗り遅れたくない！

「そうか…カナタは知らなかったか。  
それも当然だ。」

魔王城にかかわる伝説はこの世界で有名なんだな。

……カナタがいることがそこまで私に馴染んでいた、のか」

「ふふふ、素敵ですね。あなたたちは」

何が面白かったのかアリスさんはそう言って笑い、魔王城と――  
勇者と魔王の伝説を語りだした。

曰く、500年前は大陸上には小国が乱立し大陸の覇を競いあつて

いた。

当時は大陸上至る所で鬭争が巻き起っており、左右を見渡せば十の戦争が起こっている、と形容されるほどだった。

大きな対立構造があったわけでもなく、ヒトとヒトで滅ぼしあいが続けていた。

細々と、延々と。

長く、永く。

そんななか、流星の如く現れたのが一人の”王”だった。

彼もしくは彼女はヒトとは違う怪物を操り近隣諸国を蹂躪していた。

まるで、戦いに狂っているかのように。

そしていつしか怪物は魔物と呼ばれるようになり、その奸雄はいつしか魔王と呼ばれるようになった。

魔物はヒトだけを襲い、恐怖の象徴となり、互いに争いあっていた人々が気づいた時にはもうヒトは生存競争において崖っぷちにたたされていたのだ。

軍が魔王に攻め入るにしても、憎しみに捕われた各国は手を組むことをせずに小規模戦を繰り返し敗北を重ねるだけ。

だが、全ての国の王や国民が絶望を嘆いた時、立ち上がる若者たちがいた。

彼らは皆、違う国の出身でありながら国家間の憎しみに捕われることなく、協力し遂には魔王を封印するに至ったという。

そして彼らは人々を救い、勇者とよばれるようになった。

しかしそれ以降にも、この世には魔王の封印より零れでたマナから魔物が生まれるようになった。

「簡単に言うところの話ですね。そして物語の最後は

「魔王はいずれ復活するだろう。しかしその時にはまた勇者が現れ戦いを終わりに導くだろう」

となってます」

『んで、その魔王が封印されているのが魔王城だと』

なんつーか、ありきたりな勇者伝説やなー。  
嫌いじゃないけどね。

「そういうわけになりますね」

「自分たちはそのためにあの森に？……はあ」

なんてこった、ハッ／＼とため息をついたミフルとは対照的にアリスさんは涼しい表情のままだ。

「……まあ概要はこんなところだ。

予想になるが、魔王城発見の力ギはトキタだ」

『俺？』

いきなりヨナが俺に話題を振ってきた。  
授業中に急に当てられたみたいな気分。

「お前の能力だ」

能力とかいてチカラと読むんですねわかります。

……中二病はさておき、俺に出来ることか。

「カナタはマナを見れるだろう」

『あ、なるほど』

精霊になつて？はや一月。

この感覚に慣れきっており、気がつかなかった。

「それでは明日の出発は正午だ」

納得した俺を確認するとヨナは話はこれまでだ、と言わんばかりに切り上げた。

誰も異論はなくヨナの言葉に全員　が頷いた。

……ちなみに、最初の挨拶以降一度も声を発しなかったプリーさんは終始何かを食べていた。

最初はパンだったが次見た時にはパエリヤっぽいもの。

その次見た時は麺類。

気がつくとは違う物を食べていた。

俺含め全員が突っ込みたくなるのをずっと堪えていた。

なぜならプリーさんに突っ込んだって意味がないことは分かっていたから。

彼女はかなりマイペースなので。

晩、食事は部隊毎に用意することになっている。

教師たちはほとんど介入することは無く、食事と一緒に摂ることはない。

なかには例外的に一緒に食べる人もいる。

セオドア先生とかそうらしい。

俺たちの場合はとても意外な人が食事作成の立候補をした。

『本当にプリーさんが作ってくれるの？』

「ええ、食事には少々こだわりがありましたね」

ほんわかと微笑みながらプリーさんが袖を捲った。

「食料は足りるのか？」

リンもプリーさんの料理スキルに半信半疑なようだ。俺もリンもプリーさんは食べる専門だと思っていた。

「では、勝手に厨房に入って来ないでくださいね」

話はそれまでと言わんばかりにプリーさんは意気揚々と歩いて行った。

「一時間ほどかかると思いますので辺りを見てまわったらいかがですか？」

置き去りにされた俺とリンにアリスさんが声をかけてきた。

「そうだな。少し歩いてくる、行こう」

『うい。じゃ、晩御飯までには戻るから』

リンと並んで天幕を出ると辺りは月の光で照らされていた。

「どこに行こうか？」

『んー』

リンの言葉を受け辺りを見回してみる。

……と、俺の視線はある方向に釘付けになった。リンに釘付けになったワケではないよ？

『…………あ』

「どうした？」

「どうした？」

私の精霊<sup>かぞく</sup>が急に間の抜けた声を出した。

普段から抜けているところのあるそいつだがいつもとは違う雰囲気だ。

いや、だからといってそこが欠点ではなく可愛らしいところだから無くなってしまうのは嫌だが。

……何はともあれ。

「だからどうしたんだ？」

質問を重ねても答えは返って来ない。

仕方がないのでその視線を追ってみても先にあるのは月に照らされた木々だけ。

…まさか森から何かが来るのか？

探るために魔法を使おうにも私の魔法は攻撃専門のものばかりだ。それに見張りに行っている仲間もいる。

何か問題があるとは思えない。

試してみるか？

《一体化》とやらを。

『つと、ごめんね』

あまりにマナが綺麗で言葉がでなかった。

昼に観ていた風景だけど今観ているモノは格別だった。

昼は太陽の光もあり、青空との対比としても綺麗だったが、今はそれを上回る。

端的に、表面上だけを言うならばこの風景は「夜空に向かい、上る光の瀑布」だ。

色の違う光の滝が空へと向かっている。

ああ、この前リンと見た夜景だつて忘れられないけど。だけどこの幻想だつてきつと忘れられない。

「やれやれ、楽しそうだからいいさ」

『やっぱり、リンにはこの森がただの森に見える？』

「まあね。大きなマナの存在ぐらいは感じ取れることは出来るが」

『……………』

「どうした？また黙って」

『ちよつとこつち来て』

「へ？」

リンの手を取って人気のない方向へと向かった。

生徒たちからある程度離れた所で歩くのをやめた。

ここなら森から流れ出るマナの奔流もしっかりと見えていい感じだ。

『ここなら誰にもばれないな、うん』

「い、いきなりどうした？」

『リンクが出来てもうある程度経ったし、そろそろ次の段階に進んでいいんじゃないかな。俺たち』

「つ、次の段階っ？」

『そ。校長も言ってたよ。俺たちは遅すぎだ、って』

「なにっ？ もももうみんなそうなのか？」

『校長に聞いた限りではだけどね』

「……そうか。分かった、私も覚悟を決めよう」

『んじゃ、始めようか！』

「え？ そ、外で……か？」

『なんか問題ある？』

「いや、カナタが良いなら……」

『そんなに顔赤くして緊張しすぎだって』

「だが、やっぱり……」

『うつん、やるよ、《シンクロ感覚共有》！』

## 第23話 「夜天の瀑布を背景に」（後書き）

ご覧下さっている方、お気に入りして下さいる方、皆々様こんにちは。

前回に続き大きな話の進行はあまりありませんでした。

ですが少しずつですがこれの中央？核心？に近づきますので、たぶん。

誰かの発言を明後日の方向に誤解してわらわらする人が好きです。最後あたりはリンのそんな様を書きたかったんですが。

またいらして下さいますよう。それでは。

## 第24話 「瞬間、光重ねて」 (前書き)

このタイトルにデジャビュを感じたそこの貴方。それは気のせいです。ええ、きっと。

## 第24話 「瞬間、光重ねて」

彼女は思索に耽る。

後悔に苦しみながら。

どうにか出来なかったのか？

幾度となく繰り返した自分への問いかけ。

今は動けないこの義体で、五百年前のあの日々を懐古する。

ちようど今ぐらいだったろうか、彼らが一步を踏み出したのは。  
踏み外してしまったのは。

毎晩、彼を助ける方法を考える。

答えはまだ出ていない。

「私も初めてだから……って《シンクロ感覚共有》！？」

リンが立ち止まっていたかのようにずっとこけた。  
まるでお昼にある新喜劇みたいな感じに。

『リン？どうしたん？』

リンはそのまま立ちあがることも無く倒れたままぶつぶつと何かを  
言っている。

「恥ず……い……勘違……というのか……」

『もしもーし、聞こえますかー』

異様な雰囲気のリンに対して知らずと敬語になってしまつ。

誰だつて知り合いがいきなり地面に突つ伏したまま独り言を始めた  
ら怖いだろう。

このままブリッジして走りまわつたら俺はちびる自信がある。  
精霊はトイレしないけど。

「これ………で痴………は………か」

ともかく、触らぬ美少女に祟りなし。

ほつとくとしよう。

べ、別に怖いってわけじゃないんだゾ？

数分後にリンはようやく落ち着きを取り戻した。

立ちあがると何事も無かったかのような表情で語りだした。

無かったことにするつもりだな、この子。

「《感覚共有》か。

言われてみればそんなこと考えもしなかった」

うむうむ、と顎にてを当てながら真剣にうなづくリンの顔には突っ  
伏していたときについた草がいくつか付いておりなんとなく締まら  
ない。

『顔にいろいろついてるよ』

「!？」

俺が指摘すると弾丸もかくや、というスピードで草を払った。  
正直まだ付いているけどこれ以上言うのも酷だろう。

『とまあ、俺にしろタナトスさんにしろリンに近しい精霊はみんな  
そんなことする必要無かったしね』

話を戻そう。

あ、こつからは校長の受け売りなんで俺はおまり理解してないので  
数行読み飛ばしてもらっても結構。

俺の言葉ではないので全く傷つかないよ！

そもそも《感覚共有》とは字の如く感覚を共有する魔法である。

間者と視覚を共有して遠くから偵察を試みたりする際に、と何百年  
も前に発明された魔法だ。

両者の合意のもとでなければ繋がることが出来ないという欠点があるもののこれはかなり有効だったらしく幾つかの国が消えていったらしい。

相手の全戦力が分かっているれば情報は戦争への抑止力どころか起爆剤となったのだろう。

勝つ戦いは誰だって好きだろうから。

しかしこれが作られてから数年でほとんどの国がこれに対抗する術を生み出していたため本来の用途では使われなくなった。

本来の用途では使われなくなったこの魔法であるが、これに目を付けた人々がいた。

それが精霊と召喚者だ。

精霊は異世界の存在であるため、彼らの中にはここでいう所の目が

ないものも多くいた。

そんな精霊たちに召喚者と感覚を——ここでは例として視覚——を共有させたのだ。

同じものを見て、触れば誰だって何だって近づける。

そういったわけで《感覚共有》は人々に受け入れられ今日でも使われているのである。

ちなみに《感覚共有》の一步先を行く魔法には《一体化》というものがあらしいが、大禁術となっている。

つまるところ《感覚共有》とは感覚を共有出来る魔法ってこと。

おわかりいただけただろうか、俺の説明下手を。

え？そんな歴史とか説明する必要あったのかって？

蛇足だよ、言わせんな恥ずかしい。

なにはともあれ。

「それにしても、わざわざ何を共有するんだ？

私もカナタも共有すべき感覚などないだろう？」

『マナをリンに見せてあげたくてさ』

リンにもこの森の風景を見せてあげたいと思ったのだ。

「そうか、それなら戦闘にも役立つな。

しかしカナタは目で見ているのではないと以前言っていたではないか？」

うむ。

精霊の心、召喚者知らず。

リンはひとえに俺が戦闘のために提案したと思っているようだ。

『それは大丈夫。』

テレビのチャンネルを合わせるみたいな感じで試してたら出来たよ。今は目で観てるよ。』

「テレビノチャンネル？なんだそれは」

うん、わかるわきゃねーよなー。

『気にしないでいいよー』

「ふむ、やはりカナタはすごいな。では始めよう」

何をすごいと思ってくれたんだか。と、リンの瞳を覆うようにマナで描かれた幾何学模様の魔法陣が浮かぶ。

ちなみに、人間側が精霊に合わせる場合はそれに対応した機能を一時的に封じる必要がある。

校長曰く人では精霊の感じ取れる世界の情報と自分で感じ取ったものを同時に処理できないとか言っていた。

実際そうなのかわからないが、校長がわざわざ言っていたのだから問題があるのだろう。

輝く《日》の魔法陣が形を成した直後にリンは視力を失ったようだ。

「これは……」

『なんか問題あった？』

「いいや、ただ……」

『?』

「なんでもない、さあ」

本来あるものを失うということはとても恐ろしいことなのかもしれない。

目を閉じたリンのほほ笑みはひどく弱い。

リンにあんまり長くこの怖さを感じさせるのも忍びないしさと進めよう。

ちなみにおどおどしてるリンも可愛い。  
小動物的な。

『じゃあいくよ?』

「ああ」

リンの正面に立ち、両手を絡める。  
その瞬間、リンの体がびくりと震えた。

『……』

こつん、と額を合わせる。

互いの吐息を感じれるぐらいの距離。

リンにあわせて俺も瞳を閉じる。

「『《シンクロ感覚共有》』」

一瞬、マナが流れるのを感じたが俺の体に変化は何も訪れない。

『これでいいのかな？  
離れるよ』

「ああ」

少々以上に惜しいがリンから離れる。

この設営所には簡易浴室もあるらしくリンからはいい匂いがした。

くっ、静まれ……！

俺の中の狼よ……！！

「そんなに見ないでくれ……」

『はい！？』

言われてリンの顔をじっと見つめていたことに気がついた。

目を閉じたリンの顔にはうつすらと朱がかかっている。

……お風呂をのぞきに行ったら実はばれてました、的な恥ずかしさだよ！

あわてて目をつぶる。

今は視覚を共有しているから俺が見ているものをリンが見ているんだった。

とりあえず深呼吸。

『ひっひっふーひっひっふー』

「どうしたんだ？」

焦りすぎてラマーズ法してたぜ！

『…ふう』

とりあえず落ち着いた。

別に賢者になつたわけではない。

さて、リンに森を見せてあげようか。

『これがキミに見せたかった幻想ふうけいだよ』

そういつて閉じた目を開ける。

「！」

リンが息をのむのが分かった。

それからちょうど一時間後、二人で天幕に戻った。

「あらあら、おかえりなさい。

ちょうど準備もできたところですよ」

『ただいま…ってこれは』

「すごいな」

そこにはテーブル狭しと並べられた料理が圧倒的な存在感を放っていた。

焼きたてらしくバターの香りがするパン。

甘辛い香りのソースがたっぷりとかかった肉料理。

溶いた卵が入ったさっぱりめつぽいスープ。

色とりどりの新鮮そうな野菜がこんもりと積まれたサラダ。

エトセトラエトセトラ。

果ては北京ダックつぽいものも、ってか北京ダックそのもの。

ここはどこかのれすとらんですか？

『これだけの材料どうしたんですか？』

「乙女の秘密です」

うむ、プリ―さんに突っ込むことはしまい。

「カナタ座れば？」

『うん』

当然ミフルも突っ込みをわざわざすることは無かった。

「それにしてもお二人とも体にたくさん葉がついてますね？」

アリスさんが面白いものを見つけた、と言わんばかりに聞いてきた。  
嫌な予感がする。

「…………鍛錬でもしてきたのか？」

ま、別に隠すことでもないか。

『ちが』

「ああそうつ！鍛錬をしてきたっ！」

リン！？

「へえ、武具も身に付けずにですか？」

「え、と、そうだ！体術の訓練を」

「“夜”に“体”術の“鍛錬”を“男女”で、ですか」

アリスさん強調するところおかしくないですか！？

夜。

体。

鍛錬。

男女。

ぼんっ！

リンが煙を吹いた。

「…からかうのもそれぐらいにしておけよ」

ヨナさんがそう助け舟を出してくれるまでアリスさんによるリンいじりは続いた。

ちなみに料理の感想はというとんでもなく美味かった。

プリーさんに料理人になることを勧めてみたところ彼女は満足げに笑っていた。

桁違いのスピードで食べ物を処理しながらだったが、  
こんな修学旅行のような夜は更けていった。

## 第24話 「瞬間、光重ねて」（後書き）

毎度になりますが、ご覧いただきありがとうございます。

真ん中ぐらいで彼方がトイレしないとか呟いてますが、マジです。そんなに取上げることも無かったのでスルーしてきました。

彼方とリンがあの後何をして一時間過ごしたのかは現時点ではご想像にお任せします。

だらだらと進んでしまっていますが、グダグダにならないよう気をつけていきたいと思います。

ではでは、またのお越しをお待ちしております。

## 第25話 「作戦開始」

朝、森に入ってから陣形を話し合った後、俺たちはそれぞれ武器や防具を装備して集まった。

士官学校ゼンギョウの四人は先日と同様にマントをはおっている。

というか、装備は先日とほとんど変わらない。

あの時の装備が正式な武装なのだろうか。

なんにせよ堂々とマントとか俺のゲーム脳を刺激する格好だ。

冒険者ってかんで格好いいと思う……よ？

それぞれのキャラも濃いし。

ヨナは頼りになる前衛兼壁で苦労性、怒ると怖い。

アリスさんはいろいろと不詳な美形だ。

具体的にどこが不詳なのかという性別とか性別とか後性別も。

聞くタイミングを逃してしまい今更きけるはずもない。

フリーさんは——「食」で十分だろう。

ミフルに至っては……ってミフルの特徴ってあったかしらん。

よそ見してて瞬殺された一般人モブ？

「なんか失礼な目線を感じる……」

『気のせいだと思うよ？』

えーと……ハッコー？』

「そのネタまだ引っ張ってるのっ？」

『おや？ つい昨日のことじゃないか。』

まだ、っていうほどじゃないと思うけど』

「ああいうのは一発だから良いんだよ！

というより一発も当たってないから！」

『まあ、俺が楽しいし』

はい完全論破……出来てないのは秘密だよ。

「なん……だと……？」

リアルで「なん……だと……？」とか初めて聞いたワードン引きだわー。

この会話自体がちょっとしたおふざけだけでも。

うん、前言撤回。

『ミフルは突っ込み兼いじられ役だ』

「かってに納得するなよ！」

『とまあ、そんなことはどうでも良くて。

アリスさんはこの前の武器はレイピアどうしたんですか？』

「どうでもいいんかいっ」

ミフルと話しながら四人の格好を見ているうちに違和感を感じた。

それはアリスさんが武器を何も持っていなかったということ。

もう今から出発だというのに忘れ物というのも考えられないし、マントの中に隠すにはレイピアは大きすぎる。

てか隠す理由もない。

「ボクのことになりますか？」

からかうようにアリスさんは俺に微笑みかけてくる。  
この人が男だったらどうしよう。  
なんだか今ときめいちゃった気がする。

『というよりその格好が』

「貴方はこういう格好が好みで？」

ちいつ、会話が成立しないだと！

「……あまりからかってやるな」

OH！ ヨナさんったらナイスガイ！

「ふふつ、面白いですねキミは」

アリスさんは愉快そうに笑ったまま。  
また顔に考えがでたのだろうか。  
この癖なおしたいな！

「ボクのことはお気になさらず。  
それに……」

それに？

「しつこい男は嫌われますよ」 ↑ ういんく ミ

ドキツとしちゃったぞ。

性別不明の相手に、ってか年齢も分からん相手にワタクシ<sup>どき</sup>士器<sup>むね</sup>が胸<sup>むね</sup>に——。

「か・な・た？」

アリスさんの若干挑発的な（あくまで個人的見解デス）に悶々としていた俺に声がかけられた。

決して大声ではないもののその声は俺の脳に氷水をぶっかけたかのように、深く響いた。

声の主は俺のよくしっている女。<sup>ヒト</sup>

ここで唯一家族と呼べる存在。

——背後で魔法が形成される。

良く知った声だというのに、その声音は全く聞いたことのないものだ。

ヤバイ、背中 of 冷や汗がやばい。

怖くて振りがえれない。

俺の肩に手がおかれた。

——まるで獲物を逃がさんとする罠のように。

肩に置かれた手は万力を上回る強さで俺をきつと逃がさないだろう。最期の時はもう近い。

せめて居るかどうかもわからない神に祈って……。

「何を——」

——告死の鐘が鳴る。

「——デレデレしているっ！」

『アッ——！』

灼熱が俺を焼いた。

決してそれ以外の悲鳴ではない、って熱い！  
いやまじで熱い——！

「……締まらん」

「良いじゃないですか、面白いですし」

「それ後半が本音ですよ」

「そういうセシルさんも楽しそうですね」

「もぐもぐ（プリ——さんが微笑みながら大きめの肉を上品に食べている音）」

「ははは、否定はしませんよ」

君たち助けるよ！

ちょ、やだ、なんかマズイ臭いがしてきた——！  
こんがり上手に焼けてきた——！

何故か怒り狂ったリンを沈めるためにそれから十分ほどかった。  
その間四人はこつちを眺めているだけだった……。  
覚えてろー！

「だ、大丈夫か？」

リンは冷静になるとあたふたして俺の心配をしてきた。

『う、うん大丈夫だよ！』

肩の服が焼けて、結局着替える羽目になったけれど問題ないよ！  
……ともかく、リンがなぜ怒ったのかは分からないけど、もう気に  
しないようにしよう。

「本当に大丈夫か？」

別に心配してくれるリンが可愛いなーとか思ったからではない。  
あくまで、演習をスムーズに進めるためだ。  
決して他意はない。

『それじゃ出発しよっか』

「ああ」

わざとらしくなってしまったが俺の話題転換にリンは乗ってくれた  
ようだ。

ひと段落ついたのを見計らってかヨナさんがずっと俺たちの前にたつ。

「……では、任務を始める。  
目的は「魔王城」の発見。  
では往くぞ……！」

「「「「「了解」」」」」

珍しく気合いの入ったヨナの声に、プリーさんまでも真剣に答えた。

—— 作戦開始 ——

「では前線まで飛ぶ。準備はいいか？」

「りよ、了解！」

ヨナの質問にミフルが答えた。

『ミフルが何かするの？』

「……さっき話しただろう。」

俺たちの探索範囲は現在、通常部隊が戦闘を行っている最前線からだ。

しかしそこまで歩いて行つては半日ほどかかる。  
前線まで全員を連れていくことがミフルの最初の仕事だ」

どうやって前線に行くのかも聞き逃してしまつてたみたいだ。  
失敗失敗……じゃなくて真剣に反省しなきゃ。

『連れていく、つてミフルは転移の魔法でも使えるの？』

たしか転移魔法は《光》か《闇》の二つの属性にしか無い、と聞いた気がするけど。

「いや、俺は《地》の属性持ち、クラッド・ユーザー「土塊使い」だ」

緊張しているのか俺を見ずにミフルが答えた。

土塊使いつてのはゴーレムを使役する《地》の属性持ちを指す言葉だっけ。

「カナタ、今から彼はミフル魔法を使うのだろう。  
邪魔をしない方がいい」

リンの言つてることももつともだ。  
皆とミフルから離れた。

俺らをを傍目にみた後、ミフルは地面に膝をついた。  
何すんだ？

大地に手を触れ詩を詠む。

「《大地に眠りし黒壇の西よとり》」

地面にふれた右手を中心にマナで編まれた設計図が描かれた。  
大地に描かれたソレは大きな鳥に見える。

「《仮初の器を駆<sup>か</sup>れ》」

平面だった絵は一瞬で立体的に編みなおされ、十メートルほどの鳥の立体図になった。

「《天を奔れ此処に在れ》——」

短い詩の終わりとともに立体<sup>イメージ</sup>図は現実になる。

「——  
《土塊<sup>ゴレム</sup>・黒金鷄<sup>ヤタガラス</sup>》！」

目の前には土でできた三本脚も巨大なカラスが立っていた。  
つて「カラスが立っていた」！？

あ、ありのままに起こったことを言っぜ。

急にミフルが詠唱始めたからアクションも取れずに呆けていたら  
巨大な鳥が目の前に立っていた。

中二的な妄想なんかじゃ決してねえ、ミフルの詠唱は中二どころじ  
やなくて……。

『ななな、なんだよこれえー！？』

驚きが口をついて出てしまったあ！

「ルオオオーーーーン！」

大声を出した俺にそのでっかい鳥が俺を見て鳴いた。

「……」

『……?』

そのままなんとなく俺と鳥は互いに見つめあう。  
片方だけ残った赤い瞳はまるで宝石のようだ。  
こいつは……もしかして俺に何か伝えようとしている?

「じゃ、みなさん行きましょうか」

『って空気読んでくれよ！  
今俺とこの鳥が見つめあってたじゃん?』

「カナタ、ゴーレムと見つめあうとは意味が分からないぞ」

は?

リンは何を言ってるんだ?

「生きてる見たいってのは「土塊使い」としては最高の誉め言葉だよ」

ミフルもだ。

今この鳥の赤い目を……。

『どゆこと……?』

鳥の目は濁った白色だった。

さっきのは気のせいだったとでもいうのだろうか。  
あの悲しい赤が。

「カナタは本気で言っているのか？  
命がないはずのゴーレムの瞳を見たというのか？」

『……ごめんリン、気のせいだったかも！  
さ、皆行こうぜっ！』

「むう」

リンには後で詳しく話そう。  
とるあえず今は前線に行くことが優先かにゃー。

「……乗ってもいいか？」

「皆さん、乗ってください」

質問したヨナにミフルが答えると、鳥が片方の羽を使って背に乗れ  
と言わんばかりに道を作った。

さてと、細かいことは気にせずに空の旅に洒落こむとしよう。

## 第25話 「作戦開始」(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

やっとやっと彼方達の演習が始まりました。  
ここからは戦闘がある……かもです。

詠唱いたーい。

更新が遅くなっておりますが、また来て下さることを祈って。

## 第26話 「私の運命の人」

ゴ<sup>ヤタガラス</sup>ーレムは背に皆が乗ると大きな翼を広げた。

そのまま両翼を振るうことなくゴ<sup>ヤタガラス</sup>ーレムは静止した。

い、一体今から何が起きるんでしょうか？

「飛びます」

ミフルが呟くとともにゴ<sup>ヤタガラス</sup>ーレムの翼微下から大量のマナが噴き出し、巨体を浮かび上がらせた。

まるでミサイルの発射のような勢いで放出されるマナに土が舞い上がる。

翼と地面を平行に保ったまま森の木々の高さまで舞い上がると目的地へと動き出した。

翼は全く動かさず最初はゆっくりと、次第に加速していく。

高さは森自体から噴き出しているマナを利用していろいろだ。

「安定しました。

とりあえずはゆっくりしてください」

ミフルに続いて皆も緊張状態を解いた。

遠くから見てとても幻想的だったマナの奔流は間近で見るとこれまた違った綺麗さだった。

極太の色彩の巨木が乱立する森を抜けているようで結局のところ森を抜けているのとあまり変わらない。

昨日感激した風景も一晩とちよつと見ていたお陰でかさほど心が動かされる感じもなくなった。

綺麗は綺麗なだけどき。

人は慣れる生き物だからね。

「何か考えているのか？」

リンは心配そうに問いかけてきた。

ちなみにこのゴーレムの背中は小型の軽トラ並みの広さがある。加えて風避けの壁じみたものもあるのでとても過ごしやすい。そのお陰で風景はあんまり楽しめていない。

それでも今言ったとおり、マナを感じ取ることは出来るのだが。

『え？俺なんか変な顔してた？』

「変と言われれば変というか、得意げというか」

無意識のうちにドヤ顔をかましていたようだ。

人は慣れる生き物だからね（ドヤア）。

とても恥ずかしい！

なんだか一人でここから命綱なしで眼下の森へバンジーでもかましたい。

くくだからね（ドヤア）、とかもつとラスボスっぽい奴が言うべきではないだろうか？

偏見だろうか？

いいや、落ち着くんだ俺。

このまま俺のラスボス論を悶々と考えてはいずれ他のメンバーに俺が地の文に自然とドヤ顔モロログをしていたのがばれてしまう！

話題を変えねばっ。

『あ、あのさ他の隊の人たちはどうしてわざわざ地面に行くの?』

リンに訪ねる。

無理やりの話題転換ではあるが気になっていたのは事実である。

「彼らと私たちは目的が違うからな。

私たちはの目的は分かっているだろう?」

『いやいや、だからこそなんだけど。

前線に至るまでに魔王城への入り口があったらどうすんのかなーって』

「それは大丈夫だそうだ。

入口——というより結界の綻びだな。

前線までの範囲は他の隊とは別のに先生たちが調べてくれているらしい」

『……だったらわざわざ俺らが捜す必要ないんじゃないかね。

苦労を買ってるようなマネしたくないんだけど』

演習って命の危険があるんだよね?

リンが怪我でもしたらどうすんだ!、という言葉は胸にしまっておくべきかな?(ド)

あ、危なかった……またドや顔するところだった。

「いいや、先生がたは裏方からサポートもしなければならぬらしい」

『結局人が足りないってことかあ』

「がんばろうじゃないか。

私たちは特殊部隊れいがいに選ばれたんだ。

つまりは私たちが学校最高のコンビということだろう?。」

冗談めかしてリンは笑う。

どうしてそこまで朗らかに微笑むんだろう。

そんな笑顔を見たら俺が感じた疑問なんてどうでも良くなってしまう。

『いやいや学園最高どころか世界最高じゃん!』

「……それは言いすぎだと思う」

『そこで否定!?!』

持ち上げた後に落とすのやめて!

「ボクもそう思います」

『アリスさんまで! ってあんたは関係ないでしょーが!』

ってヨナもこつとをみながらうなずくのはやめろ。

いつも真剣な人に冗談言われたら誤解するわ。

「冗談ですよ、気を悪くしないでください」

「……悪いな」

『へーへー心の籠ったお言葉ありがたく受け取っとくよ』

「そついえば、貴方は異世界から来たのだと言っていたかしら？」

今度はプリーさんだ。

珍しいな、普通に話しかけてくるなんて。

失礼だなんて思っではいけない。

『そつつすよ』

意図の読めない質問に軽く身構えてしまう。

「以前聞きそびれていたのだけど、異世界にはどんなお菓子があるのかしら？」

プリーさんはプリーさんでした。

ドストレートにプリーさんでした。

『種類なんかは数えきれないほどかな？

つつても俺が作れるのなんてたかがしれてるしなあ……』

皆様お忘れかと思いますが、俺の特技というか趣味はお菓子作りで  
ございます。

今のところ居候先を見つけることにしか役にたっていないエア特技  
だけでも。

大概のテンプレ展開だったらもつと目立つ特技があったりするんだ  
ろうなあ。

……お菓子作りの道に突き進んで行くべきか？

「お菓子を作る精霊さん」——なんて「ぷりていー」で「きゅあ

きゅあ」な響きだろう。

「そんなことない、ミルフィーユという菓子は美味しかったぞ」

リンのフォロー？が俺を現実に取り戻す。

「ミル……？乳製品ですか？」

『薄く伸ばしたパイ生地をたくさん重ねたパリパリ食感の新しいお菓——』

「この作戦が終わったら食べました」

プリーさん文法がおかしくなってる。

食べたいじゃなくて食べましたになってるよ！

下宿先の菓子屋さんの親父さんは俺作の菓子を大分気に入ってくれており、いくつかは店頭に並んでいる。

この世界に来てから人に食べ物を振舞うことに楽しさを覚えたのでそれ自体には全然不満はないんだけどさ。

『んじゃまー期待してて』

「よおっし！さっさと終わらせて帰りましょう！ー！」

わーい、プリーさんキャラ崩壊！。

『ミフルもな』

「俺もいいのかっ？」

そりゃあ広いとはいってもこんな空間で会話に入りたそうにしてたら俺でも気がつくさ。  
ってか楽しく話してる俺らだけど今から命がけで何かするって感じしないな。  
演習ってのは、リンから聞いたたり俺が調べた限り人死にが当然のごとくでるようなものらしいのに。

「もうそろそろ着きます、準備を」

ミフルが告げるまでもなく、皆分かっていた。  
戦場が近付いていることを。

空気はどことなくピリピリとしていたし、俺はマナを感知していた。  
それもこの森から発せられるマナとは別に。  
おそらくは戦闘で魔法を使っているのだろう。

『ティーちゃんは大丈夫かな？』

「あいつは今年はおくまで見学だから危険な目に遭うことはないさ」  
ふと呟いた俺にリンが答えてくれた。

「……では目標地点に到着次第、一気に前線を抜ける」  
あらかじめ話し合っていたことを確認するようにヨナが言った。  
そのまま少し待つ。

「降ります」

風を切って空をかけていたゴーレムが戦闘区域の少し前にあたる木が開いたところに着陸した。

皆が降りるとミフルのゴーレムはマナとなり、大地に還った。

マナの滾るような感じも、戦いの空気も近くに感じる。

……なんか俺含めて急に真剣になったような説明だけど実際はそんなことなかったりする。

空気はピリピリしてるけど（ミフル以外は）全然そんなこと気にするようなタマじゃなかった。

俺とリンは相棒がいるってんで無根拠に安心してたし、（ミフルを除いた）士官学校メンバーも平時と変わらない。

ヨナは淡々と。

アリスさんは飄々と。

ブリーさんはもぐもぐと。

……この中のどれかにツツコミポイントなんて無い、きっと無い（自己暗示）！

「——では、射線上から退避は完了したんだな。  
トキタやってくれ」

どこかに連絡していたヨナが俺に言う。

先程、ヨナは前線を抜けると言っていたがそのキーパーソンは俺だったりする。

そう！

久しぶりの見せ場ってわけさ！

え？今まで俺に見せ場なんてあったのかって？

あったっけ……？

あー、なんか空しくなってきた。

『りょーかい』

まあ、空しいからって役割を放棄することなんて出来ないんだけど。とりあえず魅せてやるぜ（キリッ  
ポジティブシンキングで行こう。

『皆は少し下がってて』

俺は今から「魔弾」を放つ。

工程は簡単だ。

思いつきしマナを込めて撃つだけの簡単なお仕事。  
両手を前に出し、マナを集める。

特訓の成果もありすぐに直径三メートルほどの球体が出来上がった。  
名付けて「カナタスペシャル・バーストモード魔弾・大」！

まだ大きくできそうだけどこんなもんでいいかな？

『目標を蒸発させる』

球体は地面と木、ともかく触れたものをのみ込みつつ駆けて行った。  
おかげで目の前には道が出来あがっていた。

『じゃ、行きましょう』

「……あ、ああ」

あれヨナの声が少しうわずってる？  
リン以外、皆微妙な顔してね？

『もうちょつとおつきい方がよかった？』

「いや、十分だ。」

……というかやりすぎだ」

そっかな？

『そりゃあ「魔弾」のお陰で数キロ先まで道が出来てるけどそんなにたいしたことしてないよ？』

「」「」「……」「」「」

無言が突き刺さる。

リンはこれでもかとドヤ顔がましているけど。

『……やっちゃったぜ』

「……行くぞ」

スルーされただとな？

と心のうちで突っ込みつつ俺たちは動き出そうとした。そうしようとした。

突然だ。

突然、「魔弾」で作った道の前にナニカが立っていた。誰一人として、その接近に気がつかなかった。

ヒトの形をしたナニカ。

一瞬で皆、臨戦態勢に入った。

なんだかわからないけど敵だということとは理解出来た。

ナニカと対峙してもその全貌はわからない。

顔もない、薄っぺらなそいつ。

ただヒトのような形をしている。

何で体が成っているのは分からないが、普通のモノではないのだろ  
う。

「……魔物か？」

ヨナが双剣を構えたままポツリとこぼした。

『ヨナあれが——』

俺が喋った瞬間そいつは笑った。

目も鼻も頬も口も眉も何も何も無い、ソレがケタケタと笑う。  
なんだこれ、純粹に怖い。

ソレには顔なんて無いはずなのに、ソレは俺を見た。

『啞あ鳴、美イツケタ』

そして、そう言った。

直後俺たちの足元に魔法陣が浮かび上がる。

—— マナが見えなかった！？

魔法陣が発光した瞬間、地面が消え去るのを感じた。

『な！？リン！』

咄嗟にリンへと手を伸ばす。

「カナタ！」

体が天へ、今度は右へ、様々な方向に落ちていくのを感じる。  
それに抗うようにしてリンへと向かう。  
幸いリンも俺へと向かってきてくれる。

あと少し、あと少し……！

お互いに手を伸ばして掴めないなんてテンプレ的展開になってたまるか！

もう、少しっ！

「カナタっ——」

『リンっ——』

森の広場で、ソレは笑っていた。  
けたけたけた、と嬉しそうに。

『輪たしノウん命のヒト』

それだけ言っと、ソレは霧散した。  
誰もいなくなつた森の広場には赤い瞳のような宝石が落ちていた。

第27話 「フォーリンダウン・キャッスル」(前書き)

わけのわからんたいとるー。

## 第27話 「フォーリンダウン・キャッスル」

「カナタっ——」

『リンっ——』

お互いに手を伸ばし、近づく。

あと少し、あと少し……！

体が様々な方向に引つ張られ、地面もない。

見える風景はさっきまでの森ではない。

まるでどこかのお城のような廊下が流れて行っている。

俺は景色のとおりに動いている感覚は無いから見ているものがポスターだといわれても納得できる。

さっきまでこんなマナを感知できなかったのに。

こんな状況だけど、いやだからこそ今リンと離れるのはヤバい気がする。

精一杯リンに近づく。

向こうも少しずつ、近くに来る。

——よしっ、手が届い……。

唐突に回廊が終わった。

「っ、終わった……？」

カナタっ？ 離れてしまったのか!？」

『下を見てくれると、とっても嬉しいなって』

さて、こういふときのお約束ならば主人公の手がヒロインの胸とか

にあたって

「きゃ！どこ触ってんのよ！？」的なドキドキイベントが起きて当然だろう。

当然だ。

ん？ 漫画の読みすぎだろ、とか言われたってお約束はお約束だ。

俺は間違っていない！……じゃなくて。

どうしてわざわざこんないらん説明をするのかと言えばお約束<sup>もっそう</sup>とおりになっていないからで。

俺はリンの下敷きになっていた。

そうだ、ここまではいい。

ここまではお約束どおりだ……がしかしだ。

リンが立っているのは俺の顔面の上だった。

あーあ、やっぱり俺ってばセオドア先生がいつか言ってたみたいにヒーローって柄じゃないわー。

そして人間の頭の上に立って平然としてるなんてどんなバランス感覚してんだよ、リン。

「きゃ、すまん！」

……可愛い驚き声が聞こえたから満足しよう。

その声とともにリンは俺の上から退いた。

ちなみにリンはズボンなんで「しましま……？」「どこ見てんのよ！」「イベントも起きなかったよ。」

「ほら」

『とんくすー』

俺は手を貸してもらい体を起こし、やっとこさ周りに気を向けた。

ここは……城？

『ええと、とりあえず怪我は無い？』

「ああ、私は大丈夫だ。それにしてもここは……」

『城、だよな』

俺たちは二人だけで石造りの吹き抜けに立っていた。

先程のわーぷ？中に見た廊下と同じ作りだ。

なかなか長い階段が吹き抜けの中央から上に伸びており、その先には三メートルほどの巨大な扉がある。

他にも小部屋のような扉はあるがそれだけが圧倒的な存在感を放っている。

地面には高価そうな赤い絨毯が敷き詰められ、壁には色とりどりの絵画が飾り付けられている。

窓は無いが天井近くの壁は一面ステンドグラスになっておりそこから色とりどりの光が落ちてきている。

ここまでマナを感知することはなかった。

『そんでもってすんげー豪華だね』

「ああ」

周りには俺たち以外の人影はない。

『みんなともはぐれちゃったか……まあ、大丈夫っしょ』

「……その信頼はどこから来るんだ」

『信頼ってか、心配しようがないしね。』

それにそんな余裕ないかもしれないじゃん？」

俺たちは魔王城を探していた。

そして、今俺たちがいるのは何処かの城。  
関係ないと断じることとはできないと思う。

「まあ、そうだな。

それにしても、もしかするとここが魔王城か？」

『かもね！』

それにしちや趣味の良い城だけど』

と、鈍い音をたてて巨大な扉が開いた。  
入ってこい、と言わんばかりに。

『行く？』

「行ってみるか」

俺は剣を抜く。

何があるか分からないが扉が開いたということはその向こう側には  
誰かがいるのだろう。

もしくはナニカが。

マナが見えない以上魔法的な罠はない。

俺はリンの前に立ち、庇うようにして階段を上る。

…… ゆっくりと時間をかけて階段を上ったが結局何も無かった。  
扉の向こうはカーテンで覆われており覗くことはできない。

『俺が先に入るからリンはそのあとに』

「……了解」

不服そうにリンは答えるがこれは俺を心配してのことだろう。

『ありがとう』

リンに言葉を残し、意を決して幕の向こうへと踏み出した。

『……は？』

幕を抜けた先の光景を見て、あほみたいな声が口からこぼれた。

「いらっしやい、紅茶でもどう？」

広間の向こうにはある女性が紅茶を飲みながらケーキを食べていた。女性は黒いゴスロリ衣装に身を包み、穏やかに微笑んでいる。それだけで結構な異常風景だけど俺の驚きは別にある。

『いやいやいや、あんたこんなところで何やってんすか、校長！？』

なぜに校長がいるんだよつ。

何が起きるかわかんねーし若干命かけるつもりで踏み込んだってのに！

もしかしてここは魔王城じゃないってこと？

またあの人の気まぐれかー！？

校長は一人脳内突っ込みをする俺を見て不思議そうに見ている。

今の俺を外から見たら黙ってるだけなので疑問を覚えているのだろう。

「一人であたふたと楽しそうだね」

外から丸々ばれてました！

『……で、マジに何やってんですか？  
それとここどこです？』

「私は貴方を待っていたの、運命のヒト。」

そう言つとゴスロリ校長は紅茶を置き立ち上がる。

「俺の城へようこそ、異邦の精霊」

## 第27話 「フォーリンダウン・キャッスル」(後書き)

ご覧いただき、ありがとうございます。

前回から少々間がいてしまいました、すみません。

今回は短めですがつきはもちっと早い更新になるかと。

それではまたのお越しをお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6180u/>

---

精霊からの世界の見え方

2011年12月18日12時47分発行